三橋貴明

■ みつはし・たかあき

中小企業診断士、経済評論家、作家。１９６９年生まれ。東京都立大学（現・首都大学東京）経済学部卒業。外資系ＩＴ企業など数社に勤務した後、中小企業診断士として独立。大手インターネット掲示板での、韓国経済に対する詳細な分析が話題を呼び、『本当はヤバイ！ 韓国経済』（彩図社）を出版、ベストセラーとなる。

著書に、『ぼくらの日本』（扶桑社）、『グローバル経済に殺される韓国 打ち勝つ日本』（徳間書店）、『真説 日本経済』（ベストセラーズ）、『世界でいちばん！日本経済の実力』『日本人がだまされ続けている税金のカラクリ』（以上、海竜社）など多数。

また、さかき漣氏との共作に〝小説仕立ての経済解説書〟という新たな試みで大ヒットした『コレキヨの恋文』（小学館）がある。

■ ブログ「新世紀のビッグブラザーへ」

http://ameblo.jp/takaakimitsuhashi/

真冬の向日葵

MAFUYU-NO-HIMAWARI

新米記者が見つめた
メディアと人間の罪

三橋貴明
MITSUHASHI TAKAAKI
さかき漣
SAKAKI REN

海竜社

真冬の向日葵

――新米記者が見つめたメディアと人間の罪

目次

主要登場人物――真冬の向日葵

一之宮雪乃　慶和大学学生。マスコミ志望。
朝生一郎　第92代内閣総理大臣。
経済政策に長ける。
中井昭二　朝生内閣の財務大臣。朝生の盟友。
中井よう子　中井の妻。
霧島恵之進　第84代内閣総理大臣。
総理在任中に急死。
霧島さくら子　恵之進の娘。
自民党所属の衆議院議員。
一之宮清・和子　雪乃の父と母。
清は地方銀行に勤務。

佐倉あや　雪乃の学友。アナウンサー志望。
山口若菜　雪乃の学友。新聞記者志望。
望月翔　早稜大学学生。雪乃の恋人。
原田啓治　興産新聞社政治部デスク。
津和野智子　興産新聞社政治部記者。
神庭亮一　興産新聞社政治部カメラマン。
財部晋造　第90代内閣総理大臣。
柳田良夫　財部内閣の厚生労働大臣。
松本利文　財部内閣の農林水産大臣。
２００７年５月28日死去。
久谷一生　財部内閣の防衛大臣。
２００７年７月３日辞任。
赤木和彦　財部内閣の農林水産大臣。
２００７年８月１日辞任。

森木明　第85・86代内閣総理大臣。

「財部・朝生おろし」に加担。

青田俊雄・中山修直　自民党主流派の議員。

「財部おろし」の推進者。

片河いつき　自民党広報局長。

橋元　第82・83代内閣総理大臣。

緊縮財政により、経済を低迷へ導く。

大泉　第87・88・89代内閣総理大臣。

福本義男　第91代内閣総理大臣。

小川　民主党元代表。

鳩川　第93代内閣総理大臣。

偏向報道に乗じ、政権交代を果たす。

氏本清次郎　国民テレビ（読解新聞の子会社）

会長。マスコミ界のドン。

渡会秀雄　読解新聞会長・主筆。氏本とともにマスコミ界の二大ドン。

八俣ひろみ　国民テレビ記者。

氏本の腹心の部下。

江崎千夏　読解新聞社記者。

浅比奈裕　毎旦デイリーニュースの総責任者。

丹下泰波　財務省主計局長。

玉林太郎　財務省国際局長。

中井の高校の同期。

篠塚直治　財務省財務官。

杉澤　中井の私設秘書。

津川マキ彦　財界の重鎮。

和多真　バチカン放送局局員。神父。

序章
政権交代の裏で

社内に、歓声が響く。

◆

２００９年９月１日。この日、日本国はまさに歴史的瞬間を迎えた。

時を遡ること1カ月強、真夏日であった7月21日。日本国内閣総理大臣・朝生一郎は衆議院解散を宣言した。これをもって、総選挙の幕が切って落とされたのである。

衆議院解散から投票日までの期間は、実に40日間にも及んだ。日本国憲法第54条において、『衆議院が解散されたときは、解散の日から40日以内に、衆議院議員の総選挙を行ひ、その選挙の日から30日以内に、国会を召集しなければならない』と定められている。つまり今回の40という数字は、憲法制定以来の最長記録であったのだ。

衆議院解散を受け、喜び勇んだメディアは報道合戦を展開する。それこそ、国内のあらゆる情報発信源が、〝政権交代選挙〟一色に染まったと言っても過言ではない。良くも悪

くも、日本列島に住む国民のほとんどが、その一票の行使について考えることとなった。
興産新聞の新入社員、一之宮雪乃は、新米ながら記者として世論に訴えかける役目を担っている。政治部で日夜奔走する彼女は、件の総選挙の取材を任されていた。

政権交代劇の興奮冷めやらぬ興産新聞社内、政治部フロア。雪乃は上司の原田啓治に向き合っていた。原田は面倒くさそうに雪乃に視線を投げた後、口を開く。
「確かにお前の言うとおり、俺たちが民主党寄りの報道をしたのは事実だ。だが、結局は国民が判断し、投票したんだ。報道機関が責められる謂れはない」
眼鏡の奥、一重の目が鋭く光る。その薄い唇を歪め、原田は続けた。
「……いや、それどころか、我々は常に正しいことをしてきたんだ。マス・メディアが報道し、有権者は報道を踏まえて判断し、自分の意志で投票する。つまりは、〝民主主義が、民主党を選んだ〟と言える。……誰も皆、民主主義が好きだろう？」
背を這い上がる冷たさを感じながら、雪乃は必死で言葉を探した。
「そんな、そんなのは、おかしいです。大変申し訳ありませんが、デスクがおっしゃることは、まるで詭弁のように聞こえます。民主主義の意味とは、まったく違うものではないでしょうか？　民主主義とは……」

原田の表情が、剣呑なものに変わりつつあるのに気付き、雪乃は慌てて口をつぐむ。言い返したい気持ちはあるが、上司にこれ以上くってかかれるほどの上手い文句も見つからない。

通り一遍な謝罪とともに頭を下げ、雪乃は廊下に出た。

興産新聞の堅牢な社屋の窓からは、東京の街の灯りが一望できる。雪乃は、自動販売機の前に設置されたベンチに腰かけ、エビアンの冷たいボトルを額に押し当てた。バッグから携帯を取り出し、またすぐに戻す。

唇を噛みしめる雪乃の脳裏には、徐々に、ある男性の後ろ姿が浮かんできた。綺麗に伸びた背筋と長い脚。仕立ての良いスーツにその身を包み、葉巻の煙をくゆらせながら静かに語る――朝生一郎。

雪乃の中の映写機から映し出される朝生は、彼女を振り返るとそれまでの硬い表情を一変させ、笑顔を見せた。全ての暗雲を吹き飛ばすような、力強い笑み。

まるでヒマワリみたい、と、雪乃は思った。

第一章

混迷の序曲

雪乃

2006年9月から07年9月までと、1年しか継続しなかった財部(たからべ)政権。財部晋造(しんぞう)は「戦後レジームからの脱却」という一大目標を掲げ、「美しい国、日本」をスローガンに、それまでタブーとされていた数々の政策に手を付けた。

そして、07年9月12日。財部総理は「内閣総理大臣及び自由民主党総裁を辞する」と、記者会見において退陣表明を行う。

＊　＊　＊

ベッドの中で浅い夢を見ていた雪乃の耳に、急にやかましい音声が飛び込んできた。目

覚まし代わりにタイマー設定してある、テレビの電源が入ったのだ。画面から、男性アナウンサーと女性コメンテーターの議論が聞こえてくる。

そういえば昨夜は、飲み会から酔って帰ったまま、寝入ってしまったのだ。

雪乃は二度三度伸びをした後、なんとかベッドから起き出した。そのまま這(は)いずるようにキッチンに向かい、冷蔵庫の中からアイスティーのペットボトルを取り出し、ごくごくと飲む。今日も残暑厳しく、パジャマ代わりのキャミソールとショートパンツが汗で湿り、体にまとわりつく。

トレイに載せた朝食を手にリビング兼寝室に戻り、ソファにくたっと座り込んだ雪乃は、ぼんやりとテレビ画面を眺めた。

『やっと辞めた、という感が否めませんね……』

『ホントよね！　それにあの辞任会見、あれが一国の首相のする会見なの？　無責任にもほどがあるわ。他国に対して、恥ずかしくないのかしら』

ニュースとワイドショーを掛け合わせたようなこの番組「おはようワイドモーニング」は、月曜から金曜の朝、午前9時から放映されている。視聴率も良く、長寿番組の一つに

数えられるそうだ。今朝はどうやら、財部総理退陣について掘り下げているらしい。
今年の夏、つまり２００７年7月29日に実施された第21回参議院議員通常選挙において、財部晋造首相の率いる自民党は、大敗北した。獲得議席はわずかに37議席。これは、89年の第15回参議院選挙以来の惨敗である。自民党は１９５５年の結党以来、初めて、参議院第一党の座を民主党に譲り渡すこととなった。そしてその責任を取り、財部は重い腰をあげ、辞任表明をしたのだ。
辞めるのはいいが、いかんせん時期が遅すぎる、と、雪乃は思う。
昨日コンビニで購入したサンドウィッチとリンゴをかじり、冷たいアールグレイを飲みながら、雪乃は財部退陣についての感想を頭に巡らせた。一応マスコミ志望の彼女は、政治動向には人並み以上の興味を持つ。もちろん、大学でも報道関連の講義を多数とっている。そのうち課題が出されるだろうから、早めに考えるに越したことはない。
思わずテレビに見入った雪乃がふと我に返ると、すでに1時間以上の時間が経っている。
雪乃が立ち上がりかけた時、携帯が鳴り出した。雪乃の通う慶和大学の友人、佐倉あやかからのメール着信だ。

《今からすぐ出てきて！　藤沢のスタバにいるよ♥》

〈なんで？　昨日飲み会だったから　今日はやめておく〉

《きんきゅうじたい（／□≡＼）　エーン‼　ゆきのちゃんにしか言えないの。。。　来てよ〜（╯д・。）　グスン。。。》

〈了解　ちょっと待ってて〉

携帯を置くと、雪乃は素早くネイビー・ブルーのコンビネゾンに着替えた。雪乃は背が高く細身で、モデルみたいだと言われるほどの体型なので、こういった服装がよく似合うのだ。アッシュ系のブラウンに染めたショートカットの髪は、寝癖でハネまくっていたため、軽く濡らしてからワックスでごまかす。大きめのかごバッグに、携帯や財布、化粧ポーチなどを投げ込むと、雪乃はマンションを飛び出した。

雪乃は藤沢駅にごく近い、１ＬＤＫのマンションに一人暮らしをしている。駅前のスタバまでは走れば2〜3分で着くのだ。見慣れたスタバの看板が雪乃の視界に入ってきたところで、また携帯が鳴った。あやからのメール着信だ。雪乃が二つ折り携帯を素早い動作

で開いてみると……

《ウソでした★(*゜▽゜)ノ★　江島神社に行くので、一緒に行ってね★》

雪乃がイヤな予感とともにスタバの方に視線をやると、店内からあやが元気に手を振っているのが見えた。彼女の隣には、やはり慶和大学の友人である、山口若菜もいる。

「ゆきの〜、おそーい」

「お疲れ、雪乃」

友人たちのもとに、雪乃は息を切らせて到着した。

「めちゃめちゃ急いで来たよ？　……昨日も飲み会で、超寝不足だってのに。てゆうか、二人とも藤沢で何してたの？」

雪乃は額の汗をぬぐい、同じ総合政策学部の友人、佐倉あやと山口若菜の顔を見た。あやは小柄で可愛い美少女タイプで、若菜は地味ではあるが整った知性派美人である。三人とも、マスコミ就職を目指す大学3年生ということに変わりはないが、あやはアナウンサー志望、若菜は新聞記者志望だ。一方、雪乃はと言えば、ただ何らかのかたちで報道に関わりたいと考えているだけで、確たる進路は未だ決まっていない。

若菜が気の毒そうに雪乃を見上げ、
「私は買い物に来てたの。ほんとはサクッと終わらせて帰るつもりだったんだけど、あやからお願いされちゃったからね。急きょ、来たとこ」
と答えた。
「わたしと同じ状態かぁ」
雪乃はとりあえず汗を抑えたく、アイスティーラテを注文する。飲み物を片手に雪乃がテーブルに戻ると、若菜が尋ねてきた。
「飲み会って、いつもの『マスコミ就職を目指す学生の情報交換会』のこと？」
「うん、それ。みんな熱心だから、参加してるだけで価値があるんだよね。新しい情報がたくさん集まるし、先輩の意見も聞けるし」
雪乃の返答を聞き、若菜とあやは顔を見合わせた。くふっと、あやがカワイイ笑いをこぼす。
「それって、つまり合コンでしょー」
「違うよ。情報が少しでも欲しいんだもの、必死ってカンジ」
答えながら雪乃は、少々複雑な気持ちになった。
突出した個性を持たない雪乃は、お世辞にもマスコミへの就職が有利とは言えなかった。

それなりにオシャレでスタイルはいいが、派手な美人ではないし、明晰(めいせき)な頭脳の持ち主というわけでもない。どう考えても2歩も3歩も出遅れている雪乃にとっては、学生同士で意見交換する時間は重要だった。どこにチャンスが落ちているか、分からないからだ。

「とりあえず、今日は何だっけ。……江島神社に行くって？」

雪乃が尋ねると、あやは嬉しそうにしゃべり出す。

「そうなの！　昨日あたしね、テレビのパワースポット特集見てて、でね、江島神社が、縁結びで有名なの～」

「そうなんだ。若菜は行ったことある？」

ロングストレートの黒髪をかきあげながら、若菜は答える。

「行ったことはあると思うけど、記憶に残ってない。地元民はあまり行かないのよね、そういう観光地」

「ふぅん。……でも、あや、彼氏いるじゃん。それでも縁結び、必要なワケ？」

雪乃のツッコミを受け、あやはカワイイ上目遣いで、友人を見た。

「それはそれ、これはこれ、でしょ～。てゆうか、雪乃だって、なんか、今の彼氏、ぱっとしないじゃない？　若菜なんて、もう3カ月くらい彼氏いないし！　だから行こう、ねー」

かなり失礼なことをサラッと言ってのけるあやに、結局二人は降参し、今日は江島神社観光となってしまった。雪乃は神社に興味などないのだが、もう少しで夏休みも終わり、と考えると、少し行ってみたい気がした。

今年の夏は、彼氏の翔がずっとインド旅行に行っており、雪乃にとっては退屈な日々だった。サークル仲間で飲み会やカラオケなどには頻繁(ひんぱん)に行ったのだが、いわゆる〝夏っぽい〟遊びが皆無の夏休みだったのだ。

小田急線・片瀬江ノ島行に乗車すると、三人は話しやすいよう、扉付近に陣取った。雪乃がふと上を見ると、電車の中吊り広告に、首相の財部の顔がある。なんだか酷(ひど)く険悪な表情をしている。

「財部、辞めたね。ニュース見た？」

雪乃の質問に、あやは喜んで食いついてくる。

「見た〜！　辞任会見、超ウケた〜。タカラべ、涙目だったよね、ウケル」

「わたし、さっきあやに呼び出されるまでニュース見てたんだけど。もう、スゴイあきれた。あんなのが首相できるなんて、日本の政治家って、どんだけレベル低いの？」

「タカラべの顔としゃべり方が生理的にイヤ！　あたし、付き合うのとか、絶対ムリ〜」

少し考えた後、若菜も口を開く。

「財部さんがどうこう言う以前に、閣僚のレベルが低かったからね……。財部さん本人のしたことって、あまり印象に残ってないと思わない？　どういう政策を通したか、全然話題にならない。つまり、退陣の理由は、首相の指導力・政策力不足と、閣僚の失態ね」
「そういえば、そうだよね。財部の通した政策、ほとんどない気がする。あ、なんか、日の丸と君が代を強制するとかしないとか騒いでた記憶があるけど……。あれなんか、意味が分かんなかったし。グローバル・スタンダードを目指して各国が進んでいる時代に、時代錯誤もいいとこ。だいたい、そんなこと強制してる暇があったら、もっとやるべきことたくさんあるでしょ、っていう」
　ここまで述べて、雪乃ははたと気が付いた。これでは、先ほどワイドショーでコメンテーターの言っていた意見そのままである。
　若菜は続ける。
「財部さんの存在感の薄さに比べて、閣僚は悪い意味で印象深いよね。厚生労働大臣の『女性は子供を産む機械』発言に始まり、農林水産大臣の事務所費問題――あ、これは、いわゆる『ナントカ還元水』問題ね。その後は防衛大臣の「原爆投下はしょうがない」発言、あとは、えーと……あ、後任の農水大臣の『絆創膏(ばんそうこう)会見』か。この人も事務所費が不明瞭だった。今思い返しても、全体的にお粗末って感じ」

「あー、あったね。並べてみると、ほんとバカみたい。わたしは特に、女性は産む機械、ってのが許せない。女性蔑視すぎない？　あの大臣に、うちの大学でフェミニズム論を受講させてやりたいわー」

雪乃は大学でジェンダーに関する講義もとっており、熱心に勉強していたため、この問題には特に腹を立てていたのだ。いくら不妊治療しても子宝に恵まれない夫婦も多く、また、女性には〝子供を作らない〟選択肢もあるというのに、この大臣は押し付けが過ぎる。

その後も政治談議を行っていると、目的地にはすぐに着いてしまった。テンションが上がったらしいあやは、駅舎から往来へ勢いよく飛び出した。が、10秒後には顔をしかめて、振り返る。

「暑すぎる……もっと近くに作ればいいのに！」

あやの苦情ももっともである。片瀬江ノ島駅は、江の島その場所にあるのではなく、かなり手前に位置している。駅舎から吐き出された観光客は、陸と島を結ぶ長い橋を渡ることを余儀なくされるのだ。あやは麦わら帽子を深くかぶり直し、一気に不機嫌な声を出す。

「だいたいさぁ、神社を駅前に作ればよかったんじゃない？　観光地なんだから、サービス精神発揮してほしいんですけどー」

これには雪乃も激しく同意である。

「江ノ島駅、って、詐欺じゃん……。江の島は遥か向こうだよ……歩くの？　ここを？」
若菜も明らかにヒキ気味の顔になっている。結局全員が萎えているのだが、ここまで来てしまった以上引き返すワケにもいかず、三人は大橋の上を歩き始めた。
橋の両側には、海が大きく広がっている。他の観光客が海景をバックに写真を撮っている場面に、幾度か出くわした。しかし、真夏の直射日光は、人をいやおうなく消耗させ、三人は景色を楽しむどころか、歩くだけで精いっぱいである。それでも、露出度の高いキャミワンピを着ているあやと、こちらも手足が全部出るコンビネゾンの雪乃は、まだ良かった。それに比べて若菜は、黒の半そでカットソーに濃い色のジーンズを合わせているため、かなりの苦行レベルである。
江の島に着く頃には、三人の普段のおしゃべり振りはすっかり鳴りをひそめ、完全に無口になってしまった。そのうえ、神社前にはさらに、急こう配の階段が彼女らを待ち受けていたのだ。当然のごとく階段を上るのを避け、エスカーのりばに直行する。境内で無事にあやがお守りを手に入れると、速攻で神社を引き上げることとなってしまった。
帰り道、あやは参道沿いの茶店でソフトクリームを買い、もくもくと食べ始めた。若菜も雪乃もかき氷を注文し、しばらく、しゃくしゃくと氷の音のみ響いていたが、元気を少し取り戻したのか、あやがやっとしゃべり出した。しかし……

「なんか、もう二度と来なくていいって感じ」
そう言って、手の中の縁結びお守りを弄(もてあそ)んでいる。あやの口ぶりに、雪乃はちょっとイヤな気分になった。
今日はあやのワガママで、急きょ、江の島に来たのだ。興味もないのに付いてきた雪乃と若菜の手前、少しは喜んで欲しいものなのだが……。あやについては、たいていの場合、こうなのだ。周囲は常にあやを〝ヒメ扱い〟し、あやもそれを当然と受け取っている。雪乃は、面倒なのでいつもその場の空気に合わせるようにしていたが、時折、もう少し気を使ってもいいのに、と思ってしまうのだ。
夏季休暇も、残すところわずかである。店先の風鈴が微(かす)かに揺れるのを、雪乃は眺めた。

財部政権の終焉

06年9月から07年9月までと、一年しか継続しなかった財部政権。後から振り返ると、財部政権の終焉（しゅうえん）こそが、日本国の政治的混乱の口火を切ったと言える。

財部政権は「戦後レジームからの脱却」を掲げ、「美しい国、日本」をスローガンに、それまでタブーとされていた数々の政策に手を付けた。「美しい国、日本」とは、「活力と機会と優しさに満ちあふれ、自律の精神を大事にする、世界に開かれた美しい国、日本」を意味している。財部政権は、戦後の自虐的な空気を否定し、日本を肯定することで、国家を新たな段階に推し進めようとしたのである。

普通に考えれば、日本国民が日本を肯定することは極（ごく）当たり前のことである。もしも日本を否定したいのなら、日本国に住み、家の前の道路や水道を使用し、さらに日本円を使

用することもやめるべきだ。道路や水道は、日本という「国家」が国民のために整備したインフラストラクチャーである。また、日本円という現金は、日本政府の子会社である日本銀行が発行した借用証書だ（実際、日本円の現金の発行総額は、日本銀行の貸借対照表に「負債」として計上されている）。

しかし、戦後の甘えた構造に飼いならされた一部の日本国民、特にマスコミは、軽々しく国家を否定し、自らの祖国を攻撃することを続けてきた。祖国である日本を批判することが、あたかも格好いいことであるかの如く報道してきたのである。日本国では「国益」という言葉すら、人々の口に上ることが少なくなってしまった。

財部政権はこの種の空気を否定し、日本国の国益を強く謳（うた）った。結果的に、左翼的、反日的な傾向が強い大手マスコミから猛攻撃を受け、07年参議院選挙における敗北に追い込まれたのである。

財部政権が実現した、それまでタブー視されてきた政策として、以下の四つが挙げられる。

２００６年12月15日　教育基本法成立
２００６年12月15日　防衛庁設置法等改正

2007年5月14日　日本国憲法の改正手続に関する法律成立
2007年6月27日　教育改革関連三法成立

教育基本法及び教育改革関連三法（学校教育法、教育職員免許法及び教育公務員法、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正）は、「公共の精神」を尊ぶ道徳教育の推進、日本国の「伝統と文化」を尊重する「愛国心」的コンセプトの明文化、小学校及び中学校について、義務教育機関としての明文化、それまでは無期限だった教育免許を更新制に変更するなど、戦後の教育を否定する傾向が強かった。

『教育の目標（教育基本法第2条）
教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。（中略）
5　伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと』

「愛国心」とは書いていないが、「我が国と郷土を愛する」という言葉が入っている。さ

すがに愛国心とそのまま書いてしまうと、自虐教育に冒されたマスコミや国民が猛反発する可能性が高かった。この時点で現代日本の異常性を認識できるのだが、いずれにせよ財部政権による教育基本法改正時に「国を愛する」という文言が入ったことは、当時の情勢から見ると画期的であった。

また、「教育職員免許法及び教育公務員法」成立により、教員の免許が更新制に変わり、日教組を中心に猛烈な勢いで反財部政権の動きが広まっていった。そもそも、教育免許の更新制は「不適格教員の排除」が目的だったのだが、日教組からの反発が強く、実際には「免許更新時に、教師に講習の受講を義務付け、指導力を向上させる」に主旨が変わってしまった。これは財部内閣の早期退陣により、法律の本来の意図を達成することができなかったためである。しかし、その後も日教組は、更新制そのものに反対を続けている。

さらに、防衛庁設置法等改正により、防衛庁を防衛「省」に昇格させたことも、「戦後レジームからの脱却」の意味合いである。２００６年までの防衛「庁」は、内閣府の外局の一つに過ぎなかった。日本国の安全保障を統括する省庁が、総理府・内閣府の外局という異様な状況が続いていたのである。防衛「庁」は、国民の安全保障をないがしろにする「戦後レジーム」の、まさしく象徴のような存在だった。

07年1月に防衛庁が防衛省に生まれ変わったことで、日本の国防は独立した行政機関に

より担われることとなった。防衛省の責任者は「防衛大臣」で、内閣の閣僚が務めることになる（防衛庁時代は内閣総理大臣が責任者を兼任していた）。

そして、いわゆる護憲派の人々が最も毛嫌いした財部政権の実績こそが、07年5月に成立させた「日本国憲法の改正手続に関する法律」であった。日本国憲法には、

『第9章　改　正

第96条　この憲法の改正は、各議院の総議員の3分の2以上の賛成で、国会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければならない。この承認には、特別の国民投票又は国会の定める選挙の際行はれる投票において、その過半数の賛成を必要とする。

2　憲法改正について前項の承認を経たときは、天皇は、国民の名で、この憲法と一体を成すものとして、直ちにこれを公布する』

と、改正手続きが記載されている。それにもかかわらず、日本には、国民投票を実施するための法律が存在しなかったのだ。憲法に具体的な「国民投票」のプロセスは記載されていないため、別途、法律で定める必要があった。

財部政権以前は、憲法9条をご神体のように崇（あが）める護憲派が、日本国政府による「国民投票法」の成立を認めなかった。国民投票を実施する法律が存在しなければ、憲法は永遠に変更されない。彼らのご神体である憲法9条も、変更される可能性すらなく、守られる

こととなる。

ところが、財部政権は「日本国憲法の改正手続に関する法律」を成立させ、憲法改正に道を開いた。当然ながら、護憲派の怒りたるや凄まじかった。

本来、憲法とは、時代に合わせて改正されていくべきものである。主要先進国（アメリカ、ドイツ、フランス、イタリアなど）は、何十回と憲法の改正を繰り返している。日本国内の護憲派の人々は、普段は「世界に見倣って、日本も」と、頻繁に「世界」「世界」と叫んでいる割に、こと憲法改正についてはグローバル・スタンダードを無視する。見事なダブル・スタンダードである。都合が良い時は「世界に見倣って」と言いつつ、都合が悪い時には「日本は日本のやり方で」と述べるのが、戦後の日本を蝕んだ左翼系の国民、及びマスコミの特徴である。

財部政権が左翼、日教組、護憲派の神経を逆なでする政策を次々に通したことで、マスコミによる総攻撃が始まる。それ以前にも、マスコミは前述の財部政権の実績について、まともに報じようとしなかった。そのうえさらに、閣僚の不祥事問題を創り出すことで、政権弱体化を狙ったのである。

まずは、07年1月27日。島根県内で行われた自民党県議の後援会の集会で、厚生労働大臣柳田良夫が語った言葉が問題視される。

「15〜50歳の女性の数は決まっている。産む機械、装置の数は決まっているから、あとは一人頭でがんばってもらうしかない」

いわゆる「女性は子供を産む機械」発言である。これが大々的に報道され、マスコミ及び野党の総攻撃が始まった。厚生労働大臣は、少子化問題に絡め、

「なかなか女性は一生の間にたくさん子供を産んでくれない。人口統計学では、女性は15〜50歳が出産する年齢で、産む機械と言っては何だが、装置が、もう数が決まっている。少子化問題を解消するには、産む役目の人が、一人頭で頑張ってもらうしかない。一人頭でたくさん産んでくれなければ、出生率は上がらない」

という主旨の発言をしたのだが、マスコミは「産む機械」の部分のみをクローズアップし、

「厚生労働大臣は女性を『産む機械』と呼んだ。女性蔑視も甚だしい」

と、大臣の辞任を求め、財部総理の任命責任を追及したのである。厚生労働大臣は、自らの発言について「不適当な表現」であったと謝罪をしたが、大臣辞任は拒否した。結果、国会審議が空転する事態になり、内閣支持率低下の一因となってしまう。

さらに2月6日の記者会見において、厚生労働大臣は、

「若い人たちというのは、結婚をしたい、それから、子供も二人以上持ちたいという極め

て健全な状況にいるわけですね」

と発言したが、今度は、「子供を二人以上持ちたくない人は、不健全なのか」と、マスコミや野党が激しく攻撃する始末だった。その後の日本の報道界に蔓延（まんえん）することとなる、言葉狩りが、このとき本格的に開始されたのである。

続いて、厚生労働大臣の発言問題の熱も冷めやらぬ3月5日。参議院予算委員会において、今度は農林水産大臣の松本利文（まつもととしふみ）が、事務所費問題で追及される。自らの資金管理団体の事務所を、光熱水費が無料であるはずの議員会館に設置しているにもかかわらず、500万円の費用を計上していたとされるものである。

農林水産大臣は、民主党の追及に対し、

「光熱水費は当然、主たる事務所の議員会館でかかった費用だ。使ったものをきちんと計上している」

「(光熱水費には)『ナントカ還元水』や、暖房とか別途そういうものが含まれる」

と釈明し、事態を混乱させた。さらに、農林水産大臣は、

「(自らの資金管理団体は)議員会館以外に他に事務所はない」

と答弁し、疑惑を沈静化させるどころか、逆に深めてしまう。

5月28日。農林水産大臣は、赤坂の議員宿舎で首を吊り、心肺停止状態になったところ

を発見された。現職閣僚の自殺は、日本国憲法下では初めての出来事である。
　農林水産大臣は複数の遺書を残していたが、後に財部総理に宛てたものが公開される。
「国民の皆様、後援会の皆様。私自身の不明、不徳の為、お騒がせ致しましたこと、ご迷惑をおかけ致しましたこと、衷心（ちゅうしん）からお詫び申し上げます。自分の身命を持って責任とお詫びに代えさせていただきます。なにとぞ、お許し下さいませ。残された者達には、皆様方のお情けを賜りますようお願い申し上げます。財部総理、日本国万歳」
　財部総理の任命責任が問われるが、疑惑自体は、当の大臣の自殺という痛ましい事件により、幕引きを迎えることとなった。
　マスコミによる政権閣僚への攻撃はさらに続く。
　6月30日、初代防衛大臣であった久谷一生（ひさたにかずお）が、講演で第二次世界大戦の敗戦に絡め、
「（アメリカが）長崎に（原爆を）落とせば日本も降参するだろう。そうしたらソ連の参戦を止められるということだった。幸いに8月15日で終わったから、北海道は占領されずに済んだが、間違えば北海道までソ連に取られてしまう。その当時の日本は取られても何もする方法がないわけですから、私はその点は、原爆が落とされて長崎は本当に無数の人が悲惨な目にあったが、あれで戦争が終わったんだ、という頭の整理で今、しょうがないな、というふうに思っている」

と発言し、総バッシングを受ける。マスコミは「防衛大臣が原爆を落とされたのはしょうがないと発言」と大々的に報じ、野党は被爆者団体と連携し抗議集会を開催、大臣辞任を求め始める。

結局、与党内からの批判の声も高まったことを受け、防衛大臣は7月3日に辞任した。結果、財部総理に対する任命責任追及の声は、さらに高まる。

その後も閣僚問題は続く。自殺した前任者の後を継ぎ、農林水産大臣に就任していた赤木和彦は、野党から事務所費問題で追及を受ける中、7月17日の閣議後の記者会見に、大きな白いガーゼと絆創膏を額と頬に貼った姿で登場し、国民を唖然とさせた。記者からは「どうなさったのか?」と何度も質問を受けるが、そのたびに新任の農林水産大臣は「大したことではない」「何でもない」と説明を拒否し、却って不信を高めてしまう。

農林水産大臣は7月24日に絆創膏を外した姿で登場し、

「医師から『毛包炎』と診断された」

と説明したが、国民の不信感は拭い去られないまま、直後に参議院選挙に突入。7月29日の参議院選挙で、自民党・公明党の与党は過半数割れに至る大敗北を喫するが、惨敗の一因が「農林水産大臣にある」と閣僚から批判の声が出た。結局、農林水産大臣は参議院選挙後の8月1日に辞任する。就任から、わずかに2カ月後のスピード辞任であった。

閣僚問題が次々に火を噴く中、財部政権に決定的な打撃を与えたのが「年金記録問題」である。07年5月以降、国会の社会保険庁改革関連法案審議において、社会保険庁がオンライン化したデータにミスや不備が多いことが明らかになった。社会保険庁の杜撰な年金管理は「消えた年金問題」と称され、国民の年金不信を高める。

年金記録問題検証委員会による報告書では、「消えた年金」（厳密には未統合記録）の数は5000万件に及び、主に社会保険庁幹部及び職員の「使命感のなさ」を主因としている。しかも、社会保険庁は「年金の納付記録は本人がよく知っているはず」という、現実を無視した裁定時主義を取っていた。本人が問い合わせてきたときに〝調べて修正する〟という、社会保険庁のいい加減な情報管理を委員会は明らかにしたのである。

「消えた年金問題」が勃発したのは、財部政権が公務員改革の一環として「社会保険庁」の民営化を検討していた時期であった。故に、〝社保庁の誰か〟が、政権に打撃を与えるため、〝自らの不祥事〟について野党側にリークしたのではないか、という説がある。社保庁の自爆クーデターを疑いたくなるほどに、財部政権下の年金問題の追及は唐突であり、かつその拡大スピードは急速であった。

7月29日の参議院選挙において、野党第一党の民主党は「年金問題」を争点に掲げ、「年金の杜撰な管理は『現政権の責任』である」

と、財部政権を激しく攻撃した。しかし言うまでもなく、年金問題は財部政権とは直接的関係はない。

相次ぐ閣僚問題や年金問題に足を取られ、自民党は選挙区の得票率で、民主党に10％近い差を付けられる大惨敗を喫する。結果的に、その後の日本は、政治混乱の源とも言える、衆参のねじれの時代を迎えることとなる。

選挙結果を受け、財部総理は内閣改造を決断する。

しかし自民党内では、参議院選挙の敗北を受け、青田俊雄（あおたとしお）、森木明（もりきあきら）、中山修直（なかやままさなお）ら有力議員たちから総理に退陣を求める声が出始めていた。もっとも、財部おろしには朝生一郎幹事長らが反対し、強く首相続投を主張したため、内閣改造後は次第に沈静化していく。

この頃から、財部総理は体調を崩すことが多くなり、ＡＰＥＣ（アジア太平洋経済協力）の諸行事に参加することもできなくなっていたほどであった。

そして、9月12日。財部総理は、何と国会における所信表明演説直後の記者会見において、

「内閣総理大臣及び自由民主党総裁を辞する」

と、退陣表明を行う。これをもって、日本政治はその後長期間続く、政治的混迷の中へと追い込まれてしまうのである。

炎天下の歓声

　後期日程の開始を数日後に控え、雪乃は買い物をするため新宿まで出ていた。藤沢から新宿までは、小田急線で一本である。藤沢始発の急行に乗れれば、たいていの場合座ることができ、時間も大してかからない。また、彼氏の望月翔がこの近辺に住んでいることもあり、雪乃は頻繁に新宿を訪れる。この日も慣れた様子で、セレクト・ショップを順に制覇していた。

　東口のアルタ前を通りかかると、凄い人だかりができている。少し驚いた雪乃は立ち止まり、群衆の視線が集まる先に目を向けた。するとそこには、街宣カーの上に立ち、マイクを握る男がいる。

　雪乃は目を凝らした。どこかで見た顔だと気付く。

「皆さんこんにちは、中井昭二（なかいしょうじ）です」
　男性の第一声を聞き、雪乃は合点した。そうだ、自民党の前政調会長である中井昭二衆議院議員である。
「こんなにも暑い中、しかもこんなにも大勢の皆さん方、お集まりいただきまして、感謝感激でございます。まだ日本は、捨てたもんじゃない。皆さん方のおかげで、朝生さんも我々も、お力添えを頂いて、元気いっぱい、最後の最後まで戦って参ります」
　突如、大歓声が沸き起こり、雪乃は唖然として周囲を見回した。政治家の街頭演説で、歓声が上がる光景を、雪乃は初めて生で見たのだ。
　中井は群衆に向かって語りかける。
「ゲートインした瞬間に、勝負が決まっちゃう。何か変じゃないですか。九つの派閥の内の八つが推薦していると言いますけど、ここにいる我々は、そんなこと関係なくやっているんです。日本国家のためにやっているんです」
　再び歓声が沸き起こった。雪乃は改めて群衆に視線を送り、人々をじっくりと見渡す。普段は政治に関心のなさそうな、ごく普通の人ばかりが集まっている。雪乃と同じように、たまたま新宿を訪れたとしか思えない普段着の老若男女が、懸命に手を振り、中井の名前を呼んでいるのである。雪乃はこれまで、動員されたとしか思えない雰囲気の人々が、選

挙カーに立つ政治家に声援を送っている光景は幾度か見たことがある。ところが、今、自分の周りに溢れている人々は、とても動員には見えない。ごく普通の一般人である。
「途轍（とてつ）もない日本。この朝生さんの言葉は、皆さん方の潜在力を、思い切り発揮できるようにしようという、そういう期待なんです。で、確かに今、日本は危機ですよ。しかし、危機だというなら、その危機を成長に、夢の実現に変えていけばいい。その力を、皆さんの力を朝生一郎に与えて下さい」
拍手が起きる。
「国会議員の数じゃありません。党員の数でもありません。皆さん方、お一人おひとりのお力が必要なんです。そして、その力で日本をよくしていこうじゃありませんか。元気の出る日本を作っていこうじゃありませんか。
おそらく、今日いらっしゃった方は、東京や、あるいは神奈川や千葉、あるいは埼玉の人が多いと思います。大都会です。しかし、大都会も皆さん方の故郷なんです。故郷には伝統と歴史と、そして誇りがあるんです。
日本中の故郷のこの誇りを、さらに増していけるような政治を、みんなでやっていこうじゃありませんか。皆さんのこの熱気は、日本中、そして世界中に届いています。この熱気を見て、ビビッている連中も多い！　特に、困ったことに、うちの政党に多かったりす

るわけです」
大衆の中から、笑い声が起きた。
「ならば、皆さん。大いにビビらそうじゃありませんか、日本のために。皆さん方のために」
ここで中井の背後に、鮮やかなグリーンのウィンドブレーカーを着た小柄な女性が近寄り、耳元で何か囁く。中井はさっと背後を振り返り、すぐに笑顔で聴衆に向き直った。
「おっと、主役が参ったようですね。私もだんだん興奮して参りましたけれども、この辺でやめにします。不肖、中井も、朝生さんと共に、日本をよくして参ります。それが今日のスタートなんです。どうぞ皆さん方、最後の最後まで、皆さん方の力を朝生一郎に与えてやってください。心からお願いを申し上げまして、私の挨拶を終わります。朝生どうぞ皆さん、よろしくよろしく、お願いいたします。ありがとうございます！ありがとうございます！」
轟きわたる拍手と大歓声。群衆の中の一角から「中井！ 頑張れ！」という声が聞こえてくる。反対側からは、黄色い歓声としか表現しようがない女性の声が、「中井さーん！頑張ってー！ 中井さーん！」と叫んでいる。まるで、芸能人に声援を送るファンそのものの光景に、雪乃の違和感は高まる一方だ。中井前政調会長にこれほど人気があるとは、

雪乃には思いもよらなかった。
中井はマイクを傍らの女性に渡し、梯子(はしご)を上ってきた男性と握手を交わすと、車上から姿を消した。
代わって街宣カーの上に立った男性が、群衆の方を振り向いた。
すると、先ほどの中井の演説時をはるかに上回る、割れんばかりの大歓声が起きた。誰もが懸命に手を振り、何かを叫んでいる。多くの若者が、携帯電話を差し上げ、男性の写真を撮影し始める。
雪乃は、あ、と小さく声をもらした。最近テレビで見たばかりの顔である。自民党総裁候補の、朝生一郎ではないか。
ビッグネームの登場に驚きはしたが、雪乃は正直なところ、今回の総裁選にまったく興味がなかった。自民党の体質が変わらない限り、誰がトップに据えられたとて、何ら期待はできない。戦後六十有余年、日本を衰退の道に牽引(けんいん)してきたのは、他ならぬ自民党なのである。どうせ党内人事、誰がなってもさして変わりはないのに、なぜここに集まった人々はこれほど熱狂し、歓声を浴びせるのか？　代議士側の人間が、支持団体に要請したのなら説明もつくが、聴衆はどう見ても一般人の群れなのである。それに、さっきの中井の演説。ああいった話を政治家がするとは、正直、意外だった。雪乃にとっては先ほどか

ら、思いがけない事態の連続だ。意外な出来事に驚きつつ、純粋に疑問にも思う。
雪乃はふと思いつき、レポートのネタに使うためにＩＣレコーダで録音を始めた。
朝生は大歓声に応え、ひとしきり手を振り続けた。笑顔を四方に振りまいた後、マイクを握り、話し始める。
「えー、朝生一郎です。最近、キャラが立ち過ぎ、自民党の古い方々に疎（うと）ましく思われている朝生一郎です。
暑い中、アルタ前にお集まりいただいた皆さん、心から感謝申し上げます。ありがとうございました！」
朝生の第一声が済むと、突然、聴衆から朝生コールが起きた。
「朝生！　朝生！」
雪乃はびっくりして、周囲を見渡した。
「この総裁選挙。財部総理の急な辞任に始まり、今日まで約10日間。極めて異例な形でございまして、私どもとしては早期に新たな総裁を選ばなければならないという、義務と責任を感じており、国会が空転してしまったことについても責任を感じております。したがって、今回の総裁選挙では、できるだけ、皆さんの民意を得た総裁選挙に近づけたい。大勢の方々が、一人でも多く参加できる総裁選挙にしたい。したがって、今回は党員がオー

プンに投票できる、開かれた総裁選挙を目指したわけです。

何となく、中央永田町では今一つ朝生は票が良くないように書かれております。しかし、最初にスタートしたのが、街頭で言えば渋谷、その次が、秋葉原。そして、大阪、高松、そして仙台、浅草、いろいろ回らせて頂きました。どこに行っても、皆様方から熱烈に歓迎をして頂きました」

大きな拍手が起きた。年若い男性の声が「朝生さん！　頑張れー！」と叫んでいる。

「日本はいま、多くの問題を抱えております。皆さん方、若い方もいらっしゃるが、大勢の方々に、まず『不安』がある。いろいろな不安がありますよ。しかし、我々は政治家は一つひとつ、それを解消してきたと思っています。例えば、この新宿。新宿と言ったら、まず思いつくのは」

朝生はいきなりトーンを変え、ドスの利いた声で言った。

「歌舞伎町でしょうよ」

観衆から笑いがもれた。朝生の風体にはドス声が意外にも似合い、雪乃も思わず笑ってしまう。朝生は、貫録がありながら同時に愛嬌(あいきょう)も併(あわ)せ持つという、不思議な人物のようだ。

「歌舞伎町を想像しない人は、まずいないと思いますよ。やっぱり、新宿と言えば歌舞伎町。その歌舞伎町、昔はちょっと、マジでこれはやばいなあという感じがあったでしょう

が。とにかくおまわりさんの数が足りないんですと。どんどん公務員を減らして、おまわりさんの数も減らしたから、空き交番は増えるは、泥棒は増えるは、強盗は増えるはで、留置所だけが一杯。留置所が一杯だから、入れるところがありません。そういう騒ぎにまで、一時はなっていた。そこで、警察官を増やそうと考えたわけです。増員しないと、冗談抜きでやってられませんから。この新宿歌舞伎町にも、制服のおまわりさんの数が増えた。間違いなく増えたよ。すると、どうなった。歌舞伎町って、マジやばいところから、かるーくヤバイくらいになったろ？」

演説を聞くうちに、雪乃は話に引き込まれていることに気付いた。

知らなかった、朝生は話が上手い。報道では、政治家の生演説を長時間にわたり放送することはあり得ない。そのため、雪乃は断片的な言葉のみ聞いていただけで、政治家のイメージを創り上げていた。朝生がこれほど、聴衆の心を掴む話術を持つ人物だったとは、まったく知らずにいた。

「違うかい？　今の歌舞伎町は、何となく危ないなあ〜程度で、昔のマジやばいじゃなくなったでしょうが。だから、健全な人たちもあそこに行けるようになった。いや、今まで歌舞伎町に行っていた人たちが、健全じゃないとは言わないよ」

観衆に大きな笑い声が起きた。

「私もよく歌舞伎町にはお世話になりましたから、そりゃあ、そんなことを言うつもりはありません。しかし、今の歌舞伎町は、間違いなくみんなで行けるようなところになった。昔、ラスベガスだってあれだけヤバイと言われたのに、今は世界のコンベンションセンターとか、いろいろな形でみんなが行ける街に大きく変わった。その街を経営する人のセンス、その街を運営する人の経営感覚が、街を変える。はっきりしている例は、いっぱいあるじゃありませんか」

雪乃は額に浮かんだ汗をミニタオルで押さえながら、朝生の話に聞き入った。

「治安やら年金やらで、皆さん方の抱えている不安。将来に対する不安。そういったものを一つひとつ片づける。それが、今の政治家に与えられた役割なんですって。私どもは、日本という国について、そんなに悪い国だとは思っていません。正直申し上げて、細かい点をあげればいくらでも問題がありますよ。そりゃあ細かい点をあげりゃあ、人間、完璧なことはないからね。ここには大勢、奥さん方もいらっしゃるけど、自分の亭主を思い出してみて。私の亭主は百点満点、まったく欠点がない。本当にそう思っている人。手を挙げてみて。

おお、凄い！　一人いたよ。ねえ。よっぽど運がいいのか、騙されているかのどっちか」

今度こそ、観衆は爆笑した。雪乃も声を出して笑ってしまい、自分ながらに驚いた。信

じられない。政治家の演説で、本気で笑ってしまうなんて。
「普通は有り得ないよ。百点満点なんて人は、まずいない。百点の女房も、百点の旦那もいない。百点は有り得ないよ。そりゃあ欠点もあるけど、それでもそれを上回る良さがあるから、そこそこお互いに辛抱して折り合い付けて、20年、30年一緒にいるんでしょうよ。ボーイフレンドだっておんなじよ、ねえ。
そういう意味では、是非皆さん方にご理解いただきたいのは、自由民主党という政党にも、百点満点は期待しないで欲しいんです。そりゃもう、人間がやっているんだから。百点は無理です。しかし、あの政党に比べたら、まだいいんじゃないかと、誰でも答えるでしょうがよ」
大きな拍手とともに、「そうだ!」という声が起こる。
「自由民主党というのは、これまで何とか日本を良くしようとやってきました。確かに党内でいろいろと戦いはします。しかし、開かれた国民政党として、たった一人の人物の意思に、みんな言いなりになる、そういった決め方をする政党ではありませんよ。我々自民党は、開かれた国民政党なんだから。派閥があろうとも、ここに実際に中井先生も足を運んでくださっている。自分の村で別の人を推薦しているときに、朝生を推薦するってのは、朝生を応援するってのは、度胸いるよ、これ。中井先生の他にも、鳩川（はとかわ）先生や天木（あまき）先生ま

で、自分の派閥の長に逆らって、朝生の応援をして下さる。本当に感謝しています」
街宣カーの脇で手を振り続けていた中井が、ぺこりと頭を下げた。
「ご通行の皆様の邪魔になってしまい、まことにすみません。こんなに大勢の方々にお集まりいただくとは、思ってもみなかったもんですから。
しかし、こういった大勢の方々に集まって頂いた。この現実こそが、私たちに力を与えてくれるのです。総裁選挙も明日の半日しか残っていませんが、皆さん方のこの熱気は、自由民主党選出の国会議員に必ず通じる。民意というものは、皆さん方、有権者の気持ちとして、国民の意志として、国会議員に必ず伝わる。そういったものを一つひとつ、すくいあげてきたからこそ、自由民主党は今日まで、まあいろいろ欠点があるとはいえ、何とかやってこれたんだと確信します。
今後とも、自由民主党は、開かれた国民政党として、皆さんのために、国民のために、また世界に期待され続ける日本であり続けるために、全力で頑張っていくことを、重ねてお誓い申し上げ、街頭からの訴え、お願い、御礼に代えさせて頂きます。
長時間のご清聴、ありがとうございました！　朝生一郎、最後まで頑張ります。よろしくお願いします。ありがとうございました！」
それまでを数倍は上回る歓声と拍手の音が、新宿アルタ前に響いた。

再び、群衆の一部から朝生コールが沸き起こる。
「朝生さーん！」
「頑張れ！　朝生！」
朝生が街宣カーを降り、聴衆に近づくと、握手を求める人々が殺到し、現場は大混乱になってしまった。雪乃は、人々にもみくちゃにされながら次々と握手を交わしていく朝生の姿を、遠巻きに見つめた。
そのとき、ドサッという音が響き、雪乃の足の甲を何か重いものが直撃した。
「痛っ！」
どうやら雪乃の真横の男性が、自分のショルダーバッグを落としてしまったようである。彼の物と思しき荷物がそこら中に散らばっている。
「すみません」
男性は謝りながらすぐに荷物を拾おうとした。仕方がなく、雪乃も手伝い始める。と、二人の目の前で、誰かの靴が、男性の持ち物の一つであるＩＣレコーダを踏んだ。
「うわ」
靴の主の足がどくと、男性は素早くレコーダを拾い上げたが、あいにくそれは不具合を起こしているらしい。

どうやら彼は、朝生の演説を録音していたようである。雪乃は、演説を熱心に聴いている人々の心理が知りたいという気持ちを抑えられず、思い切って話しかけた。
「あの、何に使うんですか？」
男性はレコーダをいじりながら答えた。
「ああ、まあ、仕事で使うんですよ」
「この演説、わたしも録音してますよ。良かったら、データ差し上げます。わたしは何となく録音してただけで、そんなに必要じゃないんで」
男性は意外そうな顔で雪乃を見返した。
「……そうしていただければ、非常に助かります。5分ほどお借りできますか？　すぐにパソコンにデータをコピーするので、いただくには及びませんよ」
男性に促され、雪乃は駅前のスタバに向かう。
歩きながら男は原田と名乗り、雪乃に名刺を差し出した。なにげなく名刺を受け取った彼女は、そこに印字された社名に驚いた。……興産新聞である。
どきどきしながら、雪乃は口を開いた。
「記者さんなんですか？」
「ま、そのようなものです」

原田がおごってくれたアイスカフェラテを手に、二人はソファ席に移動した。原田は手早くデータをコピーし始める。ふち無し眼鏡のせいで印象が薄れているが、原田の眼光は鋭い。その全身に、攻撃的な知性が滲(にじ)んで見えるようだ。

目の前の、この男性が興産新聞の人間と知り、今日の演説に対する雪乃の興味は、より大きくなってきた。

「演説に集まってた人数、凄かったですね。何人くらいいたんでしょうか」

「ざっと2万、てとこかな」

「そんなに！」

雪乃は心底びっくりした。人数の多さもさることながら、聴衆のおおよその数を即答できる原田に驚いたのである。

さすが新聞記者、と感動した雪乃は、自分がマスコミ志望であることを話してみた。しかし原田は興味もなさそうに、そうですか、頑張ってください、と聞き流しているだけである。

データのコピーなどものの数分もかからず、パソコンをしまうと原田は立ち上がった。

「ありがとう、助かったよ。それでは失礼します」

「あ……、はい」

原田の姿はすぐに見えなくなった。
そのまま席に残った雪乃は、原田の名刺と、三々五々散らばっていく群衆とを眺めた。おそらく今夜のニュースで、この演説の様子は取り上げられるだろう、と雪乃は考えた。どのように報道されるのか、興味が湧いてくる。
コーヒーを飲み干すと、雪乃は新宿に住む彼氏の家へ向かった。

雪乃と彼氏の望月翔とは、高校3年からの付き合いだ。同じ小田原の進学校出身で、現在は早稜大学の国際教養学部に在籍している。
翔は大学入学後、海外放浪癖を持つようになった。数日でも暇を見つけると、すぐに海外へ行ってしまうのだ。神奈川県内に多数の店舗を持つ外食チェーン店の社長子息である翔は、一学生にしては潤沢すぎる生活費を仕送りされている。その割に派手に見えないのは、仕送りのお金を全て旅行に使ってしまうからだ。
今日は、その翔が、インドから帰国している日だった。出かける前に貰っていた航空チケットの情報に、今朝成田に着くと書いてあったのだ。インドに旅立ってから、翔とはまったく連絡がつかなくなってしまい、雪乃はちょっと心配していた。今までも多数の国に出かけたが、連絡が一切つかないことは今回が初めてだったのだ。

高級物件の部類に入るマンションのエントランスに、雪乃は勝手知ったる様子で入り、エレベーターで最上階に昇った。合鍵で翔の部屋を開けると、彼は広いリビングの隅に置いたベッドの上に、トランクス一枚で寝転んでいる。雪乃を見て、ニッと笑って手を挙げた。

「お帰り。またちょっと痩せたね」

「ん、まあなー」

変わらない翔の姿を確認し、雪乃はほっとした。元気そうだが、夏休み前とは別人のように日焼けしている。雪乃はさっきコンビニで買ってきた缶のモヒートを2本取り出し、1本を翔に差し出した。

「さっきすぐ近くで、政治家の朝生が演説してて、思わず聞き入っちゃった。スゴイ人だかりだったから、今夜ニュースでやると思うよ。それでね、そこで興産新聞の記者の人と知り合いになったの。すごくない？」

しかし翔は特に関心を示さず、早速モヒートを開けて飲み始めた。そして、朝生の演説バナシの代わりに、翔によるインド滞在についての大演説が始まってしまった。こうなると長いんだよな……と、雪乃は内心、長丁場を覚悟する。

どうやら翔は、いつも通り、また今回も完全に〝染まって〟帰ってきたらしい。彼はし

きりに、機械に支配されている日本人は、本来の人間らしい生活を忘れている、文明の発達によって、旧き良き時代を忘れた日本人に幻滅した、自分は海外の素朴な生活に戻りたい、と熱弁をふるっている。
雪乃は時々「ふーん」と相槌を打つくらいで、しばらく静かに聞いていた。しかし、翔がインドで携帯を捨てたというくだりにくると、さすがの雪乃も声が大きくなってしまった。
「バカじゃないの！　不便なだけじゃん！　休講のお知らせとか、携帯に届いてたでしょ？　ああいうの、どうするワケ⁉」
すると翔は、初めて気付いた、という表情になる。
「あ、そーか。じゃ、携帯はとりあえず買い直すわ」
「てゆうか、だから、まったく連絡つかなかったんだー……」
雪乃は呆れ果て、なんだか情けない声が口から出た。しかも翔は当然ながら、携帯に入っていたデータも同時に失われ、友人の携帯番号からメアドからまったく分からないと言う。
雪乃はとりあえず自分の携帯番号とメアドを渡そうと、翔の机からメモ用紙を探し始めた。しかし、極度の面倒くさがりである翔は、雪乃を制止した。
「いや、俺メアド手打ちするの面倒だから、雪乃からワンメールくれ」

雪乃は翔を見て、はあっと大きなため息を吐いた。ここまでくると、呆れを通り越し、もはや母親みたいな気持ちである。
「……わかった。メアドどうする？　前回のは一定期間、使用不可だからね」
「んー、俺、哲学者のアランが好きだろ。だから、alain……いや、本名のエミールの方がいいな。EmileAugusteChartierで、なんか数字入れて……俺の生まれ年でいいか。1986@〜にしよう。かっこよくね」
「……長い……」
雪乃は急いでメモり始める。その間に、翔はジーパンとTシャツに着替え、くたくたのリュックを肩にひっかけた。
「じゃ、俺、行くから。鍵テキトーに閉めてってくれよ」
「ライブ行くのはいいけど、その前に携帯買うの忘れないでよ？　今夜、メールするからね。確認メール返してよ！」
「了解」
翔が出ていくと、マンションの中は急に静かになった。雪乃は翔の部屋をさっと片づけてあげようと、手を動かし始めた。しかしすぐに、なんだか虚しい気持ちでいっぱいになってきた。縛られる恋愛より気楽な付き合いの方がマシだ、と思ってきたが、最近は違和

感を感じる。
こんなテキトーなまま、就活もまったくやっていない状態で、翔はいいのだろうか？　わたしも確かに、まだ就職希望を明確にはしていないけれど、翔は夢ばかり見て、社会に目を向けてすらいないように感じる。
気の置けない仲の気楽さよりも、寂しさの方が強くなってきたことに気付き、雪乃は自分でもびっくりした。

帰宅した雪乃は、早速テレビをつけた。ちょうど夕方6時、キー局の多くが軒並みニュース番組を流す時間である。中でも雪乃のお気に入りは久慈興産テレビの「ニュース6」だ。知的美人のアナウンサーが、ポンポンと小気味よく意見を述べる様が痛快なのだ。
しかし政治関連の枠が終わったところで、朝生の演説が報道されずじまいだったことに雪乃は気付いた。リモコンを操作し、他局のニュースを順に見てみるが、いくらチャンネルを変えても、朝生の姿は現れない。
雪乃は不思議に思った。およそ2万人もの聴衆を集めた大演説だったのだ、当然ニュースとしての価値は高いだろう。それに、あの場所には、テレビカメラも多数来ていた。映像も音声も、マスコミは持っているはずなのに、なぜどこの局でも報道しないのか……？

新宿での演説について考えた雪乃は、その後の翔とのやりとりを思い出し、携帯を開いた。携帯をちゃんと買ったかどうか、確認メールを送ってみるのだ。哲学者アランの本名のスペルをネットで確認し、その後ろに1986@～を入力。内容はとりあえず、今のニュースに対する疑問にしてみる。

〈無事にメール届いてますか？　さっきの演説のことだけど、まったく報道がない。2万人以上が聞きに来て、最後に朝生コールまで起こって。マスコミもたくさん来てたのに、なぜ報道しないいんだろう？　ワケわかんない。これをテレビで見るの、楽しみだったのに〉

送信。エラーメールが返ってこないことを確認し、雪乃は少し安心した。

すると、十分後、携帯が鳴った。こんなに早く返信してくるなんて、翔にしては上出来、と思いつつメールを開くと……彼らしくない、長文がそこにあった。しかも、恐ろしく明晰なマスコミ論である。

《マスコミとはそういうものだ。人間、中立公正では有り得ない。全ての報道は偏向して

いる。マスコミが「国民の声」というとき、それは「マスコミの声」あるいは「マスコミの望み」なのだ。しかも、マスコミはセンセーショナルに危機を煽れば、新聞が売れ、テレビが見られると勘違いしている。結局、国民が常日頃から「正しい情報」を手に入れようと努力しない限り、国内の情報は「空気」によって歪められ、民主主義が成り立たなくなる。いや、民主主義が成り立たなくなるのではなく、民主主義により国家が向かうべき方向を間違えてしまうという皮肉な事態になる。ナチスドイツは、ドイツ国民の投票により政権を担った。ナチスドイツを誕生させたのは、ドイツの民主主義なのだ》

雪乃は驚き、食い入るように画面に見入る。

「……ええ？　なんなの、翔。実はやっぱり、いろいろ考えてるワケ？」

文体が異常に偉そうなのは気になるが、レポートを作るような気分でメールを書くと、こういう文章にもなるのかもしれない。そんなことより、問題はその内容だ。雪乃は急ぎ、返信の文章を作る。

〈じゃあ、マスコミは世論を誘導できる、ということ？〉

《マスコミが「自分たちの意思」に基づき世論を誘導しようとするのは、日本だけの話ではないし、今に始まった話でもない。所詮は人間という一個人が記事を書き、テレビ番組を作るわけだから、偏向していない報道など有り得ない。無論、このマスコミの特徴を利用しようとする人や組織も多い。結果的に、プロパガンダ報道というものが生まれ、情報が歪められていく。だからこそ、国民は自ら情報を取捨選択するリテラシーを身に付けなければならないのだ。さもなければ、結局は国民自ら害を被ることになる》

リテラシー！　雪乃はかなり驚いた。翔がバイリンガルなのは重々承知だが、こういった単語を自然に使うようには思えなかったのだ。それにしても、翔ってこんなキャラだったろうか……。

〈スゴイ、ありがとう。めちゃめちゃ意外だったけど。で、携帯番号は？　電話かけらんないよ〉

返答がない。まあ、いいや。期せずして翔と深いマスコミ談義ができたことに感動し、雪乃は眠りについた。

歪んだ報道

財部総理の辞任表明を受け、自民党の総裁選挙が始まった。当初、新総裁の最有力候補と言われた朝生幹事長は、思いもかけぬ情報戦争により、苦戦を強いられることになる。

２００７年９月12日、財部総理が辞意を表明し、自民党は即座に総裁選モードへと突入したが、朝生は党内の支持をほとんど得られない現実を知る。自民党内の大派閥がことごとく福本義男(ふくもとよしお)を担ぎ、小派閥の長である朝生は20人の推薦人を集めるのにすら苦労する始末だったのだ。幸い、中井昭二衆議院議員など、他派閥に属しながら意を共にする議員たちが推薦人として名乗りを上げてくれたため、何とか総裁選挙の立候補届け出が可能となった。

なぜ、自民党の大派閥の長たちは揃(そろ)って、反・朝生に回ったのか。

もともと、青田俊雄や森木明ら自民党主流派の有力議員たちは、財部政権末期に「財部おろし」を推進していた。財部総理（当時）の代わりに福本義男を擁立し、危機を乗り越えようとしたのである。財部おろし自体は、当時の政権の有力者の一人であった朝生一郎により封じられたが、財部政権下の非主流派閥の長たちは「財部・朝生連帯責任論」を唱え、青田らの福本推しに加わったのだ。結果的に、財部政権期の主流派と非主流派が全て、反・朝生で一致してしまうという、異様な状況が生まれたのである。

さらに総裁選に出馬した朝生は、「朝生クーデター説」なる怪情報にも苦しめられることになる。

事の発端は、財部政権末期の内閣改造の際に、国民テレビ会長の氏本清次郎（うじもとせいじろう）と読解新聞会長の渡会秀雄（わたらいひでお）が、上記の自民党有力議員と会合を持ったことに遡る。国民テレビは、資本的に読解新聞の子会社であり、両者は一体と言ってもよい関係にある。

諸外国においては、テレビ局と新聞社の資本関係を強化するなど、いわゆるクロスオーナーシップは禁じられている。テレビと新聞という二大メディアが同一資本の下に置かれると、世論への影響が大きくなりすぎ、偏った情報が行きわたってしまう可能性がある。つまり、健全なジャーナリズムの発展を妨げると考えられているためだ。

例えば、新聞社とテレビ局が同一資本の傘下（さんか）にある場合、互いに批判しないというケー

スが起こり得る。新聞社の不祥事をテレビ局が報じない。あるいは、テレビ局の問題を新聞が追及しない。これでは国民は、制限された情報の下で、各種の判断を迫られることになる。

メディア同士が互いの批判をしない傾向は、特に昨今の日本で顕著になっている。例えば、08年春。大手紙の一つである毎日新聞が、自社が運営する「毎日ジャパンニュース」において、日本の低俗な情報を9年もの期間、世界に向けて英語で流していたことが問題視された。

具体的な例を一つ挙げておくと、毎日ジャパンニュースは2002年1月6日に、

「日本のお母さんは、息子のために、ひと肌脱ぐ！」

というタイトルで、

「日本の母親たちは、中学生の息子を入学試験で合格させるためには、どんな破廉恥な行為もいとわない。ある受験生、ヒロキの毎日の勉強は、母親による15分間の〝口淫〟から始まる。結果、ヒロキの集中力が増し、成績は上昇した。皆が幸せだった、ただしヒロキの父親を除いて。時間が経つにつれ、父親は妻と息子への疑念にとらわれ、悩んだからだ。いくら試験合格のためとはいえ、こんな事態を野放しにしていいのだろうか？」

などという信じがたいニュースを、〝英語〟で〝全世界に向け〟配信したのである。毎

旦新聞は上記以外にも、似たようにショッキングで下劣なタイトル・内容の記事を、実に9年間、世界に向けて配信し続けた。
08年春に、インターネット上で毎旦ジャパンニュースが問題視され、同社のスポンサーに対する総攻撃が始まった。無数の企業が、「毎旦新聞のスポンサーをしている」という理由のみで、一般消費者からの猛抗議を受けたのである。当然のごとく、毎旦新聞から次第に広告が消えていった。
最終的に毎旦新聞は〝読者に向け〟謝罪をしたが（この謝罪についても、「なぜ〝国民に向け〟ではないのか」と、インターネット・ユーザーの国民を怒らせた）、この件に関して報じた大手紙は皆無であった。テレビ局の中には、ごく短時間ながら報じたところもあったが、毎旦新聞と資本関係にあるTNSは黙殺した。
メディアをメディアが批判しないということは、国民は、メディアの持つ問題や起こした事件について知ることができない、ということだ。だからこそ、世界の主要国はクロスオーナーシップを厳しく制限しているのである。
日本でも、一応、総務省の「基幹放送の業務に係る表現の自由享有基準」に基づく「マスメディア集中排除の原則」により、クロスオーナーシップは制限されている。しかし日本の「集中排除の原則」は、一地域においてテレビ・ラジオ・新聞の全てを独占的に保有

する状態を、禁止しているに過ぎない。現実には、まだまだ新聞とテレビの資本的な結びつきが強いのが、現代日本の姿だ。

さらに、心ある政治家が新聞、テレビのクロスオーナーシップや資本的結びつきを批判すると、もちろん当のメディアから大がかりなアンチ・キャンペーンを食らうこととなる。財部政権に対するメディアの風当たりが強かったのは、同政権が「新聞特殊指定廃止」や「放送法の改訂」など、新聞、テレビ関係者の神経を逆なでする政策を進めようとしたことが理由の一つと考えられている。

さて、国民テレビと読解新聞の両会長、及び自民党の有力政治家たちの会合は、汐留にそびえたつ巨大高層ビルの最上階で行われた。このビルには国民テレビの本社が入っており、最上階には選ばれた人々しか入れない氏本会長の執務室がある。会合は財部政権末期である8月27日、執務室の隣の大会議室で持たれた。

もともと、氏本と渡会は「財部―朝生ライン」を毛嫌いしており、大泉（おおいずみ）政権の後継者を選ぶ総裁選の時点から、福本義男を次の総裁として後押ししていたのである。ところが、当時は財部の支持率が高く、とても勝ち目がないと判断した福本が固辞し、財部政権が誕生した。

氏本は、一時は日本民間放送連盟の会長も務め、言ってみればマスコミ界のドンである。

東京大学に在学中、彼が日本共産党に入党していたことは、日本国民のほとんどが知らされていない。ちなみに、東京大学において氏本を日本共産党に勧誘したのは、他でもない、現在も読解新聞の会長と主筆を務める、渡会である。

東京大学は日本共産党の細胞として、数多くの〝元共産党員〟の著名人を輩出している。代表がマスコミ界の二大ドンである氏本と渡会、さらにはセリナグループ代表などを歴任した俵誠司、日本共産党内で構造改革を唱えた安端仁兵などになる。

理由は不明だが、氏本と渡会は財部が唱えた「美しい国、日本」「価値感外交」、さらには朝生の外交上のスローガンである「自由と繁栄の弧」を嫌悪していた。

森木や中山修直など、大会議室に自民党の有力議員たちを出迎えた氏本と渡会は、ある仕掛けを提案する。この仕掛けは、もともとは、彼らの子飼いである国民テレビの八俣（やまた）ひろみの発案である。すなわち、財部辞任（この時点では決定的ではなかったにもかかわらず）について情報操作を行い、反・朝生の大キャンペーンを張るというものだった。

財部が辞任表明をした9月12日の2日前。体調が悪く、入院中だった財部は、見舞いにきた外務大臣の朝生一郎に、辞任を示唆する発言をした。朝生は、

「もし辞任なさるとしても、それは、テロ特措法があがった後でよろしいのではないですか？　いつかは辞任すべきときがくる。しかしそれは、絶対に、今ではありません」

と、思いとどまるように説得した。

朝生の説得もむなしく、2日後、財部が健康問題からついに辞職を表明。すると、直後から怪情報が永田町を駆け巡る。「先日の内閣改造時に朝生が財部を蚊帳の外に置き、事実上、政権運営の実権を確保。それに激怒した財部が、『騙された』と呟き、政権を投げ出した」という説である。さらに、「当時、幹事長職を務めていた朝生のみが財部の辞意を事前に知っており、朝生は自らが次期自民党総裁に就任すべく、様々な手を打っていた」というストーリーが、週刊誌で次々に報じられることとなった。

いわゆる、朝生クーデター説と呼ばれる、奇奇怪怪な騒動である。

仕組まれた罠

「会長、仕込みは上々ですわ。すでにＭＨＫと『週刊パスト』の記者たちに情報を流してあります。彼らはおそらく、裏取ナシで報道します……あとは、その報道をもとに議員たちが周囲に広めれば、朝生はすぐに万事休すという寸法です」

「それは結構」

受話器の向こうから聞こえてきた氏本の無愛想な声音に、八俣ひろみは声を立てずに笑った。氏本が不機嫌な装いの声を出すときほど、実は機嫌が良いことを、八俣は知っているのだ。

「今回のアンチ朝生キャンペーンは、ネーム・コーリングによる自民党の議員連中のバンドワゴンが狙いです。『朝生クーデター説』を繰り返し報道させ、朝生支持を減らすと同

時に、議員どもを勝ち組に誘導させるんです」

ネーム・コーリングやバンドワゴンとは、プロパガンダ手法の一種である。ネーム・コーリングは、対象となる相手に悪しきイメージをもたらすレッテルを貼り、それをひたすら繰り返すという手法だ。今回のケースでは「朝生クーデター」というフレーズを何十回、何百回とメディアで報じさせることにより、「朝生＝クーデターの首謀者」という悪印象を大衆に与えるのである。無論、情報源を主にテレビや新聞に頼っている自民党の議員たちも、ネーム・コーリングの餌食となる。

情報に対し比較的シニカルな姿勢を保つ人たちすら、このネーム・コーリング効果から逃れることは難しい。特に、「朝生＝クーデターの首謀者」というシンプルなレッテル貼りは、繰り返し耳にするうちに、自然と脳内で〝前提〟になってしまうのだ。

さらに、ネーム・コーリングは自らの属すコミュニティに対しても影響を与える。周囲のコミュニティが「朝生クーデター説」を信じている場合、その空気に逆らえば、自身のコミュニティからの排除の可能性が生まれる。

コミュニティとは、当然ながら政党や派閥をも含む。議員たちが派閥の空気に合わせ、会話を繰り返すうちに、いつの間にか自分の脳内でも、以前は信じていなかった「朝生クーデター説」を前提に思考が行われるようになってしまう。

結果的に、「クーデターの首謀者である朝生は勝てない」という印象が広まれば、議員たちの支持は一気に、勝ち組である福本義男に流れる。これがバンドワゴン効果である。八俣からの報告を聞き終えた氏本は、もはや板についた仏頂面（ぶっちょうづら）を崩さぬまま、受話器を置いた。ふと思いつき、秘書に渡会宛の電話を繋（つな）ぐように命じる。読解新聞にも、せいぜい、支援してもらわなければならない。

「朝生クーデター説、か……。八俣にしては、巧い仕事だ」

財部内閣が終焉を迎えた当時は、国会の会期中であり、かつ、9月末には首相が国連への出席を控えていた時期でもあった。そのため幹事長の朝生は、財部総理の辞意を受け、自由民主党総裁選挙について、9月14日告示、19日投票という選挙日程を示した。その後、自民党総務会などにおいて「急すぎる」という異論が噴出し、これを受け、投票日は最終的に23日で確定した。

当時の自民党執行部が19日投票という日程を示したのは、25日に予定されていた日本国首相による国連演説を考慮したものであった。ところが、この極めて早い選挙日程案までもが、後にクーデター説の裏づけとして利用されてしまう。

また、財部総理の辞意表明を受けた自民党執行部の記者会見において、朝生幹事長が、「10日夕方の党役員会後に、財部総理から辞意を打ち明けられていた」

と発言したことも、クーデター説の成立に一役買ってしまった。朝生について、「事前に首相の辞意を知りながら、適切な対応を取らなかった」、もしくは「実は、首相の辞意を事前に知っていたのは朝生氏ただ一人で、自らが新総裁に就任するために、その情報を隠していたのでは」という、根拠不明な設定が追加され、クーデター説の拡大に拍車をかけたのである。

さらに決定的なことに、9月12日の深夜、あるテレビ局の報道番組において、自民党の有力議員の一人である中山修直が、

「財部総理が朝生幹事長に裏切られたと発言していると、側近の一人が言っている」

と爆弾発言を放ち、「朝生クーデター説」が一気に拡大することとなる。

加えて、自民党の広報局長である片河(かたがわ)いつき衆議院議員までもが、

「これはクーデターです。支えると言いながら、後ろから刺した人がいる」

と、朝生を名指しこそしなかったものの、クーデターの事実を公言した。片河の発言は、その後、テレビなどで何度も繰り返し報道され、「朝生クーデター説」が国内で既成事実化していくのである。

そして折も折、辞意表明直後の9月13日、財部総理は体調を崩し、またもや緊急入院してしまう。財部総理はその後、総裁選挙が終了するまで人前に姿を見せることはなかった。

この一連の流れまでもが、「朝生クーデター説」に信憑性を与える結果になった。クーデター説を全面的に否定できるただ一人の人物が、公の場から姿を消してしまったのだから。
首相入院中に、問題の自民党総裁選挙がスタートする。新しい自民党総裁候補として、朝生一郎と福本義男が名乗りを上げた。根拠不明というよりは〝仕組まれた〟朝生クーデター説により、前評判では圧倒的優位に立っていた朝生幹事長は、自民党内で孤立していく。見事なまでのバンドワゴン効果が創出され、党内で朝生包囲網が作られていったのだ。
最終的に、朝生派を除く全ての派閥が、福本支持を表明するに至った。
いいように動き回るマスコミや自民党の議員たちの姿を眺め、クーデター説の糸をひいた八俣は、彼女独特の含み笑いが抑えられなかった。

自由民主党の総裁選挙で朝生を破り、財部総理の後任を射止めた福本義男の勝利インタビューが、テレビ画面に映し出されている。背後には、今回の総選挙で福本を支持した自民党の派閥の長たちがずらりと勢ぞろいした。
総裁選挙において、朝生は、地方票における得票率では福本を上回ったが、やはり自派を除く全ての派閥に包囲網を構築されたことが結果に大きく響いた。しかも、マスコミは連日、妄執とも言うべき様相で「朝生クーデター説」を繰り返し取り上げ、朝生支持の議

員たちに揺さぶりをかけ続けたのである。
蓋を開けてみれば、議員票・地方票を含め福本が330票、朝生が197票であった。
ようやく病状が回復し、退院した財部前総理は、9月25日に記者会見を開き、
「自民党の朝生前幹事長が、総理の辞意を知りながら結果的に退陣に追い込んだ、という見方があったが、事実か？」
と記者から質問されたのに対し、
「言われているようなクーデター説はまったく事実と違う。朝生氏には、幹事長として事態の収拾に汗を流していただいたと、感謝している」
と答えた。財部総理の発言により、「朝生クーデター説」は全面的に否定された。が、全ては手遅れだった。
この総裁選挙で朝生が福本に敗れたことで、文字通り、〝世界の歴史が変わってしまった〟。しかし、クーデター説を吹聴したマスコミや政治家の中で、責任を取った人物は、誰もいない。

それぞれの進路

慶和大の後期日程が始まって数日後、雪乃は翔と共にライブの打ち上げに顔を出した。早稜大の翔の友人たちがやっているバンドのライブに、雪乃もときどき招待されていたのだ。

最近は足を延ばすことが少なくなっていたのだが、雪乃は翔と先日のメールについて話したいと思い、久しぶりに飲み会まで参加した。ライブ中は無理だが、居酒屋の席でならゆっくり話せる。

「翔、なにげに凄かったんだね。わたし、見直した」

嬉しげに褒めると、翔はなんだか当惑したような顔をする。

「ああ、よく覚えてないけど」

また適当な返事がきたが、雪乃はまったく気にならなかった。途上国放浪の旅に出たり、ロックフェスに行って音信不通になったり、自分探しとかばかりしているテキトー男だが、実はいろいろ考えていたのだと、雪乃は心底感動しているのだ。

しかし、ひとしきり友人と騒いだ後、翔は思い出したように雪乃を振り返り、とんでもないことを言い出した。

「言い忘れてたけど。俺、後期から休学することにしたから。しばらくユーロ圏に行ってるけど、まぁ、お前も頑張れよ」

「え」

雪乃はびっくりして、思わず声が大きくなってしまう。

「なにそれ？　て、なんで、そんな大事なこと、勝手に決めてるの？」

呆（あき）れ、まだ文句が口をついて出そうになる。

そのとき雪乃の脳裏に、先日のメールのやりとりが浮かんだ。あのような問答、なかなかできるものではない。しかも、故意か偶然かは分からないが、今までそれを隠してきたのだ。わたしの知らない翔が、翔の中にはたくさんある、ということの証左だ。そうだ、彼には、あまりうるさく言ってもしょうがないのかもしれない……。

「もう、わたしからは、いい。好きにして……。でも、メールの返事はちゃんとしてよ？

それと、携帯番号、ちゃんと教えといて」
「りょうかい」
「ケータイは海外でもつながるしね」
「ん、つながる、つながる」
翔は雪乃に向かい、ニッと笑った。
居酒屋は学生特有の熱気で充満し、笑い声が響く。翔の声も、そのざわめきの中に埋没している。雪乃は、自分の〝彼氏〟をあらためて見つめた。
学生らしくないほど日に焼け、肩まで伸びた黒髪を無造作に後ろで結んでいる翔。履いているジーンズは穴だらけ、手首には各国放浪のたびに増える、リストバンドが揺れている。常に大勢の友人に囲まれ、かかわっているサークルの数が多すぎて、雪乃でさえそれらを把握しきれていない……。
翔の横顔は、高校生の頃とはまるで別人のように見えた。

帰宅しシャワーを浴びた雪乃は、濡れた髪をタオルでふきながら、テレビをつけた。画面には、新総裁となった福本の演説風景が流れている。携帯を手にし、左手のみで、器用にメッセージを書き込んでいく。

〈総裁選、朝生さん負けちゃったね。新宿ではあんなに大人気だったのに、勝てないんだね。何か変な感じ〉

雪乃が翔にメールを送ると、1時間後に返信が来た。

《今回の総裁選挙では、バンドワゴン効果というプロパガンダ手法が使われた。総裁選開始時点で、自民党の七派閥の長が福本支持を明確にしたため、議員たちの「勝ち馬」に乗ろうとする心理が働いてしまったのだ。自民党の総裁選挙の勝者は、日本国の内閣総理大臣を意味し、絶大な権力を握る。総裁選挙で負け馬に乗ってしまうと、その後、しばらくの期間、議員たちは冷や飯を食わされることになる。結果、議員たちの投票行動は政策や政治信条とは無関係になってしまうのだ。良い悪いの問題ではなく、政治とはそういうものだ》

〈バンドワゴン効果！　この前からびっくりなんだけど、翔って意外に詳しいよね。いつの間に勉強したんだよー〉

返信を待つ間、雪乃は自らインターネットで「バンドワゴン」について調べてみることにした。ついでに、先日のメールのやりとりで話題になったリテラシーについても、検索してみようと思う。雪乃も語学に関しては割と堪能で、TOEICも800点を超えている。しかし、リテラシーという単語を会話で使用したことはなかった。

雪乃は検索エンジンに、まずは「バンドワゴン」と打ち込み、エンター・キーを押した。

【バンドワゴン効果】

ある選択が多数に受け入れられている、あるいは流行しているという情報が流れた結果、その選択への支持が一層強くなること

翔がメールで書いてきた通り、簡単に言えば勝ち馬に乗る、という意味だ。そういえば、テレビの報道などで「バンドワゴン効果」と口にするコメンテーターもいたかもしれない。

雪乃はふと、疑問に思った。バンドワゴン効果が確かに存在するならば、選挙戦の最中にテレビや新聞が候補の人気投票などを報道すると、上位にランクインした候補者を勝たせる効果が発生するということになる。国民の意思ではなく、メディアの報道によって、

〝国民の意思〟が影響を受けてしまうのだ。これは、問題にならないのだろうか？

雪乃は試みに、「公職選挙法　人気投票」と検索してみた。すると、公選法の中に、まさに該当の箇所があることを発見した。選挙前の「人気投票」を禁止している部分である。

『公職選挙法　第１３８条の３（人気投票の公表の禁止）

何人も、選挙に関し、公職に就くべき者（衆議院比例代表選出議員の選挙にあつては政党その他の政治団体に係る公職に就くべき者又はその数、参議院比例代表選出議員の選挙にあつては政党その他の政治団体に係る公職に就くべき者又はその数若しくは公職に就くべき順位）を予想する人気投票の経過又は結果を公表してはならない』

雪乃は驚き、幾度か条文を読み返した。

このような法律があるにもかかわらず、国内の新聞社やテレビ局が選挙投票日前に「公職に就くべき者又はその数若しくは公職に就くべき順位」を予想する調査を実施し、各党の予測議席数などの結果を公表しているのだ。メディアの予測議席数は、明らかに有権者の投票行為に影響を与えている。つまり、選挙期間中の新聞やテレビの議席予想は、〝公職選挙法違反〟ではないか？

しかも、メディアの公選法違反を報じるべきは、まさに新聞やテレビなのである。しかし雪乃は、今までこの問題についての報道を見たことがない。メディアが自分たちを糾弾する報道を、果たしてするのか、それとも黙殺するのか？　自身が社会の公器であると認識していれば、報道するはずだ。しかし……？

釈然としない気分の雪乃だったが、続いて、先日来、頭の片隅に引っかかっていた「リテラシー」についても検索してみる。

【リテラシー】
読み取り能力。あるいは情報を適切に理解し、解釈し、分析し、また記述、表現する能力

もともとリテラシーという単語自体は知っていたが、あらためて調べてみると、非常に概念的な用語だと感じる。先日の翔は、「国民は自ら情報を取捨選択するリテラシーを身に付けなければならない」と述べていた。つまり、メディアから報じられる情報について、そのまま受け止めるのではなく、自分なりに考えて解釈すべき、ということだろうか。

と、雪乃はここで気が付いた。自分は今、リテラシーという言葉について知ろうと、イ

ンターネットで検索し〝調査〟した。

翔のメールの文面も、一種のメディアだ。一対一のコミュニケーションであり、〝マス〟メディアではないが、それでも情報をやりとりしているということに変わりはない。翔がメールの文面でリテラシーという単語を使った。それを受け、分かったふりやスルーしたりせず、自分できちんと調べ、正しい理解をするべく努力する。これがおそらく、翔の言うところの、〝リテラシー〟なのではないだろうか？

返信を期待していたが、その後しばらく、翔からの返事はなかった。

雪乃にしても学業や就職活動で忙しくなってしまい、彼氏であるはずの翔のことを忘れている時間も多くなった。日々の生活で思い出さない時点で、翔が自分の彼氏なのかどうか、すでにあやふやだった。翔からも海外渡航の報告も何もなく、今彼が国内にいるのか、それとも遥か異国の地にあるのか、分からなかった。

しかし、翔のメールの内容は、雪乃に変化をもたらした。報道やマスコミ関連の講義を多数とっている雪乃であったが、前期はあれほど面白かった講義が、後期の現在ではそれほど楽しさを感じないのだ。理由は明らかに、マスコミ報道に対して生まれた小さな不信感だった。

以前は大手広告代理店の管理職の講義などを喜んで聞きにいったものだが、今はそこまでの熱意が生まれない。講義を受けていても、この講義内容がどこまで真実に近いのか……と一歩ひいて考えてしまうのだ。

10月初め、雪乃はもう一度、思い出したようにメールを打ってみた。きっかけは、福本新総理の国会での所信表明演説である。

〈久しぶり。日本では今、福本総理の所信表明演説が話題になってるよ。「日本が本格的な人口減少社会を迎えて、少子高齢化に伴う社会保障費の増大とか、いろいろな難題に直面してる。改革と安定した経済成長が必要」と言っていた。でも、少子高齢化の日本が経済成長なんて、できるわけないじゃん。諸外国からは、どう見えてるんだろ〉

3時間後、返信が来た。

《経済成長と少子高齢化は、ほとんど関係がない。理由は、経済成長とはGDPの拡大を意味するからだ。GDPとは大雑把に言うと、個人消費、民間の投資、政府支出、純輸出の四つからなる。例えば少子高齢化で「個人消費」が減ったとしても、投資や政府支出、

純輸出を伸ばせば経済成長は普通に達成できる。そして、経済成長を実現すれば、少子高齢化だろうが個人消費は増えてくる。そもそも、現在の日本があまり成長していないのは、デフレ深刻化で消費や投資が増えないためだ。政府が正しいデフレ対策を実施し、デフレから脱却すれば、日本経済は普通に安定した経済成長路線に戻れる》

翔だ！ と喜ぶのも束の間、この返信に、雪乃は嬉しさよりも驚きのほうが勝ってしまった。翔がマスコミ報道のみならず、経済についても造詣が深いとは。意外過ぎる……。

また、雪乃は自分で「経済成長できるわけない」とメールに書いたにもかかわらず、実は経済成長の意味をきちんと理解していないことに気付かされた。大学でも、経済学関連の講義は一切とっていない。この手の知識は、小学校や中学校の社会科で習ったまま、置き去りになっていたのだ。

経済成長とは、GDPの拡大。GDPとは「国内総生産」を意味するということは、雪乃も当然知っている。それでは、「国内総生産」とは何だろうか。翔のメールによると、国民の消費、投資、政府支出、純輸出の合計とのことだが、消費や投資は分かるとして、政府支出、純輸出とは？

またあらためて考えてみると、消費や投資というのも、自分の理解で本当に正しいのか

疑問である。特に、投資と聞くと、雪乃は反射的に「株式投資」を思いついてしまう。雪乃は日本財界新聞、略して日財を定期購読しているため、紙面で毎日のように「株式投資」という用語を目にしているのだ。ということは、翔の言う投資とは、株式に投資するという理解でいいのか。どうも違う気がする……。

雪乃は、ノートパソコンを開き、〝GDP〟で検索してみる。すると、ある経済アナリストのブログがヒットした。経済学の文書をあさるよりも、経済学初心者の自分には、こういったブログ記事のほうが読みやすいだろう。雪乃はそう考え、ブログ内のGDPの説明箇所を読んでみる。

【GDP（国内総生産）】一定期間に国内で生み出された付加価値、所得の合計。同時に消費などの支出の合計でもある。付加価値の合計は生産面のGDP、所得の合計は分配面のGDP、支出の合計は支出面のGDPとして統計される。三つのGDPは、必ず合計金額が一致する。これをGDP三面等価の原則と呼ぶ。

読んだものの、雪乃には一瞬、何のことか分からなかった。所得の合計については当然理解できるが、支出の合計とは？　雪乃の疑問に対する答えは、画面をスクロールしてい

く見つかった。

【支出面のＧＤＰ】一定期間内に国内で支出された個人消費、民間の投資、政府の支出、さらに純輸出の合計を意味する。

これだ。個人の消費と、民間の投資、そして政府の支出と純輸出の合計。この四つを足し合わせたものが、支出面ＧＤＰというらしい。民間の投資とは、住宅投資や設備投資のことであると書いてある。どうやら、株式投資は関係なさそうだ。

ということは、確かに個人の消費が減っていても、それ以外の住宅投資や企業の設備投資、政府の支出、純輸出が増えればＧＤＰは増えるということになる。

翔のメールによれば、ＧＤＰが増えることこそが、経済成長、とのことだが……本当に、「ＧＤＰの増加」イコール「経済成長」なのだろうか？

雪乃は再び画面をスクロールする。

【経済成長】ある国の経済規模が増大していく現象。経済規模の指標はＧＤＰを用いる。

翔のメール内容と合致する。経済成長とは、経済規模の増大。経済規模は、GDPで測る。ということは、まさにGDPの拡大こそが経済成長を意味する。

ふと、雪乃は我に返った。この数十分、雪乃はパソコンに向かい、言葉の再確認を繰り返し、それまで知らなかった知識を次々に得た。いや、厳密には違う。それまで単語としては知っていた言葉の意味について、〝正しく〟理解し始めたのである。

携帯のメール画面と、パソコンのグーグルのトップページをあらためて眺め、雪乃は思った。これがまさしく、翔が以前に言っていた「リテラシーを身に付ける」ということなのだろう。

新聞やテレビに接しているだけでは、その情報が〝本当は〟何を意味しているのか、について把握するのは、ほぼ不可能だ。これまで雪乃は、情報を正しく理解していないにもかかわらず、メディアから与えられた知識に基づき、物事を判断してきた。今までこのように考えたことがなかった雪乃は、そういう自分が少し怖くなった。

以前、翔がメールで「情報が歪められると、民主主義が壊れる」とか何とか、書いてきたことを思い出す。民主主義の基本は、有権者の投票で全てが決まる、と。このとき、有権者がメディアから与えられたイメージに基づき、なんとなく票を投じてしまうと、それこそ民主主義を、マスコミ報道が脅(おびや)かしていることになりはしないか？

しかもメディア側は、自分たちが送り出した情報を基に、有権者が間違えた投票行動に及んだとしても、一切の責任を取らない。新聞やテレビが、「誤った情報を世に送り出してしまった。申し訳ない」と、自らの過失を認め謝罪したのを、雪乃はこれまで一度も見たことがない。

政治家や官僚、それに企業は、一挙手一投足をマスコミから監視されている。ひとたび不祥事の臭いを漂わせれば、途端に猛攻撃に遭う。政治家は失脚または辞職に追い込まれ、官僚は自己の職務に対する誇りを奪われたうえに給料削減案をつきつけられ、企業はイメージ悪化とそれに伴う業績悪化というダブルパンチを受ける。

しかし、新聞やテレビが悪事を働いたときは、一体誰が批判するのだろうか？　全てのメディアが、自らの不祥事について沈黙を保つと、一般市民はその事実を知る術（すべ）すらないことになる。これは、恐ろしいことではないのだろうか……？

その後も時折、雪乃は翔にメールで質問をし続けた。個人的なことを送っても返信がない。ところが、なぜか政治経済やマスコミに関する質問をすると、速攻で返事が返ってくる。しかも、文体がいつも偉そうだ。

いつしか雪乃は、翔はもうわたしを彼女じゃないと割り切ってるのだろう、などと考え

始めていた。個人的な悩みには無反応、議論でき得る話題なら返信が来る。これって、無言のお知らせなんだろうな、と考えるようになっていた。

秋の盛りを迎えたキャンパスは、色とりどりの落ち葉に飾り立てられている。

午前の講義を終え、雪乃はランチに向かうところだ。いつもの待ち合わせ場所のベンチに、スクールガール風のコーディネートのあやと、黒の伊達メガネで女教師のような出で立ちの若菜が並び、おしゃべりをしている。雪乃が呼びかけると、あやがぱっとこちらを向き、声を上げた。

「ゆきの、今日もかわいい〜。秋色のショーパン似合う〜」

カワイイのはあやの方なんだけど、と雪乃が返すと、あやは笑顔で立ち上がり、バーバリー・チェックの超ミニスカートのお尻を払った。若菜も広げていたノートやテキストをしまうと立ち上がる。若菜も秋らしく、ベルベットのジャケットにワイドパンツ。ヘリンボーンのワイドパンツがここまで似合う学生は少ないだろうな、と雪乃は感心してしまう。

歩き始めると、雪乃は二人に尋ねた。

「二人とも、エントリーシート出す企業リスト、決まった？　わたしはとりあえず、大手

新聞とキー局は全部出してみる。落ちたらまた考えようと思って」
するとと、二人は明らかに驚いた顔をした。あやが大きい目をさらに大きく見開いて、雪乃を見る。変な沈黙が流れた。あやが答えないのを見てとると、若菜が渋い表情で口を開いた。
「わたしたち、エントリーシートはどこにも出さないわ。その必要がないの」
雪乃は驚いた。
「なに、それ」
「んー、雪乃、あのね、もう内定状態なのよ」
「え……それって……」
あやはいつもの、くふっという笑いを浮かべる。
「てゆうか、ゆきの、気付くの遅い！　ほらぁ、あたし、パパがＴＮＳの役員だし。だから、パパが頑張ってくれたってゆうか」
少し間をおいて若菜も言いにくそうに口を開く。
「私の祖父、新聞社に知り合いが多いでしょう。そういうおじ様たちが、うちに頻繁に出入りしてたから、当然私も可愛がられて育ったのよ。だから、ね」
雪乃は少なからずのショックを受け、友人たちの顔をまじまじと見つめてしまった。

今まで一緒に、マスコミ就職を目指していた仲間ではなかったのか？　と、口をついて出そうになったが、雪乃はすんでのところで我慢した。なぜなら、冷静に考えれば当たり前のことだからである。スタートラインが違うことを、二人は知っていて、雪乃だけが気付いていなかった。つまり、わたしが、世間知らずなだけだったのだ……。

その後のランチはいつもとは空気が違い、居心地が悪かった。常連であるカフェの、お気に入りのランチプレート。大きな窓ガラスからは紅葉した街路樹が見え、店内のＢＧＭは70年代のフレンチ・ポップである。しかし雪乃はイライラし、適当に返事をしながら、サラダやフルーツを口に押し込んだ。

あやは通常通り盛んにしゃべっていたが、若菜の方は少し不機嫌なようだった。

冬の足音が聞こえる頃には、雪乃は、キャンパスとマンションの往復以外には、あまり目立った活動をしなくなっていた。「マスコミ就職を目指す学生の情報交換会」の飲み会にも参加しないことが多い。あやとも若菜とも、少し距離を感じる。もちろんメールはするし、学内でお茶をすることは時折あるのだが、以前のように連れ立っての買い物やどこかへ一緒に遊びに行くことはなくなった。翔ともただの〝政治談議メル友〟の状態になっている。

雪乃は、自分の将来について考えることが多くなった。
翔のことも、昔とは違った意味で考えに上ることが多い。思えば、高校3年の夏から、だらだら付き合ってきたけど、こういうのは違う。自分が2年後、社会人になったとき、翔はまだ学生で好きなことをやり続けているだろう。それは、翔が子供だとか、わたしが普通だとかではない。人はいろんな生き方がある、というだけだ。
わたしは、本当は何がしたいんだろう？　10年後、わたしは何をして、誰と一緒にいるんだろう？
雪乃は講義と就活のノルマ、そして自問自答を繰り返す日々を思い、暗澹（あんたん）とした思いで冬枯れを見上げた。

吹き止まぬ嵐

２００8年の年が明けた。
この頃、07年の自民党総裁選挙に敗れた朝生一郎は、福本から持ちかけられた役職就任を断り、全国を遊説して回っていた。総裁選挙に敗れたからといって、朝生は特段、福本に遺恨があるわけではない。結局のところ、選挙に敗れた責任は、最終的には自分一人で負うしかないのだ。
地方回りを続けていた朝生は、長引くデフレ不況により、地域経済が疲弊の極致に達していることをあらためて理解した。朝生は福岡の地方都市の出身であり、もともとは地元で鋼材会社の経営者をしていた。特に、97年の橋元（はしもと）政権による緊縮財政の開始以降、地方経済の中核を担う公共事業が極端に削られ、各地で頻繁に怨嗟（えんさ）の声を聴いた。何しろ、行

く先々で、「建設会社の誰々が自殺した」「仕事を失った」「どこどこの家が、心中を図った」という話を聞くのである。異常事態と言ってもよかった。

実は、日本は橋元政権による緊縮財政開始以降、自殺率がそれまでの1・5倍にはね上がってしまっている。毎年年末には、新聞やテレビで「日本の今年の自殺者数、またもや3万人突破」というニュースが流れる。日本の年間自殺者数が3万人を超えるようになったのは、デフレが深刻化した98年以降なのだ。

また、経済に関連し、朝生が特に注目したのは地価の下落である。90年のバブル崩壊以降、日本の基準地価は下がり続けている。土地の価格が下落するとは、すなわち担保価値が下がるという話で、企業は銀行融資を受けられなくなる。企業が金を借りられなくなると、投資が減り、経済全体のパイが縮んでしまう。

日本国内には奇妙な認識を持つ人が少なくなく、借金をまるで悪のごとく批判する。評論家の中には、「借金は企業だろうが政府だろうが、とにかく全てゼロにするべきだ」などと無茶苦茶なことを言う連中もいる。この手の主張を口にする者は、資本主義を否定しているに等しい。

そもそも、資本主義とは「企業の借入と投資」により成長するものだ。企業の経営者が成長を信じ、将来の収益のために金を借り、投資をする。投資された金は、別にこの世か

ら消滅するわけではない。投資企業から、設備や建設サービスの代金を受け取った、受注企業の銀行口座に移る。金は使われても、この世から消えるわけではないのだ。
発注企業から受注企業の口座へと移動した金は、また別の企業に融資として供給され、投資に回る。結果的に、投資を含む国民経済のパイ、より具体的にはＧＤＰが成長していくのである。借金は全て悪、と主張するなど、資本主義と同時に経済成長を否定する愚挙である。
国民経済の成長は、ＧＤＰの成長である。企業の借入や投資が増えず、ＧＤＰという経済のパイが膨らまないということは、つまり国民が「豊かになっていない」という意味を持つ。ＧＤＰとは消費や投資などの〝支出〟の合計であると同時に、国民が一定期間に稼ぎ出した付加価値、そして〝所得〟の合計でもあるのだから。
突き詰めれば、借金や成長を否定する人は、日本国民に対し「豊かになってはならない」と言っているも同然なのである。朝生は、新聞やテレビに登場する学者や、識者と称する連中が、日本国の経済成長を端から否定している傾向に我慢がならなかった。
朝生は元経営者という経歴から、日本国のデフレ問題の深刻さについて懸念を持っていた。その危惧が特に顕著になったのは、思い起こせば橋元政権の頃からである。日本国の官僚や政治家がデフレを未経験であるが故、結果的に的外れな対策ばかりを打ち、デフレ

深刻化を招いている現実を、早期から見抜いていたのである。
バブル崩壊後の日本政府は、政治家も官僚も含めて、デフレ不況を「普通の景気循環による不況」であると思い込み、傷を深めてしまった。通常の不況であれば、金利を引き下げれば企業の借入と投資が回復し、経済は成長路線に戻る。ところが、バブル崩壊により企業が借金返済に邁進（まいしん）するデフレ期には、利下げはほとんど効果を発揮しない。
朝生は橋元政権が発足する以前の1996年1月初めの段階で、
「ご存じかと思いますが、今日公共投資が景気に占める影響の率は9％以下といわれているー方、個人消費の比率は60％弱といわれているんです。貧しかった頃と比較して、個人消費の比率が極めて大きいのです。その個人消費の源である利子収入を月々10万円も減らして、景気がよくなるはずはありません。
しかし、大蔵省はもちろん、マスコミも、そして国民の多くも金利が下がりゃ景気刺激になると信じておられるんじゃないんですか。
過去に成功した方法も時代が変われば未来を保証するものではないことを、今年1年ぜひ肝に銘じて20世紀最後の5年間、新しい変化に挑戦されることを期待しています」
と発言している。
さらに、同じく96年9月には、

「確かに吉宗公は質素倹約を旨として、率先して生活を切りつめ、自ら範を垂れようと努力されたことは、それなりに認めなければなりません。しかし、それは個人のレベルとしては正しいかもしれませんが、経済とか国家全体のレベルで考えた場合にも適しているかといえばはなはだ疑問であります。

例えば、皆さんがタバコをやめ、酒もやめ、ゴルフもやめ、パチンコもやめ、タクシーにも乗らず、健康のためにジョギング等々を断行したと想像してみてください。奥さんや家族の人たちは喜ばれるでしょうなあ。『やっとウチの主人も……』と期待もされるでしょう。しかし日本中全ての人が実行されたらどうなります。

まず日本タバコ産業をはじめ、タバコ小売店は全てつぶれます。もちろんビール会社をはじめ3000社に近い日本酒のメーカー、酒小売商のオール倒産は確実です。日本中のゴルフ場がみんな廃業に追いこまれることも間違いありませんし、夜の歓楽街も酒なしで商売が成り立つとは考えられませんから、多分スナック、バー、カラオケ屋さんも消滅します。

思いつくままに書きましたが、少々極論を申し上げている点もあるかと思います。しかしこの世の中は個人のレベルでは正しくても、全体では正しい政策にはなり得ないことも多くあるということを知っておかねばなりません」

という文書を書き残している。

前者において、朝生は現在も続いている「流動性の罠（デフレ期に金融政策が無効化されること）」を、後者ではやはり現在の日本の根源的な問題である「合成の誤謬」について語っているのだ。

合成の誤謬とはマクロ経済学の用語であり、「ミクロの視点で合理的な行為が、それが合成されたマクロの世界では意図しない結果が生じるケースがあること」を意味している。

例えば、バブル崩壊後に企業が自社のバランスシート（貸借対照表）に積み上がった借金を返済することは、合理的な行為だ。ところが、それを日本中の企業が実行に移した日には、国民経済のパイであるＧＤＰが激減することになる。なぜなら、借金返済とは消費でも投資でもないからだ。

ミクロ面における合理的な行為、企業の借金返済が、国民経済というマクロに集計されると、ＧＤＰの大縮小という非合理な結果を引き起こしてしまう。これがまさに、合成の誤謬である。

07年の日本の政局は、福本政権発足以降も大荒れの嵐が吹き続けていた。そもそもこの惨状は、財部政権末期の参議院選挙において、自民党が第一党の座から滑り落ちたことが

根本的な原因である。

衆議院と参議院で、異なる政党が第一党を占めている。結果的に、国会は混乱せざるを得ない。この時点では、自民党が衆議院の3分の2を占めていたため、参議院で法案を否決されても、衆議院で再可決することができた。ところが、憲法第59条における衆院の優越は、各種の法律について、

「衆議院可決後に参議院で否決され返付された衆議院議決案を衆議院で出席議員の3分の2以上の多数で再可決すれば法律となる。衆議院可決案の受領後60日以内に参議院が議決しない場合、衆議院は参議院が法案を否決したとみなすことができる」

となっているのだ。すなわち、野党が主導権を持つ参院側は、衆院から送られてきた法案を審議せずに、与党の政権運営を妨害することができるのだ。予算や条約の場合は、衆院優越がさらに強く、

「参議院が受領後30日以内に議決しない場合、衆議院の議決が国会の議決となる」

と、憲法第60条において定められている。が、例えば予算には、関連法案がつきものだ。予算自体は衆院議決後30日で成立したとしても、関連法案はそうはいかない。参議院側は関連法案を最大60日間審議しないという形で、与党に対する妨害が可能な仕組みとなっているのである。

もっとも、参議院の権力の強さは、チェック機能としての役割を期待されることによる。衆議院の議決がそのまま即座に法律になってしまうのでは、国家としてあまりにも拙速だ。そういうわけでもともとは、「衆院で可決はしたが、ここで一旦、参院でも落ち着いて考えてみよう」という主旨に基づき、参議院の権限は成り立っているのである。少なくとも予算や条約といった重要懸案については、最終的には参院が審議をしない場合、衆院の議決が国会の意思となる。それにしても、野党が参院の多数派を占めている場合、「参院は一定期間、審議しなくても良い」という憲法上の規定を、政権運営の妨害手段の一つとして活用しようとすることは避けられない。

この08年の新春、衆参のねじれに苦しめられた福本政権に、ある画期的な打開策を持ちかけた者がいる。すなわち、国民テレビ氏本会長と読解新聞の渡会会長の両名である。例により、国民テレビ最上階の大会議室を訪れた自民党の森木衆議院議員は、氏本と渡会から仰天するような提案を受ける。

「森木君。どうかね。衆参のねじれ国会は、きついだろう」

何を当たり前のことを、と内心苦々しく感じながら、森木は返す。

「そこは、ご想像のとおりですよ……特に民主党の連中は、国のためではなく、完全に党

利党略が目的ですからなあ。参院における優位な立場をここぞとばかりに利用してくるため、このままでは、政権運営は立ち行かなくなるというものです」
「そうだろう、そうだろう」
渡会が笑いながら答える。
「どうかね。いっそ、自民党と民主党が『日本国家のため』に大連立を組み、国会の問題を一挙に解決するというのは？」
「……」
森木は唖然とし、咄嗟の返答が見つからなかった。自民党と民主党が連立政権を組むのでは、まるで大政翼賛会である。国民はもちろん、自民党の議員たちも納得する筈がない。民主党側にしても、当然のごとく拒否するだろう。
「懸念は承知だ、森木君」
今度は氏本が重々しく口を開いた。別に血縁関係にあるわけではないのだが、氏本と渡会は外見が似ている。一見すると、まるで兄弟が並んでいるようだ。
「国民や議員が納得しないというのだろう。しかし我々が全力を挙げて『大連立キャンペーン』を展開するのだから、心配は要るまい。まあさすがに、福本君自ら小川君と交渉するわけにもいかんだろうから、君が間に立ちたまえ」

「間に立て、と言われても……」
森木は咄嗟に脳をフル稼働させ、こたびの大連立構想の可否について計算してみた。意図は分からないでもないが、まず実現は無理だ。実現如何(いかん)によらず、民主党の小川代表との間に立った自分が、党内から批判を浴びる可能性もある。
「迷うことはない。そもそも我々は、福本政権樹立の時点からの同志だろう？ 同志森木、日本国家の繁栄のために、今こそ君が動くときじゃあないかね」
渡会の言葉に、森木は内心、虫唾(むしず)が走った。だいたい、渡会は頻繁に「同志○○」という呼びかけを使うが、いまだに共産党員だった時代の癖が消えていないのだろうか？
しかし森木としては、福本政権樹立の話を持ち出されると、痛い。特に、氏本配下の八俣の口車に乗って、自派の若手に盛大に「朝生クーデター説」を吹聴させたのはまずかった。あれが完全な作り話だと世間や議員たちに知られると、さすがに森木派に対する攻撃が始まりかねない。しかも、今、森木の目の前にいるのは、自分たちでシナリオを組み立てておきながら、「当紙の調べによると、07年総裁選挙時に広まった『朝生クーデター説』は、森木元首相をはじめとする森木派の『朝生おろし』の一環で、根拠なき謀略だった」と、新聞一面に書きかねないような連中なのだ。そうなると、さすがの森木も無事では済まない。

一度でもメディアという怪物に借りを作ってしまうと、この無限輪廻（りんね）から逃れることはできないのだ。政治家は選挙で落選すれば、ただの人に逆戻りだが、メディアのドンたちは違う。彼らは、〝民間〟の経営者である。

会議は長時間に及んだが、結局、森木は屈服し、自民党と民主党の橋渡しをすることを引き受けざるを得なかった。

その後、森木の仲立ちで、数回、福本首相と民主党小川代表との会談が持たれた。国民テレビと読解新聞は派手な大連立キャンペーンを展開したが、最終的には民主党側が役員会で反対し、大連立構想は挫折した。

意外なことに、読解新聞以外の大手紙は、氏本や渡会が主導した大連立構想について、批判を展開していた。特に、読解新聞会長の渡会が主筆として自紙で大連立構想を後押ししたことについて、旭新聞は、

「事実を民に伝えるべき記者が、裏では事実を〝つくる〟側に回ってしまう。これでは、報道や論評の公正さが疑われても、詮ないことだ。一連の経緯には、なお不明な点が多く残る。実は、誰よりも真実に近い情報を持つのは、読解新聞ということになりはしないか。疑念は拭えない」

と社説に書いている。

政権中枢から距離を置いた立場から、大連立構想を見ていた朝生は、福本政権の短命を予感する。マスコミが政権閣僚の失言を大々的に取り上げ批判する「言葉狩り」も、財部政権時代よりひどくなっていた。

このままでは、福本政権はもたない。再び、自分が立ち上がらなければならない時期は、どうやら近いようだ。

メールの主

　雪乃は年末、ヘアサロンに予約を取り、気に入りのアッシュ・ブラウンから黒髪に戻した。年末年始の里帰りの後、大手新聞社全てにエントリーシートを提出するためだ。もちろん、興産新聞の新入社員募集にもエントリーした。コネのない自分が受かるのはおそらく無理だろうと考え、他業種の情報もチェックしていたが、どうやら奇跡が起きたようだった。興産新聞において、何とか筆記試験をクリアし、一次面接まで残ることができたのである。

　無論、面接からが本番であり、当日の雪乃の緊張は尋常ではなかった。しかし、まさに幸運とも言うべき偶然が雪乃を待っていた。雪乃が面接室のドアを開くと、そこには、朝生の演説のときに出会った男性の姿があったのだ。名は確か、原田。

原田は雪乃を見て、笑って挨拶をした。つられて、雪乃も硬い表情を崩した。圧迫面接であると事前に就職指導員から散々おどされ、びくびくしていた雪乃だったが、原田の存在のおかげで一気に緊張がほぐれた。結果、厳しい質問にも堂々と答えることができたのだ。

これが功を奏したのか、その後の雪乃の面接はスムースに進み、雪乃は晴れて、興産新聞からの内定通知書を受け取った。あまりの嬉しさに、現実感がなかった。

封筒を手に、すぐに実家の両親に電話をし、久方ぶりの声を聞く。母の和子は、「雪乃の行きたい業界でよかったわねえ」とのんびりしたものだったが、父はまったく違った。

雪乃の父の清は、地方銀行の小田原支店に勤めている。中堅私大を出て出世に苦労している父は、雪乃が慶和大に一発合格した際、凄い勢いで大喜びした。しかし、今回の歓喜といったら、その比ではなかった。普段は口数少なく地味な男なのだが、電話の向こうから、

「天下の興産新聞か！　雪乃、でかした！　何でも買ってやるぞ、欲しいものを言いなさい」

と宣言した。そんなに嬉しいものなのかと、雪乃は何だかたまらなく恥ずかしくなり、

「次の休みに帰るから、またそのときに考える」と、無理やりに電話を切り上げてしまった。三人兄弟の真ん中で、兄とも弟とも一定の距離感を保ってきた雪乃は、こういうベタ

な感情表現が苦手なのだ。
電話を切った雪乃は、次に翔に報告しようと、メール画面を開き、文面を考え始めた。もう、翔とは、別れようと決めていた。いい機会だと思う。彼はこれからも好き勝手をやりながら、何らかの道を進んでいくだろう。でも、わたしは、もっと一緒に歩を揃えて進んでいけるパートナーが欲しい。適当にだらだら付き合っていたのでは、人生の貴重な時間がもったいない。1年前の自分なら、絶対考えなかっただろうけど、今は強く、そう思う。

〈興産新聞から内定もらったぜ!!! わたし頑張るから、そっちも頑張って。歩む道は違うけど、遠くから応援してる。ずっと友達だよ〉

雪乃は思い切って、メール送信ボタンを押した。
今回のメールで初めて、翔に〝友人宣言〟をした。お互いに分かっているのだが、言い出せずにいる状態に終止符を打ったのだ。おそらく返信はないものと思い、雪乃は携帯をベッドに放る。
すると直後に、メール着信音が鳴り出した。フジファブリックの「桜の季節」が、妙に

大きく響いている。高3のとき、雪乃が一番好きだった曲だ。あれからずっと、翔のメール着信は、この曲にしてきたのだ。

雪乃はおそるおそる、携帯を開いた。

《就職内定おめでとう。どんな企業もその企業なりの「文化」というものを持つ。私のいる組織においても、もちろん「文化」があり、思うに任せないことが少なくない。文化とは「空気」とも言い換えることができるわけだが、特にマスコミ業界はこの「空気」が持つパワーが大きい。社内の「空気」に逆らい、正しいことを貫くことは極めて難しく、多くの者が挫折してしまう。貴方がどのような仕事に就くかは分からないが、初心を忘れず、何とか「空気」を御(ぎょ)していくことができるように祈っています》

初めて、個人的な情報に返信があったことに、雪乃は心の底から驚いた。文面を、幾度か見直す。

……これは、翔では、ない。

確かに今までも、本当に翔なのか、と疑問符が浮かぶことが度々あった。しかし、見ず知らずの人間とメールをするという事態に自分がはまっているとは思わず、その考えは否

定された。だが、今回のメールは決定的だ。翔が雪乃のことを、〝貴方〟と呼ぶことは、さすがに考えられない。

知識に富み、意見を丁寧に、少々古風に語り、しかし自身の情報については一切を書かない。おそらく男性、ある程度以上の立場を持つ人……。

このメールの主はいったい、誰なのだろう？

第二章

真実への気づき

〝最強の権力〟の動揺

08年春。雪乃は興産新聞で、インターンとして働き始めることになった。

雪乃たちインターンシップ学生のための歓迎会は、お台場にあるイタリアン・レストランで開かれた。大きな窓からは夜の海が見え、都会ならではの雰囲気を感じさせるロケーションである。

内定の喜びも冷めやらず、雪乃は今日を楽しみに参加した。が、いざアルコールが入ってみると、あまりに皆が喧々囂々（けんけんごうごう）と話し合っているため、どう馴染んでよいものか困惑してしまった。雪乃は場の雰囲気に合わせるタイプであり、同時に事なかれ主義でもあるので、正直、議論の場は苦手なのだ。

雪乃のすぐ隣には、上司の原田にガンガン議論をふっかけている女性がいる。先輩記者

の津和野智子である。
「だから、サブプライムの余波で、日本もダメになるって、最悪じゃないですか⁉　わたし株もやってるんで、悪影響出過ぎですよ！」
「日本は経済基盤が弱いからな。海外にやられたら、手も足も出ないよ。で、お前の手持ちの、具体的にどこの株価にどう影響してるんだ？」
女性の大きな声と、男性のやる気のなさそうな声が交互に聞こえてくる。
津和野は、雪乃の教育担当だ。32歳、独身である。背はそれほど大きいわけではないのだが、がっしりして肉厚な体型のため、〝なんだかデカイ〟というのが第一印象だ。今日彼女が着ているスーツは、スカートに深いサイド・スリットが入った、かなりセクシーなもの。が、そのマシンガン・トークの故か、はたまた他の理由によるものか、男性陣はあまり津和野に近づかない。原田は唯一、彼女の相手をできる猛者である……。
雪乃は所在無げに、会場内を見渡した。すると隅の方に、一人で静かに飲んでいる男性の姿を見つける。雪乃はベリーニのグラスを持って、立ち上がった。
「ここ、座っていいですか？」
雪乃の問いかけに、男性は顔を上げた。近くで見てみると、彼は彫りが深く、印象的な顔立ちである。色白の肌に、くせ毛の黒髪がよく似合っている。雪乃は、彼がすすめてく

れた隣の椅子に座った。
「皆さん、凄いですね。これが社会人なんだなー、って感じです」
「いろんな人がいるからね。でも気が弱くちゃ、やっていけない世界だよな、マスコミって」
自己主張が激しい人ばかり、という印象で、正直気後れしていた雪乃は、穏やかな彼の物言いに、ほっとした。
彼はさっと、名刺を雪乃に差し出した。名刺には、カメラマン・神庭亮一と書いてある。
「カミニワ？　リョウイチさん……写真撮るんですね。わたしが入社して一人前になったら、一緒にお仕事できたらいいな」
「ああ、そのときは宜しく。ちなみに俺の名前、カミニワと書いて、カンバと読みます」
「ふうん、変わった名字なんですね」
優しげな雰囲気の神庭に、雪乃は好印象を持った。
歓迎会の帰りの電車内で、雪乃は携帯を取り出した。お台場から藤沢までは、結構な時間がかかる。混雑した車内で他人とうまく距離をとりながら、雪乃はメールを片手打ちする。雪乃は、いつもの〝彼〟にメールを打っているのだ。

翔ではないと確信を得た雪乃だったが、見えない彼とのやりとりは依然健在だ。もはや割り切ったもので、政治経済、時事ネタ、仕事に関する感想や質問のみ、雪乃は送るようになっていた。あまりに低レベルの質問だと返信がないが、多くの場合、的確で重みのある返答が来る。

〈アラン様、こんばんは。ちょっと教えてください。今話題の、アメリカのサブプライムローンって、つまり何？　たかがアメリカの住宅ローンの焦げ付きなのに、何で世界中が騒ぐ大問題になってるの？〉

《サブプライムローンとは、アメリカの低信用層に向けた住宅ローンのことだ。日本の場合、そもそも銀行は低信用層向けに住宅ローンを提供しない。ところが、アメリカの金融機関は高金利な住宅ローンを低信用層に提供し、その債権を集めて別の債権と組み合わせ、さらに別の債券を創り出せば、リスクが減ると考えた。これが金融工学に基づく証券化商品生成の仕組みだ。しかも、アメリカの金融機関はサブプライムローンを含む証券化商品を、世界中に転売していった。危険な債権を他国に押し付け、自分たちはリスクを回避しようとしたわけだ。結果、アメリカ一国のローン問題が、世界中に拡散してしまったの

だ》

雪乃はいつからか、アラン様、と謎のメール相手を呼ぶようになっていた。翔でないのが分かった以上、自分の彼氏に呼びかけるようにはメールが書けない。メール画面の中だけの存在だが、すでに一つの人格を成しつつある〝彼〟に、呼び名を付けたかったのだ。メールの彼も、それについて触れることも、ましてや異議を唱えることもなかった。

〈全容の理解は難しいけど、酷い仕組みだってことは分かったよ、アラン様。でも、低信用層が高利回りな住宅ローンを返せないことなんて、初めから明白だと思うんだけど。何で、今まで問題にならなかったんだろ？〉

《アメリカの金融機関は、サブプライム層に住宅ローンを提供するときに、オプションARMというオマケを付けた。オプションARMとは、数年間は利払いや元利払いを免除するというものだった。将来的に、オプションARMが終了すると、サブプライム層が住宅ローンの元利払いができなくなると、みんな分かっていた。とはいえ、アメリカは昨年まで不動産バブルの状況にあった。住宅価格が値上がりをしている以上、オプション

ARMの期間が終わり、住宅ローンの返済が不可能になっても、住宅を売却してしまえば「儲かる」とみんなが考えたのだ。ところが、現実はそんなに甘いものではなく、不動産バブルはかつての日本同様に普通に崩壊した。結果、サブプライムローンの延滞率が急上昇し、これらのローンを含んだ証券化商品までもが「不良債権化」したのだ。しかも、証券化商品を保有していた債権者は世界中にいる。住宅ローンの証券化、サブプライムローンのオプションARM、アメリカの不動産バブル崩壊、オプションARMの終了。これらの要素が組み合わさり、現在の混乱が始まったわけだ》

いつも通り、〝アラン様〟の知識量は相当なものだ。政治経済のあらゆる問題、どんな疑問にも、スラスラと答えてくれる。

しかしアラン様がいかに的確に答えてくれようとも、雪乃の知識レベルの追い付かない部分が多いのは否めない。彼女はそのたびにネットにアクセスし、グーグル先生に教えてもらったり、時にはアマゾンで関連書籍を購入したりする。アラン様の説明は理路整然としており、用語さえ理解できれば、現象が根本から理解できる。

あまりに低レベルの質問を繰り返すと、彼の機嫌を損ねてしまうかも知れない。そんな心配から、雪乃は自然と勉強する時間が増えた。しかし、まったく苦にならなかった。知

識が増え、ある特定の事象について理解が深まるのは、快感でさえあった。
その理由はやはり、アラン様の説明の上手さに尽きると思う。雪乃は興産新聞でインターンシップを始めて以来、様々な言論人の話を聞く機会が増えた。が、アラン様ほど膨大な知識を蓄え、同時に、分かりやすく嚙み砕いて説明してくれる人物には、今のところ出会ったことがないのだ。
もしかしたら〝アラン様〟の正体は、政経学部の教授とかかも知れない、と、雪乃は考えたりした。

08年5月。インターネットを中心に、大手新聞社を震撼させる事件が勃発する。毎旦新聞「毎旦ジャパンニュース」のコラム「毎旦変態新聞Ma·iMa·i事件」である。
まず毎旦新聞は08年初め、「インターネット君臨」という連載記事において、インターネット上のブログ炎上などについて「悪意に基づく現象である」と決めつけるなど、大々的なアンチ・インターネットキャンペーンを展開した。この「インターネット君臨」は、ネット・ユーザーの怒りに火をつけた。加えて、興産新聞などの他紙からも「一方的な見方だ」と批判されるほど、その内容は偏ったものだった。
そして08年5月、毎旦新聞が全世界に英語で配信している「毎旦ジャパンニュース」の

コラム「Ｍａｉ Ｍａｉ」に、想像を絶する下劣なコラムを、9年間という長きにわたり掲載していた事実が発覚した。インターネットでの暴露に端を発したこの騒動は、後に「毎旦変態新聞Ｍａｉ Ｍａｉ事件」と通称されることとなる。

Ｍａｉ Ｍａｉには、ほぼ毎日、日本を貶める、または日本国民を（特に日本の女性を）貶める内容のコラムが掲載された。しかも、全世界に英語で拡散されてしまったのである。周知の事実であるが、インターネットに掲載された情報（特に、毎旦新聞のように名が通った新聞社の記事）の転載を止める術はない。一度でも掲載されてしまうと、その情報は半永久的に存在する。

毎旦新聞が〝英語で〟〝全世界に〟配信した、代表的な記事のタイトルを挙げると、身の毛もよだつ下劣さである。

「日本のお母さんは、息子のために、ひと肌脱ぐ」
「日本の女の子は、カレシと別れても、セフレになるのは当たり前」
「日本の女子高生は、ファストフードを食べた後は淫乱になるので、オトシやすい！」
「ビショビショに、エロくなろうぜ！　日本の専業主婦は、近所でお手軽に売春している」

このような虚偽の記事を、毎旦新聞は自社のサイトで、平然と世界に配信していたのである。

事実を知った日本国民を、毎旦新聞は完全に敵に回した。心ある数百万のインターネットユーザーたちが、新聞社に抗議の電話をかけ、メールを送り、さらに竹橋の毎旦新聞本社前で抗議デモが行われた。

それにもかかわらず、毎旦新聞は件のサイトを閉鎖しなかったため、ついに同社のスポンサーに対する猛抗議が始まった。紙面広告とWEB広告のどちらを問わず、毎旦新聞に広告を出している企業に抗議電話が殺到し、

「毎旦新聞に広告を出すなら、不買運動する」

「あれほど破廉恥な新聞に、わざわざ広告を出すとは、貴社も同じ穴のムジナということか」

と、Ｍａ・ｉＭａ・ｉとは直接の関係のない企業が、怒声を浴びる羽目になった。毎旦新聞の広告担当社員は、状況説明のためスポンサー企業を飛び回る。が、同紙に広告を出し続ける限り、企業への抗議電話の嵐は止まない。企業側は毎旦新聞に広告を出すことで、「わざわざお金を支払って、自社の評判を下げる」という、あり得ない事態に直面したの

だ。

結果、毎旦新聞の紙面やＷＥＢページから、一つ、また一つと広告が消えていった。最終的には、ＷＥＢページの広告が、「全て自社の広告」という状況に至った。

これには、同社のみならず、国内の全ての大手新聞社が震撼した。なぜなら、新聞社の売上は6割程度が販売収入（購読者への新聞の販売）だが、利益はほぼ１００％広告に依存しているためだ（巻末資料２９０頁【図２―１】参照）。新聞ビジネスは、販売店網の維持に金がかかる。配達コストが極めて高いため、新聞社は販売のみでは利益を出すことができないのだ。

「毎旦変態新聞ＭａｉＭａｉ事件」は毎旦新聞の利益を直撃し、同社は赤字体質に落ち込んだ。日本の新聞社は、長引くデフレにより収入全体が落ち込んでいるが、特に企業からの広告収入の減少が顕著であった。そこに「毎旦変態新聞ＭａｉＭａｉ事件」が追い打ちをかけた結果、もはや毎旦新聞は、本業では利益を確保できなくなってしまったのである。

「毎旦変態新聞ＭａｉＭａｉ事件」は、興産新聞社内で働く人々にも大きな影響を与えた。事件勃発当初は、「毎旦新聞の自業自得だ」などと嘲笑（あざわら）っていた人々も、攻撃が毎旦新聞のスポンサーに及ぶに至り、次第に口をつぐんでいった。あの攻撃が、自社に振り向けられたら、果たしてどうなるのか、という恐怖によるものである。興産新聞にしても、懸命

のコスト削減を繰り返し、毎決算ごとに何とか赤字を避けている有様で、売上は着実に減少しているのが現状なのだ。
結局、興産新聞をはじめ、日本の全ての新聞社の社内で同事件はタブー化され、ついに一紙たりとも取り上げることはなかった。しかし、新聞社内で事件に対する印象が薄れたのではない。新聞社の経営者や社員たちは、自分たちがもはや〝最強の権力者〟ではなくなりつつあることを意識せざるを得なかった。
これまで、新聞やテレビなどの大手マスコミには、庇(かば)い合い体質が定着していた。多少の批判合戦は繰り広げたとしても、新聞社の経営を直撃するニュースについては報道しない、ということが暗黙の了解になっていたのである。「毎旦変態新聞ＭａｉＭａｉ事件」は、新聞社やテレビが互いの批判を封じていても、別のメディアから大打撃を受ける可能性があることを、明らかにしてしまった。
別のメディアとは、つまり、インターネットである。

興産新聞にインターンシップとして在籍している雪乃も、「毎旦変態新聞ＭａｉＭａｉ事件」の詳細を知り、唖然とせざるを得なかった。これほどまでにでたらめであり、かつ日本や日本女性を侮蔑する記事を、歴史ある毎旦新聞が配信したとは、にわかには信じ難

い。しかも、英語で世界向けに発信してしまったという。この低俗な記事によって、日本の評判がどれだけ下がってしまったのか想像もつかない。

特に雪乃は、大学の3年次までは、ジェンダー論やフェミニズム論の講義をとっていたのだ。ウーマン・リブやジェンダー・フリーについて勉強する中で、女性の権利について自然と思い入れを持つようになった。今回のＭａｉＭａｉ騒動では、日本人の女性、特に自分たちのように若い世代の女性が性的に貶められていることが目につき、雪乃はかなりの怒りを感じていた。

しかし、報道もなければ、謝罪も行われず、サイト閉鎖もされない。雪乃はムカついて、今日のランチの際、先輩の津和野に話したのだ。が、津和野は普段のキレの良さとは別人のようで、なんだか煮え切らない返答に終始した。そういう態度をされると、雪乃は必ず、相手に適当に合わせて会話を切り上げてしまう。当然、内心のもやもやは解消されないままだ。

帰宅した雪乃は気分転換のため、珍しくバスタブにお湯を張った。そして、お気に入りのバス・ソルトを投入する。針葉樹の森のような、すがすがしい香りが広がり、雪乃のテンションは少し上がった。服を脱ぎかけたところで、ふと雪乃は思い立ち、〝アラン様〟に今回の「毎日変態新聞ＭａｉＭａｉ事件」について質問してみることにした。この手の

質問であれば、アラン様はすぐに返信をくれるだろう。

〈毎旦新聞の事件、アラン様なら知ってますよね？　あんな記事を平気で海外に配信できてたのが、すごい不思議。しかも、うちの興産新聞とか、最大手の読解新聞とかも、一切報じようとしない。なんか、おかしいと思うんです。もやもやする〉

メール送信した雪乃は、ぱっと服を脱いで浴室に飛び込んだ。しかし、アラン様からのメールがあればすぐ分かるように、携帯の着信音を最大音量に設定し、開けたドアの前に置いておいた。

雪乃がエビアンのボトルで水分補給しながら、バスタブの中で足のむくみをほぐしていると、着信音が鳴った！　予想通り、すぐにアラン様からの返信が来たようだ。

《まさに、自分で答えを書いている。他の新聞社やテレビが自社の不祥事を報じないからこそ、一部のおかしな社員が明らかに日本国を貶める報道を続けることができたのだ。日本のマスコミの問題は、最終的にはこの「庇い合い」体質に行き着く。誰からも批判されない以上、新聞産業の自浄能力は働きようがない。結果、今回の事件が明るみになったの

だ》

〈でも、他の新聞とかが書かないとしても、社内のガバナンスは働くはずだよね。スポンサーにまで迷惑をかけるような大不祥事を起こしたら、少なくとも株主は黙っていないと思うんだけど。株価が暴落するから、普通は株主が怒るでしょ〉

《日本の新聞社の中で、株式を上場しているところは、一社もない。全ての新聞社は非上場だ。しかも、既存の株主は身内ばかりだ。よって、株主によるガバナンスは、一切働かない》

え!?　アラン様からの回答に驚いた雪乃は、〝お風呂タイム〟を終了し、バスタオルでいい加減に身体を拭いた。Tシャツにショート・パンツに着替えると、パソコンを起動し、グーグル画面に向かう。

本当だ。株式検索サイトで「新聞」を検索してヒットするのは、千葉県でフリーペーパー事業を営む、株式会社地方新聞社だけである。興産新聞も、読解新聞も、毎日新聞も、旭新聞も、大手紙は一社たりとも株式を上場していない。経済をメインとしている日財新

聞すら、株式を東京証券取引所に公開していないのだ。

自らは株式上場せず、身内で株主を固めている新聞社が、「企業のガバナンスは、株主や株式市場の評価に従うべきだ」などと書いているのだ。これでは、偽善と呼ばれてもおかしくない状況なのではないだろうか……？

雪乃がパソコンの前で考えを巡らせていると、珍しく、アラン様の方からメールが届いた。これまでは、常に雪乃が質問し、アラン様が返す、というのが普通だった。アラン様の方からメールを送ってくるのは、もしかしたらこれが初めてかも知れない。

《ちなみに、日本の大手紙は全て国有地を政府から安価に払い下げてもらい、本社を建設し、ビジネスを営んでいる。しかも、販売店に不要な新聞の在庫を押し付ける「押し紙」行為を、公正取引委員会に目をつぶってもらっている。そのため、日本の新聞社は、本当の意味で政府に逆らうことなど、できなくなってしまっているわけだ。特に、財務省は記者クラブ「財政研究会」を通じ、日本の新聞社を自由自在にコントロールしている。財務省と新聞社の結びつきは本当に深い。結果的に、財務省の方針にそむく政権は、全ての新聞から総攻撃を受けてしまうのだ。この辺のところも、興産新聞で働くならば調べてみるといい》

雪乃の中のもやもやは、もうごまかしきれなくなったことを、彼女は認めざるを得なかった。

もともと、確たる信念や目的があるわけでもなく、周りに流されるようにマスコミへの就職を決めた雪乃だった。しかし、〝翔〟だと思っていた彼とのメールのやりとりにより、もしかしたらマスコミは絶対ではないのかもしれない、と考えるようになった。

そこにきて、今回の「毎日変態新聞ＭａｉＭａｉ事件」である。内定し、今後活躍していく予定の、テレビや新聞などのマス・メディアの世界。業界への不信の念ともいうべきものが、自身の中で育ち始めたのを確かに感じた。

雪乃の肌から蒸気とともに立ち昇るバス・ソルトの香りも、なんだか一気に味気ないものになってしまった。

インターネットから総攻撃を受け続けた毎日新聞は、とうとう、新聞紙面広告までもまったく入らない状況に追い込まれた。打開策として、毎日新聞は紙面に「読者へのお詫び」を掲載し、毎日デイリーニュースのサイト閉鎖を決定した。まさしく、〝やっと〟という感が否めない、遅すぎる対処であった。

『英文サイトのコラムについて、読者にお詫びします　2008年6月25日

毎日新聞社の英文サイト「毎日デイリーニュース」上のコラム「Ｍａｉ Ｍａｉ」の記事に一部不適切なものがあると指摘を受け、今日まで調査を重ねてきました。多くの方に不快な思いをさせた可能性もあります。記事のチェックが不十分だったことが原因であり、ここにお詫びします。

「Ｍａｉ Ｍａｉ」は、主に男性向け月刊誌・週刊誌の記事などを引用し、日本の社会や風俗の一端を紹介し、意義のある記事作りに努めてきました。5月下旬、「内容が低俗ではないか」などの批判が寄せられ、英文毎日編集部は、記事の一部に不適切な内容があったとし、該当記事を削除しました。それ以外の記事にもアクセスできないよう改善し、外部検索サイトにも非表示になるよう手配しました。

その後「Ｍａｉ Ｍａｉ」を根本的に見直すことを決定し、6月21日、同コラムを閉鎖しました。毎日デイリーニュースのサイト上と、毎日新聞の総合情報サイト「毎日．ｊｐ」上で、日本語と英語の二カ国語による、経過説明とおわびを掲載しました。

現在も内部で調査を続けています。監督責任を含め、関係各所に厳重な処分をする方針です。

毎旦新聞社は皆様のご意見を真摯に受け止め、今後、信頼されるウェブサイトの編集、制作に努めてまいります』

この詫び状は、あくまで〝読者への〟お詫びである。日本国と日本女性を貶める記事を自社が配信したことにより、国益を大きく傷つけたことについては考慮されていない。インターネットにおいて、即座に、

「詫びるのであれば、それは読者に対してではなく、日本国民に対してだろう」

「これまでに配信した記事について、全て訂正報道をし、誤って広がった認識を是正すべきだ」

といった批判の声が高まったのは、当たり前の流れだった。

さらに、毎旦新聞は毎旦デイリーニュースの総責任者であった浅比奈裕(あさひなゆう)を、よりによって社長に昇進させるという仰天人事を断行し、またもネット・ユーザーから一斉攻撃を受ける。これを受け毎旦新聞は、

「過失を犯した責任者を、より重要な役職に就けることで、責任感を学ばせるため」

という、意味不明なコメントを発表。当然、心ある日本国民の神経を再度、逆なでする
こととなった。

この時期の毎旦新聞は危機管理の面においても、もはや新聞社として、否、企業として、体を成さない状況に至っていたのだ。

吹き荒れる政局の嵐

２００８年９月１日。福本義男総理は突如、総理辞任の意を表明した。８月２日に内閣改造を実施し、わずか１カ月後の総理辞職である。日本中が騒然となったのも無理はなかった。

福本総理は辞任の理由について、

「国民生活を考えた場合、新しい布陣で政策の実現を図っていかなければならないと考えました」

と説明したが、納得した国民は少なかった。辞任の記者会見において、ある記者が、

「総理の会見は、まるで他人事のように聞こえます。今日の退陣会見についても、率直に言って、まさに他人事のように聞こえましした」

と、感想を述べたところ、福本総理は気色ばんで、

「私は自分自身を客観的に見ることができるのです。あなたと違うのです。そういった事情も併せて考えて頂きたい」

と反論し、これもまた国民の不興を買う。福本首相は会見で、

「国民生活を考えれば、民主党が審議を引き延ばすことはあってはならない。私が首相を続ける限り、どうなるか分からない」

とも発言している。

大連立構想の崩壊以降も、参院を活用した民主党の審議引き延ばし作戦は続いていた。実のところ、度重なる民主党からの嫌がらせにうんざりした、というのが、福本首相辞任の真の理由なのかもしれない。

財部政権に続き、福本政権までもわずか1年で終焉するのを受け、自民党はまたも総裁選挙を実施することとなった。ところが今回の総裁選挙の最中に、世界を巻き込む恐ろしい事態が発生してしまったのである。

08年9月15日。アメリカの大手投資銀行の一つ、リーマン・ブラザーズが倒産。負債総額は史上最大の64兆円であった。いわゆる、「リーマン・ショック」の始まりである。

同日、次なる危険な投資銀行と考えられていたメリルリンチが、バンク・オブ・アメリカに救済買収される。

さらに同日、世界最大の保険会社であるアメリカのＡＩＧについて、ニューヨーク・タイムズ紙が、

「ＦＲＢ（アメリカ連邦準備制度理事会）がＡＩＧから４００億ドルのつなぎ融資を打診されている」

と報じた。ＡＩＧは当時の「グローバル金融の核爆弾」と呼ばれていたＣＤＳ（クレジット・デフォルト・スワップ）を４０００億ドル分も保有していた。ＣＤＳとは債権にかけられた保険のようなもので、ＡＩＧはＣＤＳの買い手に対し、特定債権（例えばリーマン・ブラザーズに対する債権）の保険を提供する代わりに、プレミアム（保険料）を受け取っていたのだ。

注意しなければならないのは、ＣＤＳの買い手（プレミアムの払い手）側は、保険がかかっている債権を保持する必要はないという点である。例えば、「リーマン・ブラザーズのＣＤＳ」であれば、まったく無関係の第三者的な立場である金融機関が、ＡＩＧにプレミアムを支払うことで、リーマン・ブラザーズの債権の保険を購入することができる。プレミアムを支払い続け、リーマン・ブラザーズの債権がデフォルト（債務不履行）に陥っ

た場合、ＣＤＳの買い手はＡＩＧから多額の弁済を受けることができるのだ。
つまりＣＤＳとは、売り手（ＡＩＧなどの保険会社）と買い手とが、「該当債権がデフォルトするか、否か」について、賭けをしている状態なのだ。ＡＩＧは実際にリーマン・ブラザーズの債権について、巨額のＣＤＳを投資銀行（ゴールドマン・サックスなど）に販売していた。結果的に、9月15日に賭けに敗れ、政府への支援要請に追い込まれてしまった。
ＦＲＢは当初は支援拒否の意向だったが、ＡＩＧの提供しているＣＤＳがあまりにも巨額であることから、前日の姿勢を撤回せざるを得なかった。同社の破綻による影響に恐怖を覚えたＦＲＢは、結局、約８５０億ドルもの緊急融資を決定するのである。
もともと、アメリカは06年後半以降、不動産バブルの崩壊過程にあった。特に、低信用層に向けた不動産ローン（いわゆるサブプライムローン）を含む証券化商品（ＣＤＯ、債務担保証券）が世界に売り払われた結果、一国の不動産バブル崩壊の影響が、全世界に広がる事態になってしまったのだ。そして、サブプライムローンを含むＣＤＯの価格暴落で、巨額損失を抱えていたのがリーマン・ブラザーズだったのである。
リーマン・ブラザーズが倒れると、同社に金を貸し込んでいた債権者（世界の金融機関）にまで危機が及ぶ。世界主要国の中央銀行は、緊急オペレーションで通貨を金融市場

に供給し、自国の銀行破綻を避けるべく、懸命の努力を続けることになった。
日本の場合、サブプライムローン証券にそれほど手を出していなかったため、直接的な被害は軽微だった。ところが、世界中の金融市場がパニックになる中、東京市場のみが安定していたことが却って災いしてしまう。世界の機関投資家たちが、より安全な投資先を求めた結果、手持ちの資金を一斉に日本円に両替し始めたのだ。結果的に、日本円の為替レートは急騰した。

さらに、日本の株式市場は売買取引に占める外国人の割合が7割前後と、極めて高い。株式保有率自体は、外国人の割合は3割に達していない。しかし全体の保有率の7割強を占める日本人投資家は、売買に積極的ではない。従って、東京証券取引所の上場企業の株価は、外国人の売買の影響を大きく受ける構造となっているのだ。

リーマン・ショックによりパニック状態となった投資家は、安全な投資先を求め、一斉に日本円を購入する（＝外貨を日本円に両替する）。日本円は対ドル、対ユーロなどで高騰していく。外国人が保有する日本株の価値も高まると、外国人投資家は「為替差益」を求めて一斉に株式を売りに出した。また急激な円高は、東京証券取引所の主力である、日本の大手輸出企業の業績を悪化させ、株価を押し下げた。

結果、日経平均はリーマン・ショック時点の1万2000円から、約1カ月後の10月28

日には瞬間的に7000円を切るところまで暴落した。わずか1カ月半の間に、株価は何と4割も下落したのである。まさに急転直下と言ってよい、凄まじい株価下落であった（巻末資料290頁【図2―2】参照）。

日本経済は、金融面でリーマン・ショックの直接的影響を受けなかったにもかかわらず、実体経済において多大なダメージを受けることとなったのだ。

リーマン・ショックの混乱が世界で続く中、08年の自民党総裁選挙は実施された。過去2回（06年、07年）の総裁選挙のときとは異なり、今回とうとう、朝生幹事長が本命の座に躍り出た。最本命の朝生に、自民党の若手を中心とした四候補がチャレンジするという、構図となったのである。

昨年の選挙で目立った、派閥中心主義や、朝生クーデター説のようなプロパガンダは、さすがになりをひそめた。派閥単位の極端な乗合、虚偽情報の拡散による投票行動操作などは、自民党そのものへの信頼を揺るがしかねないと、議員連も気付いたようだった。

しかし、国民テレビや読解新聞などのマスコミによる、〝嫌・朝生〟の空気は消えたわけではない。今回の総裁選挙でマスコミは、前回のプロパガンダに代わり、言葉狩りに注力をした。つまり、朝生の発言を〝切り貼り〟し、〝失言〟として大々的に報道することにより、国民からの支持を引き下げようとしたのである。

代表的な事例は、9月14日の名古屋駅前における朝生の街頭演説である。もともと、日本の公共事業がイデオロギー的に削減されている状況に危機感を覚えていた朝生は、機会をとらえては、

「自然災害大国の日本において、公共事業は国民の命を守るために必要」

という自説を、堂々と述べていた。

朝生の論説には根拠がある。日本列島は震災や水害、土砂災害も少なくないため、公共事業が必要不可欠なのである。

まず、日本列島は、台風の通り道に位置している。しかも、国土の真ん中に脊梁山脈が走っており、その多くは2000mから3000mと、極めて大きな山々だ。河川は多くが急こう配であり、河口までの延長距離は短く、流域面積も小さい。日本の河川は上流から河口へと、言ってみれば、まるで滝のように一気に流れるのだ（巻末資料291頁【図2—3】参照）。

世界の多くの大河は、比較的こう配が緩やかであり、平らな国土をゆったりと流れている。国土的条件の違いから、日本の河川とはまったく異なった様相を呈すのだ。

急こう配、短い延長距離、狭い流域面積という特徴を持つ日本の河川は、台風などで豪雨になると、水嵩を瞬く間に上昇させる。河川が氾濫を起こすまでの時間も、極めて短い

のである。
福本首相が辞意を表明する直前の２００８年8月末。前線を伴った低気圧により、紀伊半島から関東地方までが、豪雨災害に襲われた。特に愛知県の岡崎市では、8月29日の午前1時から2時までの1時間の降水量が１４６・５ミリを記録する事態となる。岡崎市内では、伊賀川、更紗川、小呂川、前田川、鹿乗川、占部川、砂川、乙川と、幾つもの河川が氾濫し、竜泉寺川にかけられていた三河橋が崩落した。
岡崎市の豪雨被害から2週間が経過した9月14日。奇しくもリーマン・ショックの前日、総裁選挙に立候補した朝生幹事長は、名古屋で選挙演説を行った。
「公共工事を皆、悪の事のように言うけれども、このあいだ、愛知県はどうでした？岡崎で降った雨、1時間に１４０ミリだよ、１４０ミリ。普通、一級河川は1時間50ミリで計算してある。40ミリ降ったら、まず大体ワイパーが利かない。それが50ミリ。あそこは１４０ミリだよ。それでこれが、安城もしくは岡崎だったからいいけど、名古屋で同じことが起きたら、この辺全部洪水だよ。
これが今、起きている。新しい気候現象に対応して、我々は、しかるべきものをやらなければ。
公共工事は何も田舎だけじゃない。都会でも新しい時代に合わせて、そういう投資を、

きちんとした社会資本整備をやらなければいかんのじゃないんですか」

朝生としては、自然災害大国という日本の現実を訴え、国内で鵺のように広まっている「公共事業悪玉論」を払しょくしたかったのだ。しかし、このときの「安城もしくは岡崎だったからいいけど」発言は、失言であるとして、マスコミから猛烈に批判された。後日、朝生幹事長は、安城、岡崎の両市に謝罪文書を送ることとなった。

失言を活用したマスコミのバッシングを受けつつも、9月22日の総裁選挙に勝利した朝生一郎は、ついに日本国の内閣総理大臣に就任する。しかし朝生は、首相在任期間を通じ、マスコミによる異常な言葉狩りに苦しめられることとなるのだ。9月14日の名古屋における演説の顛末は、朝生内閣期に偏執的なまでに繰り広げられた〝言葉狩り〟を予感させる出来事であった。

マスコミが明確に反・朝生の報道姿勢を続け、世界経済はリーマン・ショックで大混乱という状況において、朝生は議員票の57%、地方票は実に95%の得票を受けたことは喝采をうけるべき快挙である。

内閣総理大臣としての所信表明演説で、朝生は特に、経済に重点を置きスピーチを行った。朝生は日本経済を全治三年と診断し、

「第一段階　景気対策」

「第二段階　財政再建」
「第三段階　改革による成長」
として、三段階を順にクリアし、国民経済を成長路線に戻すことを宣言したのだ。朝生は、日本経済が抱える大きな問題の一つは、98年に深刻化したデフレーションであることを、明確に理解していた。特に、90年のバブル崩壊以降の不動産価格の暴落、つまり資産デフレこそが、日本経済の成長を阻む真因であると確信していたのだ。
驚くべきことに、日本の不動産価格は90年のバブルのピークと比較し、何と2割にまで落ち込んでしまっている。つまり、価格が8割も減少したということである。
バブル期の企業の多くは、不動産などの資産を借入で購入していた。しかし、バブル崩壊で資産価値の暴落に見舞われた各企業は、当然ながら借金返済に励むようになり、国内の投資を絞り込んでいった。借入と投資を増やすことで資本主義経済の成長の主役を担うべき民間企業が、ひたすら借金を返済してくるのだ。銀行の手元では過剰貯蓄が膨張し、国債ばかりが買われる。
また、日本の中小企業にとって、銀行に担保として差し入れられる資産の多くは不動産である。バブル崩壊で不動産価格が暴落すると、中小企業は銀行融資を受けられなくなってしまうのだ。銀行側にしても、不良債権化する可能性がある中小零細企業への融資につ

いては、貸し渋りや貸し剝がしを行わざるを得ない。資産価格の8割が消滅してしまった以上、日本経済の主力である中小企業が、銀行から金を借りられるはずがない。
結果、日本経済は民間が「企業側が誰も金を借りない。銀行側も金を貸さない」という異常な状況に陥っている。銀行と民間企業のお金の貸し借りは、信用創造と呼ばれる資本主義の基本機能の一つだ。現在の日本は、信用創造の機能が大幅に弱まってしまっている。ある意味で、今の日本はもはや資本主義国ではないのだ。

自民党内にも、財政再建が最優先であると、主張する人々が少なくない。が、現実問題として、デフレ脱却と財政再建の両立は不可能だ。なぜなら、財政を再建するには税収を増やさなければならず、そして税収は、国民の所得が拡大しない限り増えることはない。さらに、日本経済がデフレの泥沼の中で足掻き続けている状況では、国民所得は増えないのだ。

財務省の言う財政再建とは、増税と公共事業削減を意味する。増税も公共事業削減も、国民の所得を縮小させる政策である。つまり、財務省の言うままに増税を強行し、公共事業を削減すると、国民所得の減少とともに、税収も減少する。だから財政再建はできないのだ。

つまるところ、「まずはデフレから脱却し、その後に財政再建を果たそう」という、優

先順位の問題である。その優先順位を明確にするために、朝生は所信表明演説で「第一段階に景気対策を」と強調したのである。

さらに、朝生は組閣に当たり、最も重要な閣僚である財務大臣として、中井昭二元政調会長を指名した。財務省はおそらく、朝生の景気対策に対し、猛烈な抵抗を試みるだろう。彼らにとって、現在がリーマン・ショックという金融危機の最中にあることや、日本が延々とデフレに苦しめられていることなどは、眼中にないように思われる。

いつの間にやら緊縮財政至上主義になってしまった財務官僚たちにとって望ましいのは、増税や公共事業削減などの政策だ。下手に日本経済が成長し、国民所得が拡大を始めると、当然ながら税収も増える。税収が増えれば、つまり財政再建は可能ということになり、財務省は念願の増税や公共事業削減ができなくなってしまう。

しかしおそらく、財務省の官僚たちは財政再建にすら興味がない、と朝生は睨んでいた。彼らにとって重要なのは、財政再建のための手段である、増税や公共事業削減そのものなのではないか。本来、手段には目的が不可欠なのだが、財務省では、手段が目的となってしまっているように朝生には見える。

手段と目的を取り違えた財務省が、絶大な権限を握っている。だからこそ、日本はいつまで経っても正しいデフレ対策を打てず、国民は所得減少に苦しめられ続けている……。

「とんでもない時期に、とんでもない役目を頼むことになったな」
神楽坂は老舗料亭の、最奥の部屋。床の間に生花（しょうか）が凜（りん）と生けられ、軸には「秋露如珠（しゅうろたまのごとし）」、とある。
組閣の夜、多忙の中をやりくりし、朝生はなんとか中井との時間を作った。久方ぶりに、美酒（びしゅ）を前に膝を突き合わせているが、その口の端に上るのは苦い話題であった。
「しかし、君以外に適任者は見当たらない。今後、あの財務省を敵に回すことになるんだ。経済を正しく理解している者でなければ、とても務まらん」
「自分は光栄です、総理」
中井新財務大臣は、はっきりとした口調で答えた。
「先日のリーマン・ブラザーズの破綻は、我が国にも相当の影響を与えるでしょう。少なくとも、これまで以上に円高が進むのは確実……。この世紀の動乱期に、財務相という大役を仰せつかるとは、政治家冥利に尽きます」
「そう言ってくれると思ったよ」
朝生は微かに笑って、続ける。
「今や財務省は、完全にマスコミと繋がっている。特に、国民テレビ・読解新聞のトップ

両名と、財務省主計局長の丹下泰波は、昵懇の仲だ。おそらく、丹下が事務次官として増税を実現し、将来的に国テレか読解に天下る、というシナリオができているのだろう……が、そんな真似はさせない。ともかく今の日本にとっては、長年の不況から脱出しなければ、財政再建など不可能だ」

「承知しておりますよ、総理。全力を尽くす所存です」

新任の財務大臣は、そのハンサムな顔に力強い表情を浮かべる。そして、朝生に向かって盃を上げた。

朝生の疑念どおり、バブル崩壊以降の財務省は、緊縮財政至上主義に染まってしまっていた。「緊縮財政を実施すれば、その官僚は評価される」という、おかしな文化が省内にまかり通っているのだ。

さらに問題なのは、増税や公共事業削減といった緊縮財政は、インフレ率を抑制するという点である。インフレーションとは、基本的には国内の需要（＝消費、投資）に対し、国民経済の供給能力が追い付かないことで発生する。増税によって国民の消費や投資を抑制し、公共事業削減によって政府の投資を削り取れば、国内の需要が縮小する。結果的に、インフレ率が低下するのだ。

インフレ対策である緊縮財政を、物価が下落するデフレ期にもかかわらず、財務省は繰り返してきたのだ。財務省の政策的な過ちにより、98年以降の日本は、まるで別の国のように様相を変えた。

財務省の路線に従い、橋元政権が97年に緊縮財政を強行した結果、国内の物価水準はまったく伸びなくなってしまう。外的要因により価格が変動するエネルギー及び食料品を除いた物価水準である「コアコアＣＰＩ」は、98年をピークに下がり始めた。日本のコアコアＣＰＩは、99年以降、一度も前年を上回ったことがない。継続的に物価が下落していく、まさに定義通りのデフレーションである（巻末資料２９１頁【図２―４】参照）。

物価が継続的に下がれば、企業の経営は必ず悪化し、やがて人件費の削減に乗り出す。人員を解雇し、給与水準が頭打ちになると、国民全体の所得が縮小し始めることとなる。実際、日本の平均給与は１９９８年をピークに下がり続けている。

企業の人員削減が進めば、当然、失業率は上昇する。日本の失業率は98年以降、対80年で2倍の状況が継続するようになってしまった。

さらに最も問題なのが、デフレが深刻化し、失業者が増えた結果、98年に自殺率が対前年比で１・５倍に跳ね上がったという事実である。97年まで、日本の1年間の自殺者数は2万人程度だったのが、98年以降は毎年、３万人の大台を超えている。財務省の緊縮財政

至上主義は、日本国民を〝殺している〟と言えるのかもしれない。
このまま緊縮財政路線が続くと、日本国民の所得はますます下がり、国民は貧乏になる。失業率も上昇し、自殺という痛ましい道を選ぶ国民も、増えることはあっても減ることはないだろう。特に、世界はリーマン・ショックの影響で、経済混乱が収まらない状況なのだから。
この、国家的自殺行為に、終止符を打たなければならない。朝生は、自身が知る限り最も国民経済に詳しい政治家である中井を財務相に就任させることで、同省のイデオロギーに終止符を打つことを決断したのである。

朝生内閣は、政権発足直後から「解散総選挙」を求められるという、まことに不思議な政権であった。野党はもちろんのこと、ありとあらゆるマスコミが、朝生総理に対し、
「総理！　解散総選挙はいつですか⁉」
という質問を繰り返すのである。
朝生は前任者たち同様に、首相官邸で新聞記者に周りを囲ませ、質問に答える取材方法、いわゆるぶら下がり会見に応じていた。内閣発足後の1カ月の間に、朝生は28回、ぶら下がり会見に応じた。ほぼ毎日である。そして、28回のぶら下がり会見において、「解散総

選挙はいつか」という質問が投げられた回数は、実に17回。1カ月に17回も、朝生は同じ質問に答えなければならなかったのだ。

さらに野党民主党に至っては、朝生内閣を「選挙管理内閣」と呼び、早期に解散総選挙に追い込むべく攻撃を開始した。民主党は旧社会党の極左思想を持つ事務員を多く抱えているため、この手のプロパガンダには精通しているのだ。

朝生内閣について言及する際に、民主党の議員たちは必ず「朝生選挙管理内閣は」という枕言葉を付けるようになる。「朝生内閣は選挙管理内閣である」とレッテルを貼ることで、衆院を解散に追い込むことを意図したのだ。

もともと、朝生は政権を握って以降、早期解散を念頭に置いていた。しかし、リーマン・ショックで経済が大混乱に陥り、株価も暴落している環境で、何ら対策を打たずに解散総選挙に打って出るなどできる筈がなかった。

加えて民主党は、朝生内閣が編成した補正予算について、参議院で審議を引き延ばすという、露骨な嫌がらせに出た。財部政権末期の参院選敗北以降、参議院は野党が過半数を占めている。福本政権を苦しめた「ねじれ国会」問題は、経済危機に対応しようとする朝生内閣の足をも引っ張った。

無論、現在の自民党は衆議院の3分の2を押さえている。民主党が補正予算に反対なの

であれば、参院で否決してくれれば良い。その後、衆院で再可決すれば、法案は成立する。ところが、そんなことは百も承知の民主党は、参議院で〝審議をしない〟という、極めて姑息な手法で朝生政権の経済対策を妨害してきたのだ。無論、参院で60日間審議が行われなければ衆院の再可決により法案は成立するが、参議院で審議拒否がなされている期間、まったく予算を執行できないという事態になる。結果、景気への対処は遅れてしまう。

しかも、「反・財部」「反・朝生」で意気投合している、国民テレビの氏本、読解新聞の渡会両会長が、朝生政権を短命に終わらせるべく暗躍していた。

「八俣。先ほど、主計局長の丹下君が訪ねてきて、散々にぼやいていたのだが……リーマン・ショックにかこつけ、朝生が大々的な景気対策を行おうとしているらしい。財務省に貸しを作るためにも、朝生政権には今年中に終わってもらう必要がある、というのは分かるな？　何か、君から提案はないかね」

氏本の無茶な要求に、内心、八俣は閉口した。が、そんなことはおくびにも出さず、やがて殊勝な表情で答える。

「朝生本人は金銭的にクリーンで、なぜか、国民の人気も高いんですもの。とりあえず、財部政権同様に、本人だけではなく、閣僚を責めるのは常道として……そうですね、今回

は『人格攻撃』と『非・平凡化』を併用することでいかがでしょう」
「非・平凡化とは、何だ」
上司、氏本の〝同志〟である渡会の問いに、八俣は恭しく返答する。
「要は朝生が金持ちで、高慢で、一般人とはかけ離れた感覚を持つ存在である、つまりは〝非一般人である〟というイメージを繰り返し報道させ、人気を落としていくのです。権力者が大衆と同じ境遇にあることを示して、民衆から安心や共感を引き出す、これを『平凡化』と呼びます。その逆に、権力者が『大衆的ではない』『一般人ではない』ことを強調し、民衆に疎外感を感じさせる手法、これが『非・平凡化』です。上手く使えば、内閣支持率を大幅に引き下げられる可能性があります」
「なるほど……」
珍しく感心したような渡会を尻目に、氏本がすかさず口を開いた。
「財務省は、朝生政権の補正予算に心底から腹を立てている。記者クラブの財政研究会を通じ、奴らもマスコミ誘導に協力するだろう。上手くやってくれ」
「かしこまりました、会長」
八俣は妖艶な笑みを浮かべ、丁寧なお辞儀をして見せた。

前途多難の船出

朝生政権は、組閣の5日後に山中正治(やまなかまさはる)国土交通大臣が失言問題で辞任するという、前途多難な船出となった。しかも山中国交大臣の発言とは、成田空港拡張問題について、「戦後教育が悪かったのだと思うが、公のためにはある程度自分を犠牲にしても構わないという発想がなく、自分さえよければという風潮の中で、なかなか空港拡張もできなかったのは大変残念だった。中国がうらやましい」

と述べたもので、一見、何が問題視されるのか分からない程度であった。ところが、上記の発言について千葉県知事が「一方的に地元住民に非がある」と批判の声を上げ、マスコミも「失言だ」と煽(あお)ったのである。ある種の難癖と言えなくもない。

朝生政権期、マスコミによる言葉狩りは、まさしく日本の憲政史上におけるピークを迎

えつつあった。政権にかかわる政治家は、発言時の単語一つひとつに細心の注意を払わなければ、即座に失言として批判される。さらに酷いことにマスコミは、政治家の発言について全文を報じようとはせず、一部分を切り取ることで〝失言を製造する〟行為も平然と繰り返した。

言葉とは、前後の文脈とともに聞く、あるいは読まなければ、発言者の正しい意図を理解することができない。たとえ全体では問題がない文章であっても、一部を切り取ることで「失言」に仕立て上げることができるのだ。特に、政治家の発言を報じる役目を持つマスコミが、意図的に文章を切り貼りし「失言」を製造しようとしたとき、それを政治家が防ぐことは不可能だ。

失言製造の最大のターゲットとなったのは、もちろん、時の内閣総理大臣・朝生一郎である。2008年12月6日、朝生総理は長崎県の諫早湾（いさはや）において、景気対策の一環として実施が検討されていた定額給付金について語る。

「あの時は定額減税と聞いたら、それは減税をされるということは、しかし、税金を払っている人が安くなる。しかし、税金を払ってないぐらい貧しい人もあるんだから、そういったところを考えたら、これは全所帯に行くべきなんじゃないのと私が言ったら、金持ち

優遇ときた。あのねえ、人の言葉じりつかまえて言うけど、じゃあ、こちらの貧しい人々にやるのはどうするかって言えば、全額、全所帯に渡します。全額、税金はわずか。しかし、私はそんな金をもらいたくないという人はもらわなきゃいい。また、1億円あっても、さもしく1万2000円欲しいっていう人もいるかもしれない。そりゃ、その人の哲学、矜持(きょうじ)、考え方の問題なんだから、それをいちいち、調べて細かくやっていったら、それだけの手間でも大変ですよ。だからご自由にされて、あとは自分でしてください。市から振り込んできたら、寄付するもよし、どこに寄付するもよし。自由にされたらいかがです。というのが私の出した案です」

この朝生の発言について、読解新聞が付けた見出しには、明らかな悪意が込められていた。

『『さもしく1万2000円欲しい人も……』2兆円定額給付金で朝生首相発言」(読解新聞)

定額給付金は、全ての世帯当たり1万2000円を給付するという、所得移転の景気対策だ。もともと、朝生は景気対策として減税を考えていたのだが、減税の場合、税金を支

払っていない低所得者層には恩恵がない。そこで朝生は、全世帯に同額の給付を行う「定額給付金」を検討したのである。

ところが、今度は野党やマスコミが、

「金持ちにも、1万2000円を配るのか！」

と大騒ぎを始める。資産家である朝生本人についても、

「あれほどまでの金持ちにもかかわらず、朝生は定額給付金をもらうと言った」

「いや、実はもらわないと言った」

「もらう、と言ったり、もらわない、と言ったり。朝生は、ブレている」

と、朝生政権に対する批判キャンペーンに利用し始める始末である。

本質から外れた枝葉末節にこだわり、ひたすら朝生批判に結び付けようとする野党やマスコミにうんざりし、朝生は長崎県の諫早湾で件（くだん）の演説をしたのだ。それを、前後の文脈を無視し、読解新聞が「朝生総理が『さもしい』と発言」と報じ、失言問題に仕立て上げようとした。まさしく、プロパガンダ以外の何物でもない。

この時期、各種の「失言製造」に加え、朝生個人に対するネガティブ・キャンペーンも異様なまでに盛り上がりを見せていた。

「漢字を読み間違えた」

「カップラーメンの値段を知らない」
「ホテルのバーで酒を飲んだ」
「ホッケの煮付け、と言った」

などなど、明らかに政策とは関係ない、首相に対する個人攻撃が延々と続いたのである。

特に、「漢字の読み間違え」の効果は大きかった。朝生が演説において未曾有を「みぞうゆう」と、踏襲を「ふしゅう」と読み間違えたことなどを受け、

「朝生は漢字も読めないバカだ」

と、マスコミが大キャンペーンを張ったのである。反・朝生キャンペーンの仕掛け人である、国民テレビの八俣は、自らのコネクションを総動員し、「漢字を読み間違える朝生」を散々に煽った。特に、この手の話題を好む週刊誌を活用し、「朝生さん、漢字読める？」などのタイトルで、自国の行政責任者を、個人的に貶める記事を書かせまくったのは効果的だった。国民の間に、いつの間にか「朝生は漢字を読めない、愚かな首相だ」という印象が、浸透していったのである。

さらに八俣は、民主党の副代表である石尾一参議院議員に耳打ちする。

「国会で、首相に漢字テストをしてみてはいかがですか？　必ずや、国民受けしますわよ」

結果、何と石尾は本当に、国会の場において朝生首相に漢字テストをするという、前代未聞の愚挙に及んだ。

石尾は、以前に朝生自身が寄稿した月刊誌の手記から、熟語・慣用句をピックアップし、それらを並べたボードを作成した。

「(1)就中(なかんずく) (2)唯々諾々(いいだくだく) (3)揶揄(やゆ) (4)畢竟(ひっきょう) (5)叱咤激励(しったげきれい) (6)中興(ちゅうこう)の祖(そ) (7)窶(やつ)し (8)朝令暮改(ちょうれいぼかい) (9)愚弄(ぐろう) (10)合従連衡(がっしょうれんこう) (11)乾坤一擲(けんこんいってき) (12)面目躍如(めんもくやくじょ)」

このボードをひっさげ、石尾はよりにもよって、国会の参議院予算委員会という重要な場において、

「相当高度な漢字だ。これを隠して、どれだけ読めるかやってみたかったが、先に渡してあるから今なら読めるだろう」

と、総理大臣である朝生を挑発した。石尾の愚か極まる行為に対し、朝生は落ち着いて各漢字を読み上げ、

「多分、皆さんが読みにくいのは『窶(やつ)し』ぐらいではないか。後の漢字は普通、皆さん読める」

と答えた。それに対し、石尾は顔を真っ赤にして怒り狂い、

「もしそうなら、なぜ未曾有を『みぞうゆう』、踏襲を『ふしゅう』と言うんだ。おかし

い。強弁だ！」
と、意味不明な叫び声を上げたのである。八俣にしても、ここまで民主党が愚かだとは考えていなかったため、内心大笑いだった。
もはや、国会が喜劇の上演会場と化したのも同然だったが、マスコミの記者や評論家たちはまったく気にも留めなかった。異常なことに、この時期は、マスコミに蔓延（まんえん）する〝空気〟全体が「朝生、叩くべし」となっていたのである。
記者や評論家たちは、自分自身を取り巻く〝空気〟に従い、ひたすら現在の内閣総理大臣である朝生を批判することを続けた。〝空気〟の中で朝生批判を展開し、自らの主張が〝空気〟をますます濃くする。新聞記者たちは、自分たちがどれほど愚かで醜い真似をしているのか、気が付かないようだった。
マスコミは相変わらず朝生を些細（ささい）なことで貶め、
「総理を批判する『国民の声』が聞こえないんですか！」
と、叫び続けた。ほとほと呆れた朝生は、ある会見の場で、
「それは『国民の声』ではなく、『あんたの声』だろうが」
と返答し、記者たちの神経を逆なでした。
朝生とマスコミの関係は、政権が継続した期間を通し、ひたすら悪化する一方だった。

加速し続ける朝生バッシングは、雪乃の目には異常としか映らなかった。なぜなら、雪乃は朝生の演説をリアルタイムで体験したからだ。

あの日、雪乃は、朝生の巧みな話術、観衆の熱狂を目の当たりにした。汗が流れる炎天下にもかかわらず、人々は集まり、通りかかった者は足を止めた。朝生の、気取りのない、聴衆の目線に立った語り口は、大手マスコミが揃って叩くような、高慢な人種のものとは、とても思えなかった。

業務の合間を見計らい、雪乃は先輩記者の津和野に疑問をぶつけた。

「一連の朝生バッシングですけど。政策以外の分野でばかり批判をしているように見えます。なんか、変じゃないですか？　正直、くだらない内容が多いと思うんですけど……」

それに対する津和野の返答は、おかしなものだった。

「ヘンかどうかは関係ないわ、問題は世論なの！　国民がこういう報道を望んでいるのよ。あたしたちの仕事は、ニーズに応えるのが重要なんだから」

雪乃は、微妙な表情になってしまった。知的な津和野の口から出たとも思えない、本末転倒な答えである。

本当に国民が、「政策」よりも「漢字の読み間違い」の報道を望んでいる、と津和野は

信じているのか？　……いや、津和野一人の問題ではないだろう。もしや、この低レベルな報道を望んでいるのは、国民ではなく、マスコミの方ではないのか？

雪乃の抱く疑問は、日に日に重みを増していった。

アランとの邂逅

09年、新春。「金持ち朝生は、居酒屋ではなくホテルのバーで酒を飲んでいる、けしからん」と、マスコミが批判を始めた頃、雪乃は津和野とともに首相官邸に取材に赴いた。首相官邸で初めて朝生と同席した雪乃は、去年の自分を思い出し、鳥肌が立った。あの頃はただ何となくマスコミ就職を、と考えていた自分が、今や官邸で取材しているのだ。翔とは違って着実に、前に進んでいる気がする。

翔は今頃どうしているのだろう？　あのメールの主も翔でないと分かった以上、雪乃はますます彼の将来が案じられた。また、大事な会見取材の場でありながら、雪乃は謎のメールの主〝アラン様〟の正体についても考えた。大学教授なのか、単に有識者なのか判断はつかないが、このような取材に赴いていることを知ったなら、彼は雪乃を褒めてくれる

だろうか？
津和野の順がまわってきたが、雪乃は浮き足立っていて、きちんと受け答えを聞いていなかった。だが、気の強い津和野が、自分の質問の最後に、
「総理は怖い、というのが、国民の評判ですから」
と付け加えたのに気付き、雪乃は我に返った。すると朝生は、
「怖い、俺が？　ないない。というより、怖がっているのは国民ではなく、あんたたちマスコミだろ？」
と、余裕の答えを返したのだ。津和野がグッと詰まり、珍しく狼狽しているのが、真横に座る雪乃には分かった。
会見終了後、どすどすと殊更に大きく足音を響かせる津和野とともに、雪乃は出口へ向かった。興奮冷めやらぬ雪乃は、アラン様に急いでメールしようと思いついた。教育係である津和野に咎められぬよう、バッグの中に手を突っ込んで素早くメールを打つ。手打ちの最速記録だ。

〈今、朝生さんに取材したとこ。なにげにスゴクナイ？　m(^O^)v〉

雪乃は送信ボタンを押した。するとその直後、雪乃の目の前から、電子音らしき君が代が聞こえてきたのだ。音の発信源に目をやると、なんとそこには、官邸入り口の車寄せで、公用車に乗り込もうとする朝生の姿。

朝生は手にした二つ折り携帯を開き、

「今、朝生さんに取材したとこ、なにげに、すごくない、Vサイン」

と、呟いた。

雪乃は目を見張った。頭の中を、自分の送ったメールの文章がぐるぐると廻り、雪乃の口からは思わず、大きな声が出た。

「ア、アラン様？？？」

声に反応し、朝生が雪乃の方を振り向いた。

……かたや一国の総理大臣、かたやインターンの女子大生。まったく共通項のない二人が、驚いた目で互いを見つめる。

雪乃は口をぽかんと開き、60代後半とはとても思えない、若々しい総理の姿を凝視した。童顔がうまく年を取ったお手本のような顔、キレイに撫でつけられた髪。ライト・グレーのスーツ、淡水色のクレリック・シャツに漆黒（しっこく）のタイ。そして、すっと伸びた、長い脚……。

朝生はしかし、すぐに踵（きびす）を返し車に乗り込んだ。朝生が去るまでの時間は、たった数秒、否、もしかしたら1秒にも満たなかったかも知れない。しかし雪乃には、随分と長い時間に感じられた。

その夜、関東圏は今年初めての雪に見舞われた。雪乃の住む藤沢のマンションでも、ベランダの窓から細かな雪がちらつくのが見えた。

微かですぐに溶けてしまいそうな、雪の結晶の降る中を、携帯の電波は飛ぶ。行き交い、都心と湘南とを瞬時に繋いだ。

〈アラン様。今日、お会いしましたか?〉

《ボーイッシュで素敵な女性となら、確かに目が合ったようだ》

〈素敵じゃないけど、それ、多分わたしです。アラン様、わたしの名前は知りませんよね? もし宜しければ、スノーと呼んでいただけますか?〉

待てども、待てども、アランからの返信はなかった。雪乃は頭から毛布を被り、ベランダに降り積もる雪を眺め、一夜を過ごした。

その後もアランからの返信は一向になく、雪乃は気もそぞろだった。先日のメールから、すでに2週間ほど経過していたが、音沙汰がない。なぜこんなに、アラン、というか朝生からの返信が待ち遠しいのか？　著名人とメル友だったという嬉しさなのか、バッシングされている朝生を応援したいのか、それとも、単純に、朝生に対する憧れ……？

感情を持て余し、雪乃はとうとう、朝生の下を訪ねることを決意した。

〈アラン様、一度でいいです、直接会ってお話ししてみたいのです。アラン様の行きつけのバーに行きます。スノーが伺います。宜しければ、ご返信ください〉

……今度は、返信があった。

《スノー様、三日後の午後七時、お待ちしております　アラン》

赤坂にある高層ホテル。ロビーの天井からは巨大なシャンデリアが吊(つる)され、中央には絢(けん)

爛豪華なフラワー・アレンジメントが鎮座している。高級感溢れる空間に足を踏み入れ、雪乃は一気に臆してしまった。このホテルの最上階のバーに、朝生はいる。
雪乃は何を着ればよいのか悩み、軽くパニックになり、結局普段と変わらない服装になってしまった。オフホワイトのざっくりしたセーターに黒のショートパンツ、グレーのピー・コート。唯一の自慢は、買ったばかりの乗馬ブーツだ。それにしても場違いな気がして、着いてから後悔した。胸がどきどきするのを必死で抑える。
バー入り口に立つと、店内の様子が垣間見えた。薄暗い照明の下、各テーブルには小さなキャンドルが灯されている。雪乃がその場できょろきょろしていると、ウエーターがすっと寄ってきた。
「お一人でいらっしゃいますか？」
「え、あ、待ち合わせを……」
そこまで雪乃が言ったところで、見覚えのある顔が、目に飛び込んできた。街を一望する窓の前のソファに、ゆったりと座っている——朝生一郎、その人である。雪乃の緊張は頂点に達した。が、勇気を奮い起こし、声を出す。
「あ、あの窓際の男性に、『アラン様、スノーです』と伝えてください」
ウエーターは怪訝な顔をしたが、すぐに営業スマイルに戻り、朝生の近くの男性に近づ

き耳打ちをする。
数秒の後、朝生が振り向いた。夜景をバックに葉巻をくゆらせている男性の姿に、雪乃は不覚にも見惚(みほ)れ、挨拶すら忘れて立ちつくしてしまう。そんな雪乃に向かって、朝生は手を軽く挙げた。

どのように足を運び、どのように席に着いたのか思い出せないのだが、雪乃は気付くと朝生の向かいのソファに座っていた。先日と同じように、目の前の朝生は、今日も非常にスタイリッシュだ。
まず朝生と雪乃は、なぜメールのやりとりが始まってしまったのか、その原因について話をした。お互いのメアドを見せ合い、二人は笑った。
翔のメアドは、EmileAugusteChartier1986@～。末尾の数字が翔の生年、1986。朝生の方の末尾は1976だ。
「私もアランを好きで、ときおり読んでいてね。それで君の彼氏のメアドと重なってしまった、ということか」
雪乃は合点がいった。あのとき、アランの本名のスペルを間違えないようにと意識し過ぎたあまり、数字のほうは注意せず惰性で打ってしまったのだ。

「そうみたいです。でも、１９７６って、何ですか？　何の意味があるんですか」
「１９７６というのは、私がオリンピックの代表になった年だよ」
おりんぴっく？　意外過ぎる返答に、雪乃はきょとんとした。
「ああ、君の生まれる前だからね、知らないだろう……。１９７６年、モントリオールオリンピックに、クレー射撃の日本代表選手として出場したんだ。このときの結果は41位に終わったが、いい経験だった」
朝生はあくまでサラッと話したが、雪乃は驚き、目の前の朝生の体格を見直してしまった。自分の祖父でもおかしくない年代ながらスタイルもよく精力的だと思っていたが、まさか、オリンピックにまで出ていたとは！　今日のブラック・スーツも、この体型だからこそ似合っている……。
「あの、ホントに、失礼いたしました。こんな立場のある方に、あんなメールを送り続けてしまって。恥ずかしいです」
「私も知人の娘だと信じて疑わなかったからね。いや、凄い偶然だ。神様のお計らいかも分からない」
朝生は朝生で、かわいがっている友人の娘からのメールだと、勘違いしていたそうだ。
雪乃のメアドは、sakura.yuki2005@～だ。大学入学時に設定したメアドである。そのと

き窓外の桜が目に入ったのと、好きな曲のタイトルに桜が入っていたので、なんとなく決めたのだった。
「その子の名に、さくら、と付くんだよ。てっきり彼女だと思い込んでいた」
雪乃が初めてメールをした日、朝生はその〝さくらナントカ〟という女性に、携帯メアドを聞かれたばかりだったと言う。朝生はしかし、数回メールのやりとりをした時点で、どうやらこれは別人だと気付いていた。だが、真面目に質問し、答えを聞き、それを受け、毎回きちんと勉強をしてくる様子に感心し、むげに中断することが難しくなってしまった。そこで、教える立場と割り切ったのだ。
メアドの件が一段落したところで、二人は黙った。朝生は新しい葉巻に火を点け、眼下の街灯りを眺めている。不思議なことだが、その沈黙の時間は、決して居心地の悪いものではなかった。雪乃も一気にくつろいだ気分になり、手の中の温かいゴディバ・ミルクをひとくち味わってから、口を開いた。
「ずっと、お伝えしたかったんですけど……。総理へのバッシング、とてもくだらないと思うんです」
雪乃は、朝生に会えたなら言いたかったことが山ほどあったのだ。
「例えば、資産家だからダメだとか、政治家の家系だからダメだとか。じゃあ貧乏な生ま

れの人なら総理に相応しいの？　って感じだし。あと、カップラーメンの値段を知らない、とか……。わたしもカップラーメンの値段は分かんないです。だって、親元にいたときは母から禁止されてたし、一人暮らしの今は太るのがイヤだから、できるだけジャンク・フードは食べないようにしてるもの。お金持ちか貧乏か、てゆう問題じゃないですよ、嗜好とか意識の問題だと思う」

朝生は、黙って聞いている。

「あと、漢字が読めないってレッテル貼りとか、ホントあり得ないです。だって人間て、普段の会話の中でたくさん言い間違いしてるでしょう？　一般人でもそうなんだから、人前でしゃべる機会のめちゃくちゃ多い政治家は、言い間違いや読み間違いなんて、いくらでもあると思う。それ以前に、マスコミ側が聞き間違えてる可能性だってあるじゃないですか」

雪乃が次々と並べ立てたのを受け、朝生は愉快そうに笑う。

「君の冷静さを、マス・メディアの諸兄に分けて差し上げたいね」

「わたしは別に冷静ってワケじゃないけど……。とにかく、総理、あんな低レベルなバッシング、無視してください。この前だって、総理がまた漢字を読み間違えた！　ってマスコミが報道してたヤツ、調べてみたら結局、総理の言った読み方も辞書に載ってて正しい

ものだった、ていうオチがついたでしょ。でも、どこのマスコミも謝罪しなかったし、訂正報道もしなかった。ホント、無責任」

これについては朝生からのコメントも特になく、彼は静かに微笑んでいるだけだ。ただ、雪乃にもひっかかっていた部分はあり、思い切って朝生に尋ねた。

「総理、なぜ、こういったホテルのバーで飲むんですか？　高級すぎて庶民の気持ちが分からないと、盛んに批判されていますよね」

「うん？」

雪乃の質問に、朝生は不思議そうな顔をした。

「まあ、警備の関係上、ホテルでなければ安全が確保できない、というのが一番大きいね。内閣総理大臣がその辺の居酒屋で飲んだりしたら、それは世間的には親近感を抱かれるだろうが、警備上の問題がどうしても避けられない。店側にも協力してもらわなきゃならず、はっきり言って、こじんまり商売している店にとっては迷惑だろう」

「そういうことだったんだ……」

「大体、ホテルのバーで酒を飲むのが高級というのも変だ。それこそ、居酒屋でバカ騒ぎするのと、ホテルのバーで軽く飲むのでは、間違いなく前者の方が金がかかるだろう？」

雪乃はここまで聞いて、もはやマスコミによる朝生バッシングには、微塵も根拠が見つ

けられないことを確信した。
「もしかしてマスコミは、総理を批判できれば、何でもいいんでしょうか」
「そうかも知れん、が、それは君が自分で見定めなければいけないよ」
雪乃は小さく、あ、と声を出した。すでにマスコミの一員でありながら、その自覚がないことを朝生から気付かされ、雪乃は恥ずかしくなった。
さらに、自覚、という言葉が浮かんだことで、雪乃は重大なことに気付いた。自分は新聞社に内定し、インターンとして働く身だ。そして、相手は一国の首相……。立場を知ったうえで始まった交友ならいざ知らず、勘違いで続けていたメル友など、不謹慎極まりないのでは……？
〝メールの彼〟が朝生総理だと判明した以上、もう二度とメールなどしてはいけない、と雪乃は思った。だからこそ、今日の逢瀬(おうせ)は貴重だ……。こんな機会は、これが最初で最後なのだ。
朝生は軽くグラスを傾け、氷が滑らかに動く様を見つめた。すっかり自分一人の考えに沈んでいるらしい雪乃の耳に届くように、朝生の声音は低く穏やかに響いた。
「私の考えをもう一つ言っておこうか。今の日本はデフレだろう？　デフレとは、簡単に言えば、皆が金を使わないという問題だ。国民が将来の不安から財布のひもが堅くなって

いるときに、総理大臣まで節約生活をしたのでは、国民は『やはり日本の将来はダメなのだ』と思ってしまう。だからこそ私は自腹を切って、できるだけ外で金を使うようにしている、という訳だ。まあ、一国の首相ともなった以上、昔のように歌舞伎町で飲むというわけにはいかないがね」

歌舞伎町、という言葉に、雪乃は一昨年、福本義男と総裁の座を争ったときの朝生の演説を思い出した。全てはあそこから始まった。考えてみれば不思議だ、と雪乃はあらためて思った。とても不可思議な、運命の糸の絡まりが見えるようだ……。

その後も、雪乃は朝生と様々な話をした。政治とは何か、国家とは何かについて語るとき、朝生の目は鋭くなった。しかし、財務大臣の中井について話すとき、朝生は随分と愉快そうに見える。

「総理、中井大臣と、凄く仲良しなんですね」

能天気な雪乃の言葉に、朝生は苦笑する。

「いや、まあね……。彼は実に優秀な男なんだよ。ただ、真面目過ぎて、ヘタな部分もある。マスコミから足をすくわれなければいいが」

「うーん、中井さん、かっこいいし、オシャレ過ぎるんじゃないですか？　政治家って、7・3分けの、ダサ眼鏡の、地味スーツしか許されない、みたいな空気ありますよね」

「ダサい、ダサくない、は、本来の政治家の資質と何の関連性もないね」
朝生は再度笑ったが、すぐにその目に真剣な光を宿した。
「だからね、雪乃君。君の役目は重要なんだよ。君のように、リテラシーを持ち、自分の頭で考える若者がマスコミに就職する。それがどれほど、大きな意味を持つことか」
「はい。肝に銘じて、頑張るつもりです」
朝生は優しげな笑みを浮かべ、雪乃を見る。
「その志を忘れず、進んでいってください」
雪乃は頬を紅潮させ、頷(うなず)いた。

逆らえぬ空気のなかで

試験のため、久方ぶりにキャンパスに行った雪乃は、前方から歩いてくる若菜の姿を見つけた。襟元にファーが付いたベージュのショート・コートに、黒のパンツを合わせている。どうやら、手にしたノートを熱心に読んでいるようだ。

「若菜！」

声をかけると、黒髪をさらりとなびかせ、若菜は顔を上げる。

「久しぶり、カフェ、行かない？」

「いいわよ。ちょうど、喉（のど）が渇いてたとこ」

雪乃は、朝生と直接話したことで、自分なりにマスコミ報道に対して感じたことを、誰かに話したいと考えていた。報道の在り方について、多くの人の考えを正さねばならない

と、切実に感じたからだ。

キャンパス内のカフェに入ると、外気との温度差に、一気に頬の緊張が緩む。雪乃は首に巻いていた、モノトーンの千鳥格子のマフラーを外し、ホット・チョコレートを頼んだ。

試験について通り一遍の雑談をした後、雪乃は早速、朝生バッシングについて話を振ってみた。

「朝生総理が連日バッシングされてるじゃない？　しかも、内容が単に個人攻撃みたいな感じ。あれ、どう思う？」

「ああ……そうね、政治家なんだから、政策で戦うべきだわ。それなのに、ああいった騒動でしか話題にならないのは、不幸よね」

あっけないほどすぐに返ってきたまともな反応に、雪乃はホッとした。よかった、自分だけではないのだ。頭脳明晰な若菜からの返答であるが故、雪乃は心から安堵した。

雪乃は、懸案の問題を軽やかに蹴散らしてくれた若菜の存在に、あらためて嬉しさが湧いてきた。この勢いで、これまであやと若菜とギクシャクし、心中でもやもやしていたことを話してみようと思う。

「最近、わたし、若菜たちとあまり遊ばなかったでしょ。去年の年末に、二人がコネで最初から内定してる、って聞いて、なんかショックだったんだよね。わたしはさ、コネなし

でずっと就活してたし」
若菜は、申し訳なさそうな表情になって、雪乃に答えた。
「それは悪かったと思ってるわ。もっと早く言っておけばよかったと思うし。ごめんね」
素直に応じてくれた若菜に、雪乃はさらに安堵した。言ってみるものだ。
「わたしも気付いてないのは世間知らずだったし、もう、それはいいよ。でも、あやはもう少し、他人に気を使ったほうがいいと思うわー」
若菜は少し顔をしかめた。雪乃は続ける。
「正直、ワガママだし、みんなが姫扱いするでしょ。なんか、それが定着しているのって変じゃない？」
ここまで黙って聞いていた若菜だったが、一呼吸置くと、おもむろに口を開いた。
「雪乃もちょっとは大人にならないとね」
「え」
急に声音が変わった友人に、雪乃は驚きを隠せない。
「あやは親がＴＮＳの役員よ？　みんな、一応仲よくしておくに決まっているじゃないの。マスコミ志望であればなおさら、どこでかかわるか分からないんだから……。テレビ局は新聞、ラジオとも関係性が高い。当然、就職を真剣に探している子ほど、あやには優しく

なるわよ」
「……それでみんな、あやをお姫様扱いしてる、って言うの？」
「姫だったかどうか、知らないけれど。少なくとも、日本人なら、場の空気に合わせるのは当たり前じゃない？　私は必ずそうするわ。だって、それが常識だから」
空気。雪乃はショックを受ける。
空気に逆らわない、日本人。
黙ってしまった雪乃を前に、若菜は荷物を肩にかけ、立ち上がった。そして、事務的な口調で言う。
「こういう話、もうこれ限りにしてもらえる？　はっきり言って、迷惑だわ」
若菜のリップグロスで濡れた唇が、ゆっくり動く。
「それから、さっきの朝生総理のハナシだけど。やっぱり朝生氏のツメが甘いんだと私は思うわよ。マスコミとうまくやることも政治家の資質の一つだわ……。つまり、能力不足、ってことよ」
雪乃に冷たい視線を投げたあと、若菜は突如、普段の柔和な笑顔に戻った。
「じゃあ、またね、雪乃。次は飲み会でね！」
美しいロングの黒髪が、目の前で揺れた。歩み去る長身の後ろ姿は、すぐに学生たちの

波にのまれて見えなくなる。
雪乃はと言えば……ショックで、愕然としていた。
空気。なぜか、その空気の中で、人は役割を決められている。周囲から期待される〝役柄〟を演じていれば及第、演じずに自分を出して周囲を裏切ったら落第。おかしなことだ。レッテルやイメージに逆らわず、他人との関係性を意識しなければいけないという、奇妙な現実に雪乃は気付かされたのだ。
外にはいつからか、雨が降り出していた。冬の霧雨は、殊更に心身を凍えさせる。雪乃は苦しかった。今自分がどういう感情を持っているのか、自分でもよく分からないくらいだ。
行くところが思いつかず、雪乃は小田急線に乗った。足が自然と翔のマンションに向かい、気付くとエントランスの大きなドアの前だった。懐かしいな、昔は入り浸ってたのに……。雪乃はなんだか、泣きたくなってしまった。
雨宿りした後すぐに帰ろうとすると、何と、どこかから帰宅したらしい翔と鉢合わせした。久方ぶりに会う翔の顔は、ものすごく日に焼けている。
明らかに落ち込んでいる様子の雪乃に、翔は驚いた顔を隠さなかった。
「久しぶり。上がってくか？」

翔の声掛けに、雪乃は涙がこぼれそうになり、あわてて上を向いてごまかした。

部屋に上がると、翔は、雪乃にホット・ラム・ティーを作ってくれた。それをゆっくりすすりながら、雪乃はソファに座ってクッションを抱きしめ、興産新聞に内定したこと、マスコミの報道が歪んでいること、それを受け取る民衆が情報弱者にしか思えないことを話していった。

仲良しだったはずの、あやと若菜との距離感についても、雪乃の話は及んだ。

「あやも若菜も、親がマスコミ関係者っていう恵まれた環境で、もともとアッパーだから、わたしの気持ちなんか分かんないんだよ」

「え……」

「なんだよ。それって、お前の嫌いなマスコミと情報弱者の言い分と同じじゃね」

雪乃が愚痴ると、珍しいことに、翔がはっきりと返した。

「朝生、だっけ、おまえが好きな政治家。マスコミが『朝生総理は名家の子息だから、われわれ庶民の気持ちが分からない』って批判して、民衆が誘導されてたの、おまえ、さっき怒ってたじゃん。でも、おまえが今言ってる文句って、同じ理論なのな。友達の性格とかを理由に批判するんじゃなくて、生まれ育ちを理由に批判してる」

「……」

「自分のことになると、人間って、分からなくなるんだよな。冷静な判断ができなくなるんだ」

雪乃は恥ずかしさに、真っ赤になった。同時に、翔のあまりにまっとうな言葉に、心底びっくりした。「翔はテキトー男だ」など、雪乃の認識不足に過ぎなかったのだ。

翔は、自分の意思や意見をしっかり持っているからこそ、こんな自由奔放な生き方ができるのだ、と雪乃は気付いた。他人と違う道を選ぶのは、恐ろしいことだ。それでも敢えて、茨の道を歩めるのは、何らかの目的や強い志向があるからなのだ。

しばらくマグカップの中のラム・ティーを見つめたあと、雪乃はぽつりと聞いた。

「翔は、これからどうするの?」

「どうって?」

「大学はいつ卒業するのか、就職はどうするのか、とか……」

雪乃の質問に、翔は少しの間考えていたが、やがて口を開いた。

「俺、実家が会社やってるじゃん? 兄貴いるけど、ヤツは10歳年上で、アメリカ行ってるの知ってるよな。兄貴ってすげえ秀才で、東大出た後、マッキンゼー入って、世界中を飛び回ってる。だから、親父の会社を継ぐ気なんかサラサラないわけ。俺があの田舎会社を継ぐって決まってんだよ」

ここで翔は大きくのびをした。

「もう、俺が高校生の頃から、決まってたんだ。どうしたって道が決まってるなら、それまで俺は好きなこと全部やってやる。って、それでこんな生活になっちゃったんだよなあ」

雪乃は驚いて、翔を見つめた。

翔は……、翔は、誰よりも自由奔放に見えて、実はまったく不自由だったのだ。わたしは、本当に人を見る目がなかった……。

「なにげに、話すの初めてだよな」

「そういえば、そうだね。わたし、翔のこと、何にも知らなかった」

「昔のお前って、いつも一歩ひいてるって感じだったし。本音を言い合うのを拒絶してるっていうかさ。……雪乃、変わったよなー、なんか、いい方向に変わった気がする」

以前は見慣れていた翔の笑顔に接し、雪乃の気持ちはいくらか軽くなった。そして今日、翔と初めて友人になれたことに、雪乃は気付いた。

張り巡らされた謀略

朝生内閣の戦いは続いている。

リーマン・ショックの余波は収まる気配を見せず、アメリカは遂に国内の政府系金融機関が持つ不良債権を、ＦＲＢ（アメリカの中央銀行）が買い取るという荒業に出た。ＦＲＢが不良債権を買い取った分、新たな通貨ドルが市中に供給される。しかしアメリカのインフレ率は、上昇しようとしなかった。このままでは、アメリカ経済が日本同様にデフレに突入することは、避けられない状況であった。

また、リーマン・ショック以降のアメリカの失業率は驚異的なペースで上昇していき、09年10月には10％の大台を超えた。リーマン・ショック前のアメリカ失業率は４％台だったため、失業者が１年強で倍増したこととなる（巻末資料２９２頁【図２―５】参照）。

アメリカは、基軸通貨国である。当然の如く金融危機は、世界に拡散していく。特に、アメリカのサブプライムローン関連証券化商品に巨額の投資をしていたアイスランドは、リーマン・ショックのわずか1カ月後に、早くもデフォルト状態に陥り、IMFに緊急支援を要請した。

世界に先駆け、バブル崩壊とデフレを経験していた日本には、不良債権問題に関するノウハウが蓄積されていた。朝生首相は、08年10月にワシントンで開かれたG7に中井財務相を送り込む。中井財務相は、G7の会議において、

「日本は世界的な金融危機に対応するため、自国の外貨準備を活用し、資金面で支援する考えがある」

と、表明した。また、中井は、

「日本は1990年代の不良債権問題の解決に際し、銀行に公的資金を注入することで銀行危機を鎮静化させることができた。金融危機に際しては的確な措置、すなわち公的資金注入を躊躇なく講ずることで、負の連鎖を断ち切ることができる」

と演説し、諸外国に対し早期の公的資金注入を助言した。さらに、

「アジア通貨危機（97年）におけるIMFの構造調整計画を強制する対応は、マイナス面の方が多かった」

と、以前から問題視されていたＩＭＦの破綻国に対する緊縮財政の強要（構造調整計画）を批判し、そのうえで、

「当面の危機は、ＩＭＦが主導的な役割を果たさなければならない。ＩＭＦに資金が足りないのであれば、日本が外貨準備を活用し、混乱の安定化を図る」

と、日本のイニシアチブを強調したのである。

具体的な政策として、朝生政権は外貨準備を活用し、１０００億ドルのＩＭＦに対する融資枠を提供することを決定した。政府の決定に対し、朝生の三代後の総理大臣となる民主党の野多義彦（のたよしひこ）衆議院議員は、自身のホームページに掲載したコラムにおいて、

「米国次期大統領はバラク・オバマさん。日本の首相はバラマキ・オバカさん」

と酷評した。民主党議員に限らず、「外貨準備からＩＭＦに貸出枠を提供」の意味すら理解できないマスコミも、一斉に朝生政権に対するバッシングを開始する。単なる融資枠の提供、しかも、ほとんど無用の長物と化している外貨準備からの提供であるにもかかわらず、マスコミのほとんどが、

「国内が『国の借金』で大変な状況であるにもかかわらず、朝生内閣はＩＭＦに１０００億ドルも貢ぐことを決定した。許しがたい」

という論調の批判を展開したのである。朝生政権のＩＭＦ支援は、資金の「提供」でも

なければ「融資」ですらなく、「融資枠の提供」（いざというとき、貸し付けるという約束）だったにもかかわらず、正しく報道したマスコミは一社もなかった。

G7が開催されたのと同じ月、朝生政権は、第一次補正予算を成立させた。この補正予算では、主に雇用対策や中小企業の資金繰り対策に重点が置かれた。リーマン・ショックの国内への影響は小さかったとはいえ、銀行がまたもや貸し渋りや貸し剥がしの傾向を見せ始めていたのである。年末の決算を控え、中小企業が資金繰りに窮し、雇用が失われる事態は何としても避ける必要があった。

さらに朝生内閣は、民主党による参院での審議拒否に悩まされながらも、09年初旬に第二次補正予算を成立させる。今回の景気対策は、定額給付金、高速道路料金の大幅引き下げなど、国民の消費拡大に重点が置かれた。

この頃、中井財務大臣は財務省の官僚たちと衝突するケースが増えてきていた。朝生政権の景気対策やIMF支援は、緊縮財政至上主義に染まりきった財務官僚にとって、許される話ではなかった。

朝生内閣は、第一次、第二次に加え、09年通常予算や第三次補正により、更なる支出拡大を目指していた。次なる景気対策は、「公共事業拡大」が中心になると予想されていた。

橋元政権以降、98年の大規模景気対策を実施した霧島恵之進（きりしまけいのしん）内閣という唯一の例外を除き、

毎年の公共事業総額を減らすことに成功した財務官僚たちにとって、朝生政権の公共事業拡大は許容の範囲を超えていた。

特に、頭脳明晰で、マクロ経済に関する造詣が深い中井財務大臣は、財務官僚たちにとって、言ってみれば目の上のタンコブの存在であった。理論をもって財務省を動かそうとする中井財務相には、他の議員たちとは異なり、財務省のイデオロギーは通じなかった。結果、中井財務相は財務省にとって、いつしか〝排除の対象〟と見なされるようになった。

そして09年の年が明け、運命の2月14日が訪れる。

この日、中井財務大臣は、再び開催されたG7へ出席するため、イタリアのローマを訪れていた。中井大臣は、世界中のメディアが集うローマの地において、IMFの専務理事であるドミニク・スタースカーン氏と共に、日本国の「1000億ドルの融資枠」に関する契約書に署名した。

スタースカーン専務理事は、日本の1000億ドル融資枠提供について、

「人類の歴史上、最大の融資貢献だ」

と謝意を示した。それに対し、中井財務大臣は、

「我が国が提供する融資枠について、有効活用を期待したい」
と返したのである。
スタースカーン専務理事との署名式を終了した中井の元に、財務省の玉林太郎国際局長と、読解新聞の女性記者である江崎千夏、そしてもう一人、美しい女性が近づいてきた。
中井は少しの間、不謹慎ながら、この女性をとくとくと眺めてしまった。長めの黒髪をうなじの上でまとめ、パールのイヤリングとネックレスがやけに目立つ。明らかに高級ブランドのものと思われる、紺のツイードのスーツを着ている。あらためて記憶を辿ると、ローマ行の飛行機に乗り込んだ時点から、この女性は近くにいた気がする。すると彼女も、どこかの記者だと考えるのが自然だ。
財務大臣の外遊には、多数の官僚やジャーナリストが同行するため、全員の名前と顔を覚えるのは不可能に近い。が、小綺麗だがどことなく男性のように勝気な雰囲気の女性記者が多い中で、彼女は女性らしさが前面に出ており、珍しかった。そのため、中井の記憶の端に引っかかっていたのだ。
「大臣、おめでとうございます」
財務省国際局長の玉林が、中井に笑顔で祝意を述べた。財務省は今回のＩＭＦに対する

融資枠提供に反対していたはずなのだが、奇妙なこともあるものだ、と中井は怪訝に思った。もっとも、玉林は麻布高校時代の中井の同級生である。中井の財務大臣としての成功を祝してくれたとしても、別に不思議ではないだろう。

「本当に驚きました。まさか、スタースカーン専務理事が『人類の歴史上、最大の貢献だ』とまで評価してくださるなんて」

名の分からぬ女性記者が、艶やかな声で話しかけてくる。

「ああ、ありがとう。……失礼だが、あなたは?」

中井の問いかけに、女性記者は丁寧に答える。

「申し遅れました。わたくし、八俣と申します。国民テレビで記者をやっている、八俣ひろみ、です。宜しくお願いいたします、大臣」

八俣は人好きのする笑顔を向け、続けた。

「大臣。お忙しいところを恐縮なんですけれど……祝杯を挙げません? 大役を果たされた大臣を慰労したいという意味で、わたくしたちの方で席を設けましたの。1杯でもお付き合いいただければ、嬉しいのですが」

義理堅い性格の中井には、断る理由は見つからなかった。

慰労会には、中井財務大臣、財務省から財務官の篠塚直治と、玉林国際局長の2名が、マスコミからは読解新聞の江崎記者、国テレの八俣ひろみ、さらに中井の私設秘書である杉澤も参加していた。元来、中井は愛飲家だが、その日は後に記者会見を控えていることもあり、さすがにセーブせざるを得なかった。

慰労会は、まさに和気藹々という雰囲気で進んだ。中井は、常日頃は敵対しているも同然の篠塚財務官でさえ朗らかに席を囲んでいる様を見て、安心感を抱いた。朝生や中井はデフレ環境下の増税を拒否し、景気対策のための歳出を増やしている。それ故、緊縮財政至上主義の財務省とは、会議のたびに喧々囂々の議論を重ねていたのである。

滞りなく日程が過ぎ、安堵したことも手伝い、楽しい気分が募る中井であった。が、2杯目のワインを飲んだところで、なぜか気分が悪くなっていることに気付いた。普段の自分の体質から考えても、これだけの量で酔うことは考えられない。やはり、疲れが溜まっているのだろうか……。

目立たぬよう席を立った中井は、秘書の杉澤に耳打ちする。

「なぜだか分からんが、気分が悪いんだ。眠気と、少し吐き気がする。悪いが、この後の記者会見は無理だ……キャンセルで手配しておいてくれ」

この記者会見は、いわば署名式のおまけに過ぎない。大臣がキャンセルしたところで、

それほど問題になる類のものではないのだ。
「かしこまりました。篠塚財務官にそのように伝えます。いかがしますか、部屋で休まれるのは確定として、医師の診察は必要ですか?」
杉澤は、明らかに顔色の悪い中井を心配そうに見遣った。
「いや、医者は要らん。少し横になって、その後は荷物のパッキングでもしておくことにするよ。土産もたくさんあるから、詰めるのにおそらく一苦労だ」
「先生、お手伝いしましょうか?」
「大丈夫だよ。くれぐれも、玉林君たちに宜しく伝えてくれ」
「承知いたしました」
杉澤秘書は、未だ騒がしく杯を酌み交わしている慰労会の場に戻り、篠塚財務官に中井大臣の言葉を伝えた。

＊　＊　＊

記者会見の時間を迎えた。杉澤は、記者会見が開かれる予定のプレス・センターに足を進め、ギョッとした。

気分が悪いと告げ、ホテルの部屋に戻ったはずの中井が、なぜか中央に座っているではないか。その横には、篠塚が堂々と陣取り、中井に何かを盛んに囁きかけている。

一体、どういうことなのか。

杉澤は焦った。何しろ、中井は先ほどよりも格段に体調が悪いように見受けられ、もはや意識も定かではない様子だ。ところが財務官の篠塚が、場を仕切り、並み居る記者たちに質問を促している。

数人の記者が挙手し、玉林が指名した一人目の記者が質問の声を発した。中井は、座っているのさえ辛そうであり、ほとんど泥酔者のようだった。質問者に返答してはいるものの、はっきりと聞き取れない。

混乱する杉澤の目の前で、後に世に言うところの〝酩酊会見〟が、まさに遂行されていた。

杉澤に「部屋で休む」と言い残し、実際にホテルの自室に向かった中井財務大臣が、なぜ、記者会見場に姿を見せたのか。明らかに体調不良で、まともに受け答えもできそうにない状態にもかかわらず、篠塚財務官や玉林国際局長はなぜ、中井大臣の記者会見を強行したのか。

傍目には酔っぱらっているとしか見えない中井の記者会見の様子は、翌日、一斉に日本国内メディアで報じられた。報道番組もワイドショーも、ひたすら繰り返し、中井大臣の〝酩酊会見〟の映像を流し続けた。

さらに不可解な事態が続く。通信社の多事通信は、中井財務大臣とスタースカーンIMF専務理事が署名した「日本のIMFに対する1000億ドルの融資枠提供」について、自社のサイトで報じ、当初は専務理事の日本への称賛についても触れていた。

「IMF拠出で署名＝過去最大の1000億ドル――中井財務相

中井昭二財務・金融相と国際通貨基金（IMF）のスタースカーン専務理事は13日、日本政府がIMFに最大1000億ドル（約9兆円）を拠出する取り決めに正式に署名した。IMFの資金基盤を強化し、金融危機に陥（おちい）った加盟国への資金提供などの後ろ楯（だて）となる。日本政府は昨年11月の主要20カ国・地域（G20）金融サミット（首脳会合）で、朝生一郎首相が提案の目玉として掲げていた。

加盟国支援が必要になった場合、要請を受けた日本が約100兆円の外貨準備からIMFに貸し付ける形で拠出する。加盟国による資金提供としては過去最大で、スタースカーン専務理事は『人類の歴史上、最大の貢献である』と感謝の意を表した。中井財務相

は『有効活用を期待したい』と語った」

このように、多事通信の当初の記事（オンライン版）では、スタースカーン専務理事の「人類の歴史上、最大の貢献だ」という謝意について、正しく報じていた。

唯一、多事通信のみが朝生内閣および中井財務大臣の功績について報じていたのだが、国内メディアが〝酩酊会見〟を報道し始めた直後に、記事の一部が削除されてしまった。削除されたのは、

「加盟国支援が必要になった場合、要請を受けた日本が約100兆円の外貨準備からIMFに貸し付ける形で拠出する。加盟国による資金提供としては過去最大で、スタースカーン専務理事は『人類の歴史上、最大の貢献である』と感謝の意を表した。中井財務相は『有効活用を期待したい』と語った」

という部分である。

多事通信が自社のサイトから記事の一部を削除した結果、日本国民はG7における政府の実績について、知る術を失ってしまった。テレビではひたすら中井財務大臣の〝酩酊会見〟の映像が流され、野党や評論家たちが一斉に大臣辞任を求め叫ぶ。日本人は結局、中井大臣がそもそも何をしにローマのG7に赴いたのか、その成果は何だったのかについて、

知ることができなかったのである。
さらに不思議なことには、日本での大騒ぎの批判報道について、中井本人は完全に情報を遮断されていた。

体調が回復し、予定されていた幾つかの行事をこなした中井は、ローマからの直行便で成田空港に帰国した。
成田空港のビルの中を歩きながら、中井は通常通り、妻のよう子に携帯電話から連絡をした。こたびの外遊で自らが成し遂げた業績、すなわちストロスカーン氏との署名式の様子や、氏の謝辞がどのように報道されているかを、妻の口から聞きたかったのだ。
「ああ、よう子か。今、成田だ。どうだい？　テレビや新聞は、ＩＭＦへの融資枠提供について、まともに報じてくれているか？」
「しょ、昭二さん……」
「どうした」
「……何も、知らないの……？」
妻の声音に、中井は初めて、何かが起こったことに気付いた。
動揺しているらしいよう子を何とかしゃべらせ、自分の記者会見が日本国内でどのよう

に報じられているかを、中井はやっと知り、絶句した。
携帯を閉じながら、中井は随行者たちの顔を見渡す。しかし、全員が顔を伏せ、中井の方を見ようとはしなかった。ストロスカーン氏との署名式や謝辞について報じているマスコミは一社もなく、あの記者会見の様子だけが〝酩酊会見〟として繰り返しテレビで流され、すでに野党やマスコミが一斉に自らの大臣辞任を求めているという事実を、自分だけが知らなかった。
随行者たちの様子を見れば、彼らは事実を知っていたことが一目瞭然である。なぜだ。なぜ、誰も、自分だけに教えてくれなかったのか。
中井は、眩暈（めまい）がした。
足下が、大きな音を立てて崩れていくのを、確かに感じた。

洗礼

人は聖人君子たり得ないのに、他人は他人に幻想を持つ。この人がこれをするはずがない、これをするはずだ、とレッテル貼りをする。そこから外れると、対象を途端に叩く。批判する。様々なことに気付いてみると、自分の今まで見ていた世界は、嘘だったと雪乃は思う。まるで、フィルターを通して、見ていたようなものなのだ。

今日、雪乃は、江島神社を再度訪れてみた。

一人で歩くと、周囲の光景、色、匂いが、鮮烈に自分の中に飛び込んでくる。雪乃は心から驚く。友人とおしゃべりに興じながら訪れたのでは得られない、新鮮な感覚が押し寄せてくるのだ。

切なくなる潮の香り、海面に乱反射する光。参道を登り始める際には、大きな鳥居をく

ぐることに気付いた。鳥居は立派で、雄々しい。前回は暑さと友人との関係に気を取られ、その存在に気付きすらしなかった。

今回はエスカーではなく、急こう配の階段をゆっくり上ってみる。葉を落とした木々が、周囲から迫ってきた。冬特有の、凛とした、冷たい空気が雪乃を取り巻く。

階段を上りきり、参拝者の列に並ぶと、雪が降り出した。淡灰色の空から、白く微かな結晶が舞い降りてくる。そういえば、アラン様が朝生だと知った日の夜も雪が降った、と雪乃は思い出した。白い来訪者は、世界のどのような事物にも、等しく美しい化粧を施す。

雪乃の順がまわってくると、周囲の人に倣い、二礼二拍手し、雪乃は手を合わせた。

（神様、わたしは今まで、何をしていたんでしょう？　何を見ていたんでしょう？　わたしは、何も見ていなかったも同然でした、きちんと目を凝らしていれば見えたはずのものを、自らシャット・アウトしていました）

願うことは思いつかなかった。ただ恥ずかしくて、その思いを告白しただけだ。前回はただのパワー・スポットとかいう観光地にしか見えなかった神社が、荘厳なものに感じられた。

当然だ、わたしが生まれるずっとずっと前から、ここには神が祀られ、人が集ってきた。そんなこと、調べればすぐに分かるのに、見なかっただけ。わたしが、見ようとしなかっただけ。そして、見ないということは、罪だ……。

神社は雪乃に迫ってきた。畏怖を感じた、これが忘れてはならない感覚だ、人間一人は小さく、力弱い存在だ。自分は絶大な力を持っているのではない、自分よりスゴイものはいるのだ、という感覚。つまりは、謙虚、という気持ちだ。

雪乃は鳥肌が立った。寂しく厳しい洗礼を受けたと、実感した。

神社からの帰り道、雪乃は今まで手にしたこともなかった、哲学書を買おうと書店へ立ち寄った。目的は、朝生と翔が共に好きだという、アランの『幸福論』だ。手に取ってぱらぱらとやっていると、すぐ近くにも同じようなタイトルの本があるのが目に入った。『幸福について』と題された、その文庫を棚から引っ張り出してみる。こちらの著者は、ショーペンハウアーという哲学者だ。

2冊の「幸福論」を手にマンションに戻ると、とりあえずネットで両者の情報を検索してみた。

非常にざっくりとした分け方のようだが、アランは〝楽天観〟、ショーペンハウアーは

〝厭世観（えんせいかん）〟という考え方から世界を見ているのだという。言い換えれば、前者がオプティミスト、後者はペシミストということだろうか。
雪乃は、自分のことを考えてみた。わたしは、楽天観と厭世観、どちら寄りでもない。はっきり言えば、そこまで深く考えてこなかったのだ。一番最悪だ、と雪乃は自己嫌悪に陥った。真剣に考えているからこそ、こういう考えも出てくるのだろう……。
雪乃はベッドに寝転びながら、アランの幸福論のページを繰った。一つ、雪乃の心に、強く残ったフレーズがあった。

「ここに一束の乾いた枝があるとする。この枝は見かけは枯れたようで、土みたいだ。実際、そこに放置されたら、土となるだろう。しかしながら、この枝は太陽から吸収した隠れた熱を秘めている。ほんのわずかな焰（ほのお）でも近づけて見たまえ。たちまちパチパチと音を立てて燃える炭火となるだろう。ただ、戸を揺り動かし、囚われている者を目ざめさせる必要があったのである。

そういうふうにして、よろこびを目ざめさせるためには何かを開始することが必要なのである。幼な子がはじめて笑うとき、その笑いは何ひとつ表現していないのだ。しあわせだから笑っているのではない。むしろぼくは、笑うからしあわせなのだ、と言いたい。幼

な子は笑って楽しんでいる、ちょうど食べて楽しむのと同じように。しかし、まず食べる必要がある。そのことは、ただ笑いにだけ当てはまることではない。だから、考えていることを知るためにはことばが必要である。ひとりでいるかぎり、人は自分がほんとうに自分となるわけにはいかない。モラリストの馬鹿者たちは、愛することは自分を忘れることだと言っている。あまりにも単純な見解。自分自身から蟬脱（せんだつ）すればするほど、人はますます自分自身となるのだ。また、ますます強く自分は生きているのだと感じるようになるのである。君の薪を君の穴ぐらの中で朽ちてゆくままにしてはならぬ」

『幸福論』「77 友情」より（岩波文庫）

「幸せだから笑うんじゃない……笑うから幸せなのだ、か」

雪乃は小さく呟いた。

第三章

裁かれるべきもの

日本を支配するもの

東京タワーの赤いライトアップが遠望できる、マンションの一室。

八俣ひろみはイタリア製のレザー・チェアにもたれるように座り、インターネットからダウンロードした動画を見ていた。今年の1月末、朝生一郎内閣総理大臣が、ダボスで開催された世界経済フォーラムに出席した。その際、会場で朝生が行った演説の映像だ。

大型のディスプレイいっぱいに、朝生の笑顔が映し出される。

「シュワブ会長、ご列席の皆様、今、世界経済は100年に一度と言われる危機に直面しております。本日は、世界は何をすべきか、その中での日本の役割について、話をいたします。

私には信念があります。『経済的繁栄と民主主義を希求する先に、平和と人々の幸福がある』。これは、日本が戦後歩んだ道です。経済的繁栄は新しい中間層を創出し、中間層は、さらなる自由、民主主義、平和を希求します。多くのアジア諸国もこの道を歩みました。そして、驚異的な経済成長と、国によって濃淡がありますが、民主主義の伸張がもたらされたのです。日本が、アジア諸国を支援することによって果たした役割は小さくなかったと自負しております。この成功体験により、『経済的繁栄と民主主義を希求する先に、平和と人々の幸福がある』との考え方が、日本外交の背骨となりました。

私は2年前、外務大臣として、『自由と繁栄の弧』という考え方を示しました。これも、市場経済、民主主義を志向する多くの国々を支援し、繁栄の道を共に歩みたいという決意にほかなりません」

朝生は演説がうまい。その内容も、他の日本の政治家とは比較にならないほど魅力的だが、ゆったりと文節を区切って話すテクニックも巧みだ。聞き手に、湧き立つような気分を覚えさせる。

朝生のダボス会議での演説は、世界において現在進行形で続いている経済危機への対処、世界経済の体質強化、グローバル・インバランスの是正、内需拡大と、主に経済分野にお

ける話題が続いた。
さらに朝生の演説は日本経済、アジア経済、アフリカや中東にまで話が広がり、最後も素晴らしい言葉で締めくくられた。

「ご列席の皆様、2009年が重苦しい幕開けとなったことは認めざるをえません。しかし、我々は、この挑戦を奇貨として、より良い世界を創り上げていく、強靭さ、しぶとさ、そして楽観性を持つべきです。
より良い世界とは、何か。
第一に、一人ひとりが自らの努力により能力を開花できる世界です。
第二に、人種、民族、宗教などを含めた、多様性が尊重される世界です。
第三に、経済理性が復権し、競争と規制のバランスのとれた世界です。
経済的繁栄は、このようなより良い世界の基盤であります。
ここダボスには、各国、各界で活躍するリーダーが大勢おられます。米国ではオバマ大統領という新たなリーダーが誕生しました。私は、そうした方々と連携し、本年からを世界経済復活の年にして参りたい。フランスの哲学者アランは、『悲観主義は気分のものであり、楽観主義は意志のものである』と述べました。意志ある者が、難局を克服する、こ

の確信を述べ、演説を締めくくりたいと思います」

演説を終えた朝生に、会場のエスタブリッシュメントたちは、割れんばかりの拍手を送った。八俣はマウスを操作し、ブラウザを落とす。

「相変わらず、素晴らしいスピーチだわ」

八俣は、別に朝生のことを嫌っているわけではない。むしろ、近年稀にみる有能な宰相であると確信していた。しかし、マスコミ報道における評価は、真逆だ。朝生は「漢字も読めないおバカさんで、カップラーメンの値段も分からず、毎晩ホテルの高級バーで飲んでいる、いけ好かない金持ち首相」ということになっている。

このような虚偽のイメージを醸成するべく、マスコミ自身が偏った報道を続け、国内に朝生を侮蔑する〝空気〟を作り上げてきたのだ。国民テレビの記者として、八俣も当然、この〝空気〟醸成にかかわっている。

朝生の有能さを認めながらも、八俣が反・朝生キャンペーンを主導しているのは、単にそれが仕事だからだ。八俣の表向きの身分は国民テレビの一記者だが、実は会長室にも所属している。彼女は財部政権末期に始まった反・朝生キャンペーンの他にも、複数のプロパガンダ・プロジェクトを成功させてきた。しかしさすがに、今回のように大規模なプロ

ジェクトは初めてだ。

今回の反・朝生キャンペーンにおいて、八俣は二つの方針を貫いていた。一つ目は、失言問題を中心とした、朝生に対する徹底的な個人攻撃である。そして二つ目が、首相や閣僚たちの成果を、一切報道させないという手法だ。マスコミの最大の武器ともいえる〝報道しない自由〟を活用することで、政権に対する国民の信頼感を削り取っていくのである。

実際、今年1月のダボス会議における朝生の演説は、日本のメディアは一切報道していない。もちろん、首相がダボス会議に参加した、ということだけは、各局で報道されたのだ。しかし、聴衆を感動させた朝生の演説を、映像や活字で報じた大手メディアはゼロである。それどころか、朝生がイギリスのロニー・ブレア前首相のことを、ロニー・ブラウンと言い間違えたことのみを、

「朝生首相、英前首相の名前を3回言い間違え」

といった見出しで報じたのだ。結果、日本国民は朝生の心打つスピーチを目にする機会はなく、単に、「朝生がまたダボスで言い間違えをした。国際的な恥さらしだ」という印象のみが刷り込まれていくのである。

最近は、インターネットという新メディアが存在するため、国民はその気になれば、朝生のスピーチ映像を見ることはできる。八俣が2週間以上前の演説動画を見ることができ

るのは、総理府が映像をインターネットで公開してくれているおかげだ。しかし、まだまだ既存メディアのパワーは強大だ。実際、中井財務相の〝酩酊会見〟をテレビが繰り返し電波に乗せたことで、財務大臣辞任にまで追い込むことができたのだ。

八俣はローマから帰国後、汐留の国民テレビ本社の会長室に直行した。そして、氏本から称賛の言葉をかけられた。

「文句なしだ、八俣。……あれは、〝何〟を使ったんだ？」

「会長、お言葉ですが、おっしゃる意味が分かりかねます」

八俣は軽く目を伏せ、悲しげな表情を作ってみせた。

「わたくしどもは、功労者を労（ねぎら）っただけですわ」

氏本はニヤリ、と笑う。

「……お前はまったく、優秀だよ」

「光栄です」

八俣が会釈して直ると、氏本はまたいつもの不機嫌な顔に戻っている。

「江崎の方はどうする」

氏本の懸念ももっともだった。読解新聞の江崎千夏には、やや軽率なところがあり、ロ

ーマでの会見が始まる少し前、レイター通信の記者に、
「会見は面白いことになるわよ」
と、まるで〝酩酊会見〟を予言するかのような発言をしていたのだ。
八俣は静かな声音で続けた。
「会長。渡会会長にそれとなく、江崎記者を表舞台から引かせるよう、お伝えくださいませんか。事態が落ち着くまで、会に出席したメンバーは大人しくさせておいた方が得策かと」
「それは折を見て伝えておく。しかし、下っ端をいくら目立たせんよう押さえつけたところで、玉林は次の人事で国際局長から財務官に、篠塚はＩＭＦの副専務理事への栄転が決まってるそうじゃないか」
財務官とは、事務次官や国税庁長官と並ぶ、財務省の次官級ポストの一つだ。また、ＩＭＦ、つまり国際通貨基金には、日本から多くの財務官僚が送り込まれている。が、副専務理事とはもちろん、ＩＭＦ内でもトップクラスの地位である。
「自国の大臣を失脚させて栄転とは、日本というのは本当にすごい国ですね……」
八俣は、さすがに違和感を禁じ得なかった。玉林太郎は中井財務大臣の麻布高校における同期だ。本来、彼は大臣のローマ行に同行できるような立場にはなかった。Ｇ７には財

務大臣と財務官が出席するのが慣例で、国際局長である玉林が行く必要はまったくなかったのである。それが「大臣の同級生だから」という理由で、特例としてローマ同行が可能となったのだ。

「ふん」

氏本は馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「国家に『裏』の部分があるのも、官僚が自らの益を追い求めるのも、当たり前だ。言ってみれば、国家の中心にいる者たちが利益を貪欲に求めるからこそ、時代は進歩を遂げるのだ。そして大衆は、中心にいる者たちに踊らされる。国家の仕組みなど、有史以前から現在まで、何も変わってはいない」

「……」

〝もうろう会見〟の後、八俣は、中井にさらに追い打ちをかける仕掛けを準備しておいた。財務大臣を辞したとはいえ、中井の国民的人気は高い。特に日本の若者には、中井を朝生の後継者とみなし、熱狂的に支持している連中が多数いる。将来の〝中井首相〟の芽を摘むためにも、もうひと押しが不可欠だ。

八俣の目論見どおり、中井昭二が財務大臣を辞任した直後の2月21日。旭新聞に、

「中井前大臣　バチカンでも不祥事　酩酊会見直後の観光　規則違反により、警報作動」という見出しで、大きく記事が掲載された。

「主要七カ国財務相・中央銀行総裁会議G7での『酩酊記者会見』で引責辞任した中井昭二・前財務大臣が、会見の十数分後にバチカン博物館を観光した際、触ることが禁じられている歴史的に貴重な美術品に素手で触るなどしていたことが、バチカン関係者の話で分かった。また、立ち入りが制限された場所に入ったために警報も鳴ったという。記者会見後にも失態を重ねていたことになる。

バチカンに到着時から中井氏の足取りはフラフラと不安を感じさせる様子で、言葉も不明瞭だったという。案内役の説明を聞かずに歩き回ったほか、入ってはいけないエリアに足を踏み入れたり、触ってはいけない展示品を素手で数回触ったりした。そのために警備室の警報が幾度となく鳴ったという」

細部にまでこだわって書かれているが、実はこの記事は全て捏造（ねつぞう）である。中井前財務大臣がバチカン博物館を観光したことのみが事実で、残りは全てフィクションなのだ。だいたい、旭新聞はローマに取材陣を送り込んですらいない。現地にいる他紙の記者から、

「バチカン関係者によると、こういうことらしい」
と吹き込まれ、旭新聞は、このような記事を平然と書いたのだ。
八俣は居残り組の江崎に、
「大臣はバチカン見学中も問題を起こしたのよ。博物館で規則違反を連発して、警報も鳴ったとか……私はその場にいなかったので、これ以上詳しくは分からないけれど。この話が日本の新聞に載れば、大臣がおかしいという話の信憑性はますます高まるわね」
と耳打ちしただけだ。
八俣の耳打ちを受け、江崎は「中井財務大臣がバチカンで無礼な行為をした」と周囲の記者と話し合った。記者の中には、自分もそれを又聞きした、と言う者も出てくる。その会話の中で情報が紡ぎ合わされ、出来上がった物語を、懇意にしている旭新聞の記者に国際電話でしゃべったのである。無論、確定情報ではなく、「ということ、らしいわよ」という口調で江崎は話したのだ。
八俣から江崎が又聞きし、記者連の中で情報が錯綜し、膨らまされた〝中井前財務相が失態を演じたらしい〟という話が、旭新聞には〝どうやら事実〟という論調で記事にされる。さすがに旭新聞も〝確定情報〟として記事にすることはできず、「という」を連発している。だが、「という」と付いていようが付いてなかろうが、旭新聞のような大手紙に

記事が載れば、国民はそれを真実であると認識する。結果的に、中井の評判をさらに貶め、朝生政権に打撃を与えることができるのだ。

実は、この旭新聞による「中井前大臣　バチカンでも不祥事」報道は、バチカン見学時に大臣に同行した和多真（わだまこと）神父から、完全に否定されている。和多神父は、中井前財務大臣が酩酊会見に加え、バチカンでも無礼を働いていたという報道を読み、驚愕した。そしてそれを否定するために、中井の事務所に国際電話をかけ、さらに、状況を詳しく説明する手紙を日本に送っている。

『バチカン放送局　神父　和多真

私は今、日本から送られてくる報道に、大きな戸惑いと、深い悲しみを抱いています。私自身も関わった中井前大臣の博物館見学が、なぜあのように、事実と異なる形で報じられるのでしょうか。

私は見学の間中、通訳として中井前大臣の最もお側近くにおりましたが、報道のような非常識な行為を、見た記憶はありません。また、中井前大臣はあの時、酔っているご様子には見えませんでした。私はアルコールを一滴も受けつけませんので、その臭いには敏感です。しかし中井前大臣からは、お酒の臭いはしませんでした。

以下、日本の報道のどこが事実と異なっているか、ご説明したいと思います。
今回の問題を最初に報道した旭新聞に、こう書かれています。
《（バチカン博物館に）到着時から中井氏の足取りはフラフラと不安を感じさせる様子で、言葉も不明瞭だったという。案内役の説明を聞かずに歩き回ったほか、入ってはいけないエリアに足を踏み入れたり、触ってはいけない展示品を素手で数回触ったりした。そのために警備室の警報が幾度となく鳴ったという》
足取りがふらふらしていたかは、見る人の主観によるものでしょう。しかし言葉が不明瞭だったとは、いったい誰が言っているのでしょうか。見学の間中、中井前大臣とお話したのは通訳であった私です。中井前大臣の言葉は、非常にはっきりしておりました。
「案内役の説明を聞かずに歩き回った……」というのも、おかしな話です。案内役とはイタリア人ガイドの事でしょうが、彼女のイタリア語の説明を中井前大臣が聞けるはずがありません。中井前大臣は、私の通訳を聞いていたのです。私が通訳をしている間は、もちろん歩き回りなどしませんでしたし、非常に熱心に耳を傾けておられました』
手紙には、バチカン博物館における中井前財務相の行動が詳細に綴られ、最後は神父による祈りの言葉で締めくくられている。

『ところが一週間後、あのような報道がなされたのです。この間、バチカンで中井前大臣の「非常識な行動」が話題になった事はまったくなく（そもそも非常識な行動などなかったのですから話題にならなくて当たり前ですが）、それこそ寝耳に水の思いでした。

旭新聞の報道ののち、私は日本の新聞社、通信社、テレビ局から取材を受け、事実かどうかと聞かれました。そこで、中井前大臣の行動に非常識な点はなかったと繰り返しご説明したのですが、私の発言は一行も報じられませんでした。

日本のマスコミはすでに、中井前大臣は酔っていたはずだ、非常識な行動をしたに違いない、という先入観にとらわれており、私の意見をまともに聞こうとはしなかったのでしょう。どの報道も旭新聞と似たり寄ったりだったことは、残念でたまりません。

中井前大臣には、ご同情申し上げます。また、御家族をはじめ身近な人たちのご心痛を思うと、やり切れない思いです。私はたまたま通訳として、今回初めて中井前大臣とお会いしましたが、その場にいたものとして、事実と異なる報道で苦しんでおられるのを見過ごすわけにはいきません。このため取材にも積極的に応じてきましたが、記者たちの先入観を改めることはできませんでした。

今はただ、バチカン観光における誤解が一日も早く解け、皆さまの心に平穏が訪れるよ

う、祈るだけです』

一度でもマスコミで報じられると、その報道が植えつけたイメージは、容易には払しょくされない。さらに、日本のマスコミは一度報じた事実について、たとえそれが間違いであると確定しても、撤回や訂正報道をしようとはしないのだ。

昨今の日本では、マスコミについて、「第四の権力だ」「否、今や第一の権力だ」と批判する人が少なくない。しかし、マスコミが第一の権力なのではない。マスコミ内の〝空気〟を作り出す者こそが、日本の第一の権力者と言えるのだ。

メディアの大罪

また今年も桜の季節を迎え、雪乃は藤沢から、都内は麻布に引っ越した。慶和大学を無事卒業し、晴れて興産新聞社正社員としての第一歩を踏み出したのだ。

新入社員たちが真新しいスーツで誇らしげに社内を闊歩する中、雪乃は、他とは違った面持ちで出勤していた。マスコミに対する疑問と、それでもマスコミを信じたい気持ちとの狭間で、揺れ動く日々だった。

朝生への執拗なバッシングに加え、中井の酩酊会見の報道について、雪乃は思い悩んだ。ホテルのバーで朝生と語った日、朝生は中井を高く評価し、彼を「真面目過ぎる」と笑っていた。そんな人が、酩酊して、会見などするだろうか？

だいたい、中井の性質以前に、部下や同僚が多数周囲にいながら、酩酊もしくはもうろ

うとしている大臣を会見の場に立たせた、そこに最も疑問を感じるのだ。
自分がその立場だったら、と雪乃は考える。雪乃が責任者として取材に赴く場面で、もし酒に酔ってろれつが回らないのならば、同僚や部下は自分を休ませておき表舞台には出さないだろう。雪乃自身も、他の適任者に任務交代を依頼するか、または代替スケジュールの調整を頼むだろう。
逆に自分が部下ならば、酩酊している上司を、国際社会の重要シーンには出さない。本社のしかるべき部署に指示を仰ぎ、上司を急病とプレス・リリースし代替者を赴かせるなど、何らかの処置を講じるだろう。間違っても、病人を前面に押し出すことはしない。それが社会人としての常識であり、義務である。
つまり、どのように置き換えてみても、中井だけがバッシングされているのはおかしいとしか思えないのだ。マスコミが社会の公器であるならば、それこそ、この事件の周囲の人間について職責追及するのが役目ではないのか、と感じる。
しかし、雪乃にとっては至極当然と思われる考えも、社内の人間からはことごとく撥ねつけられた。去年の雪乃の教育担当であった津和野なら、いくぶん話しやすいのだが、彼女はマスコミ批判の話になると、途端に及び腰になる。普段、あれほど体も態度もデカイ津和野なのに、逃げ口上ばかりになるのだ。

マスコミの偏った報道は問題だ。根拠の薄いバッシングなど、見るに堪えない。しかし、と雪乃は思う。テレビのバラエティで気持ちが明るくなったり、情報番組で流された知識が生活に役立ったり。災害報道によって情報が届けられ人の命が守られたり。……これらは全てマス・メディアだからこそ可能なのかも知れず、否定できない、素晴らしい功績なのだ。

分からない。

わたしには、分からないことばかりが眼前に山積しているようにしか見えない。

雪乃はときどき、携帯を取り出しては〝アラン様〟にメールで問いかけたい衝動に駆られた。しかし、相手は〝アラン様〟などではなく、この国の首相、朝生一郎総理大臣なのだ。おいそれと意見交換できるような立場ではない。ましてや、携帯メールなど……。そう思い直し、毎回、携帯をしまうのだ。

雪乃は、江島神社に行った後から、様々な本を読むようになっていた。あのとき購入したのは2冊の哲学書のみだったが、その後、大学卒業までの時間と最後の春休みを、多くの本を読むことに充てた。朝生と中井の著作も、当然購入した。

朝生の著作『とてつもない日本』を読んだとき、雪乃は恥ずかしくてたまらなかった。なぜなら、文中に朝生がとうとうと語っていた「日本は素晴らしい国だ」という観点が、

雪乃にはそれまでまったくなかったからだ。
日本という国は、神代から数えれば二六〇〇有余年の歴史を持ち、時代により権力の幅に増減はあれどその統治者は変わらず、日本という国名が保持され続けた。国の名が変わらない、とは、口で言うことは容易いが、その意味を考えてみれば、それがいかに稀有な事例であるかが分かる。世界では、紛争などにより、その地域の名が変わり続けることはごく当たり前だ。非常に乱暴な言い方をすれば、世界史とは侵略の歴史でもある。つまり、他国はその名を変え続けてきたのだ。
先人によって連綿と受け継がれてきた〝日本〟という国名と国体に誇りを持つ、という感覚を、雪乃はそれまで一度も持ったことがなかった。それに加え、朝生の言う「日本人は素晴らしい」という考えも、初めて触れるものだった。
別に、雪乃は日本が嫌いだとか、日本人であることがイヤだとか思ってきたのではない。ただ、日本は諸外国に比べて遅れた国だ、と信じ込んでいたのだ。否、〝信じ込む〟という積極的な行為でもないだろう。何となく、〝日本は遅れている、もっとグローバル・スタンダードに合わせなければ〟と考えていただけだ。しかしこれは、冷静になって考えてみれば、外界からの刷り込みに他ならないことに気付いたのだ。
雪乃が物心ついた時から、テレビや新聞では、「日本はダメな国だ、日本は世界に悪い

ことをした、日本は旧いしがらみを捨て世界標準に近づくべきだ」と盛んに喧伝(けんでん)していた。そして雪乃は当然、そう信じて育ったのだ。今になって考えれば、真綿で首を絞めるような、悪質なインプリンティングである。

やはり、マスコミの内包する問題は大きい……。

雪乃は苦々しく思う。もちろん、信じ込む一般人にも罪はあろう。しかし、情報を人々に伝える、それがマス・メディアの役割であると、人は当然信じているのだ。マスコミがまともに報道をしないことこそが、人の意識を歪める。

マスコミの罪は歴然と存在しているのだ。では、この罪は、いつ、誰によって、裁かれるのだろうか……?

朝生内閣は4月10日に15兆4000億円の財政支出を中心とする第三次補正予算（厳密には09年第一次補正）を成立させた。15兆4000億円とは、当時のGDP（国内総生産）の3％に該当する。このとき成立した景気対策は、直接的な財政支出の他にも、事業費全体では56兆8000億円にも上る大規模なものだった。

特に、朝生政権の第三次補正予算では、「国土のミッシングリンクの解消」「港湾・空港インフラの強化」「整備新幹線の着実な整備」など、インフラ整備の投資のための公共事

業拡大を盛り込んだところが特徴的だった。この「国土のミッシングリンク」とは、高速道路の繋がっていない区間を意味している。

例えば、宮崎県は高速道路の整備が不十分であり、大都市圏との交通が不便であるため、地元の農産物を大消費地に運ぶことができない。また、高速道路が整備されていない地域には、工場が建設されることも少なくなる。高速道路のミッシングリンクの存在により、宮崎県は経済成長という意味において、大きなハンディキャップを背負わされているのだ。

あるいは、東京、大阪、名古屋という三大都市圏にしても、環状道路の整備率は53％に過ぎない。特に、世界最大の都市圏である東京の環状道路整備（外環自動車道、圏央道、及び中央環状品川線）が未整備であるため、都心部に用がない車までも首都高速を通らざるを得ない。結果的に、都内では慢性的な渋滞が発生している。

朝生政権は、それまでの「公共事業のマイナスシーリング（予算を前年比で減少させること）」を撤回し、環状道路などの公共事業の予算を拡大することを決定したのである。

橋元政権以降、日本の公共事業は着実に減らされ、今や国土のインフラ整備はもちろんのこと、災害対策すらまともに打てない状況になっている。朝生政権が国土交通省に全国の橋梁の調査を実施させたところ、すでに121基の大型の道路橋（全長15メートル以上）が崩落寸前で、通行止めになっていることが判明した。全長15メートル未満の小型の

橋を含めると、実に１４3基である。大型車の通行を禁止している重量制限つきの橋については、６８０基を超えていた。

橋梁やトンネル、その他のあらゆるインフラは、一度建設すれば永遠に使える、というものではない。コンクリートの劣化や鋼材の腐食により、建設後、50年ほどで寿命を迎える。50年経つと必ず橋が落ちるわけではないが、大々的なメンテナンスを必要とするのは明らかだ。

さらに日本は、言うまでもなく、世界屈指の震災大国である。08年5月、中国の四川省で大地震が発生し、学校が崩壊し、多くの子供たちが犠牲になった。朝生内閣は、中国を超える震災大国日本の政権を担う立場として、学校や病院の耐震化についても、大規模な予算を組んだのだ。

09年の朝生政権の通常予算及び補正予算により、日本国の公共事業費の総額はおよそ5年ぶりに8兆円を上回った。しかしこの額も、ピーク時（時の首相・霧島恵之進により大規模景気対策が実施された98年）の3分の2程度である（巻末資料２９２頁【図３―１】参照）。

朝生政権はリーマン・ショックの余波に苦しむ日本経済を救い、国民の所得を拡大させるためにこそ、三次にわたる補正予算を組んだのである。それにもかかわらず、マスコミは例により、朝生政権の景気対策についてまともに報じようとはしなかった。

マスコミが報じたのはただ、日本のメディア芸術の国際的拠点として設置される予定だった「国立メディア芸術総合センター」のみだった。朝生政権は緊急経済対策の一環として、日本のメディアアート、コミック、アニメーション、コンピューターゲームなどのメディア芸術の展示、資料収集、保管、調査研究の拠点機能を果たす施設設置を目指したのである。第三次補正において、この施設の用地費及び建設費として117億円を予算計上した。

マスコミは、総事業費58兆円の景気対策についてはまったく報じようとせず、わずか117億円の「国立メディア芸術総合センター」のみをクローズアップさせ、激しく批判した。

朝生首相はもともと日本のコミック、アニメといったカルチャーに造詣が深く、そこも国民から人気がある要因の一つだった。それをマスコミは逆手に取り、

「朝生は貴重な公費でアニメの殿堂を作るのか」

「国立メディアセンターは、朝生の国営マンガ喫茶だ」

などと、レッテル先行の批判を展開したのである。

朝生政権の景気対策についてマスコミは、自分たちに都合がいい部分だけを強調して報道し、都合が悪い部分については完全に隠蔽(いんぺい)したのだ。

今回の件について言えば、マスコミにとって都合がいい部分とは、景気対策の中に「国立メディア芸術総合センター」が含まれていたことである。朝生と言えば漫画・アニメ愛好家、という印象が、国民の間に知れ渡っている。そのうえで「国立メディア芸術総合センター」のみを殊更に報道すれば、今回の景気対策も〝朝生の単なる我儘(わがまま)〟として矮小化(わいしょうか)できるのだ。

逆に、都合が悪い部分とは、景気対策の全体像だ。総事業費58兆円もの大型景気対策をそのまま報じると、「朝生首相が果敢な景気対策を行おうとしている」と、〝真実〟を知ってしまう国民が増えることになるのだ。

朝生の早期退陣を願う氏本と渡会にとって、朝生の景気対策が世に知れ渡ること、その政策が功を奏し実際に景気が回復してしまい、朝生の手柄にされることなど、望ましくない事態であった。ましてや、直近に総選挙を控えている時期なのだ。

朝生による景気回復が明確になったところで総選挙に突入した場合、自民党が勝利してしまう可能性がある。となると、当然ながら、朝生政権は存続してしまう。せっかく財務省を味方に付けたというのに、次は〝民主主義〟という敵が眼前に立ちはだかることとなるのだ。

「今回のプロパガンダには、カード・スタッキングを使います。これはご存じの通り、我々に都合がいいことのみを報じ、不都合なことは隠す、という手法です」

例により、八俣は氏本に解説してみせた。

「幸いなことに、朝生首相は漫画やアニメといった、日本のポップ・カルチャーのファンであることで有名ですね」

八俣は続ける。

「朝生首相が『国立メディア芸術総合センター』を建設するのは、あくまで朝生の個人的趣味による、というレッテル貼りを繰り返す。これによって、国民のための正しい景気対策も、政権叩きに利用できるのです」

「朝生の政策が、我が国のためになるとは、まったく思わん。国立なんとかセンターとは、耳あたりは確かにいいが」

氏本が吐き出すように言ったのを受け、八俣は身を乗り出した。

「だからこそ、『アニメの殿堂』とレッテル貼りするのです、会長」

言いながら、八俣は自分でもおかしかったのか、少し笑ってしまった。

「すでに、民主党の鳩川(はとかわ)代表に、この『アニメの殿堂』というキャッチ・コピーを吹き込みました。野党陣営から盛大な追及が、明日にも始まるのでは……？」

手回しまですでに済んでいることを知らされ、氏本は改めて、八俣を〝使える部下〟と再認識した。

「なるほど。いかにもマスコミや野党が喜びそうなレッテルではある」

マスコミ界のドンと言われる立場でありながら、氏本は自らが身を置く業界を卑下するような言い方をした。実際のところ氏本は、自身が支配者の一人となっている日本のマスコミ業界を、バカにしているのである。

どの新聞もどのテレビ局も、判で押したように画一的な、歪んだ報道をするのだ。一紙、一局くらいは正しい報道を心掛けてもよさそうなものだが、どの社も業界に蔓延する空気に逆らおうとしない。

結果、財政問題については、財務省の記者クラブである財政研究会で配られた資料が、そのまま一面を飾る。また朝生内閣については、八俣が流したディスインフォメーションが全テレビ局で繰り返し流される。そして大衆は、紙面やテレビ画面の情報に踊らされるのだ。

「くだらん連中だ……」

八俣を送り出した氏本は、会長室の豪奢（ごうしゃ）な椅子にその身を沈めた。

かつてのソ連や、また現在の中国などでは、マスコミは共産党の支配下にある。党が言

論統制、情報統制を強める中、ごくごく一部の心ある者たちが、真実の情報を命がけで大衆に伝えようとし、当局から弾圧されてきた。ところが、我らが日本は、言論の自由が保障されている民主主義国家でありながら、マスコミが自らの本分を忘れている。

しかし、氏本はその事実を重々知りながら、それを正しく方向転換させようなどとは微塵も思わない。民間人でありながら政治に多大な影響を与えられる、この稀有な地位を捨てるなど、できる筈がないではないか。

黒幕の正体

マスコミに不信感を持ちながら同業界に飛び込んだことに苦しむ中、雪乃は、若き報道カメラマン、神庭とさらに懇意になった。社内に本音を話せる人間はなく、孤独感を募らせていた雪乃にとって、神庭の存在は貴重だった。雪乃の抱く疑問に、彼は同調してくれることも多い。

神庭は、大手マスコミの人間は高慢だ、と語る。上層部は優遇されているが、現場スタッフ、下請け、さらに孫請けの制作会社などは冷や飯を食わされている。熱意をもって番組制作をしているスタッフの給料が下がり続け、一握りの人間が高収入を維持しているのは理解できない。マスコミ業界が不況ならば、そこに携わる全ての人の給料が一律に下がり、その中で努力すべきだ。しかし現実は違う。神庭はそこに違和感を持っていると言う。

「でも、俺もひいき目があるのかもな。俺は作る側の意見しか分からない。それを吟味し、調整する役目や、高く売る役目には、それにはそれなりの事情もあるのかも。ただ、何だろう、俺は、物を〝作ってる〟人種の方が好きだよ」

売る人がいる、宣伝する人もいれば、仲介することで手数料を得る人もいる。しかし全ての商売の大本を辿れば、物を作ることこそが根幹にある。最初に物を作る人間がいなければ、何も生まれないのだ。だからこそ、神庭は自然への畏敬を忘れない。自然は、万物を生み出す母だからだ。

写真学校に在学中、神庭は日本各地の田舎をまわり、地元の人々やその土地の風習を撮ることを好んでいたという。しかし就職を考え、報道写真を撮るようになった。

放浪していた、と聞き、雪乃は翔を思い出した。でも翔は、世界を見たくて飛び回っていた。それに対して神庭は、日本の津々浦々を見たくて動き回っていたのだ。

雪乃にも、世界中にたくさんの見たいもの、行ってみたい場所がある。フランスはジベルニーのモネの庭を見たいし、ウィーンの音楽祭にも行ってみたい。フィンランドの大空にオーロラを見上げてみたい。しかし、日本国内の名勝を、自分はどれだけ見たことがあるのか？

京都・奈良の神社仏閣は修学旅行で行ったが、富士山も、伊勢神宮も、皇居も、まだ行

ったことがない。美瑛の花畑の色彩、奥入瀬渓谷、松島、海にそれこそ厳然と浮かぶ厳島神社、五島列島、神々の住まう高千穂峡、首里城、島全体が鬱蒼(うっそう)と生い茂る屋久島。旅行のパンフレットの情報はいくらでも見たことがあるが、行ったことはない。

雪乃が思いを巡らしていると、神庭は照れくさそうに口を開いた。

「今は報道写真をやっているけど、フリーランスでも食べていけるなら、気ままに写真を撮りながら旅行を続けたいな、と。甘い考えなのは分かってるけどね」

自由に生きている――雪乃の目には、神庭はそう映る。

進学校を出て、有名大学に現役合格し、一流企業に新卒で就職する……雪乃の歩んできた人生は、画一的で優等生的で、言ってみれば〝刷り込みの常識そのもの〟だった。このままいくと、自分は30歳前後で結婚して、子供を二人くらい産んで、カルチャースクールに通ったりして、絵に描いたような〝普通の幸せ〟のハードルを、淡々とクリアしていくのかも知れない。確かにそれは幸福だろう、でも……。

神庭がしたいと言う、写真を撮りながら旅を続ける生活もちょっといいな、と雪乃は思った。

＊　＊　＊

朝生内閣の支持率が低迷する中、総選挙のデッドラインが近付いてきた。
政権発足直後の朝生は、早期の総選挙を心中に秘めていたが、リーマン・ショックによる混乱が起きた以上、解散するなどできるはずがなかった。なぜなら現在の国会は、衆参のねじれの状況にあるのだ。解散総選挙を強行し、自民党が過半数を取れたとしても、現在の議席数（自民党が3分の2を持つ）を維持することは、まず不可能だ。衆院の3分の2を失うと、補正予算の関連法案を参議院で否決された場合、廃案になってしまう。結果的に、朝生政権が三次にわたり立案した各種の補正予算は、実行できなくなるのだ。
衆院の3分の2を維持している状況であっても、民主党を中心とする野党は、参院で「審議引き延ばし」をすることで政権の景気対策を妨害してきた。朝生政権が早期の解散総選挙に打って出なかったことは、仕方がない選択であった。
政権発足時から延々と続く反・朝生キャンペーンには、百戦錬磨の朝生といえども参ってきていた。繰り返される虚偽報道、捏造報道に腹を立て、朝生は、
「自分は新聞など読まない。ウソばかり書いてあるから」
と皮肉を公言するに至った。これによって、ただでさえ反・朝生の空気が強い記者たち

を、さらに敵側に追いやってしまう。

実際には、朝生は新聞を購読していたのだ。が、景気対策の中身についてまともに報じず、国立メディア芸術総合センターのみを取り上げ、「アニメの殿堂」として揶揄を繰り返すマスコミに、堪忍袋の緒が切れたのだ。

朝生首相の「新聞を読まない」発言は、例により野党からの政権攻撃に利用された。衆院予算委員会で野党議員から、

「一国のトップリーダーが『私は新聞を読まない』と公言することがあっていいのか」

と質問される。それに対し、朝生は、

「新聞には、しばしば偏っている記事が多いように思う」

と答えた。しかし、この「偏っている記事が多いように思う」という発言が、新聞に載ることはなかった。

マスコミにとって不利な情報が、わざわざマスコミによって報道されることは少ない。彼らは、この種の情報隠蔽について、

「我々は報道〝しない〟自由も保持している」

などとうそぶく。そして、政治家が、

「マスコミに不利な情報のみを、なぜ、報道しないのだ」

と問い詰めると、途端に
「政治家による、〝言論の自由〟の侵害だ」
と反論するのだ。
結局、朝生政権は解散総選挙のタイミングをつかめないまま、ただひたすらに激務を遂行していた。が、いやおうなしに時間は過ぎてゆく。とうとう、7月の衆議院議員任期切れが間近に迫ってきた。支持率は20%台に低迷しており、自民党にとって厳しい選挙戦になることは、明白であった。

業界に蔓延する空気はもはや御しがたく、メディアは政権を肯定する報道がまったくできない状況となっていた。この空気に逆らい朝生政権を褒める報道をすれば村八分に遭うような恐怖を、全マスコミ関係者が共有していたのである。
無論、気骨のある一部の記者が、正しい報道をすべく記事を書くことがある。しかしデスクは、「今はこの手の報道はやめておこう」と、すぐに差し止めてしまう。
雪乃は先日、財界の重鎮にインタビューを行った。すでに70歳を過ぎているが、顧問として社の経営に現役で携わっている、津川マキ彦という人物だ。津川は雪乃に、１９８５年のプラザ合意以降の日本の報道について、思い出話を語った。

「あの時は、とにかく全ての新聞やテレビが、『日本は円高で経済が壊滅する』と、声高に叫んでいた。しかし、落ち着いて考えてみると、いくらなんでも『日本経済が壊滅する』はあり得ない。円高によって利益が増える業界もあるのだからね。それで、私は懇意にしている記者に、『なぜ、ここまで日本経済について悲観論ばかりを書くんだ？』と聞いたんだ」
「スゴイですね。普通の人は、新聞の論調をそのまま受け入れてしまうでしょう」
雪乃は素直に感心し、その先の言葉を待った。
「記者は、『悲観論に偏っているのは分かっているが、上司の意向がある』と、こう言うのだよ。自分が『日本経済は破綻しない』という論調の記事を書いても、上司に止められてしまうというのだ。そこで、私はさらに、彼の直属の上司に話を聞くことにした」
津川は、キレイに生え揃った、白い顎鬚を撫でた。
「私は彼に、記者にしたのと同じ質問をぶつけてみた。すると、彼はこう言ったのだ。『私も今の日本経済に関する論調は、あまりにも一方的だと思っています。しかし、社長が……』」
津川はここで、ぐいと腕を組んだため、和服の袖に大きく皺が寄った。
「私は唖然としたよ。記事の責任者の意見ではなく、社長の意見で論調が決まるとは……。

報道機関として、その体質はいかがなものか！　憤懣やるかたなく、私はその足で社長に会いに行ったのだ」

「津川さんの行動力に、敬服します。……それで、その新聞社の社長は何と答えたのですか？」

「彼はこう言った」

苦々しい表情を浮かべ、津川は続ける。

「もちろん、自分は自社の新聞の論調を歪める気など、さらさらない。だが、社内の空気が、日本経済に関する悲観論以外を書くことを許さないものだった、と。

何と、新聞が画一的に日本経済悲観論を流していた、その黒幕は〝空気〟だったんだよ。誰かが日本経済について悲観的な記事を書き、それを読んだ上司や社長までもが『ああ、日本経済はもうお終いなのだ』という空気を共有してしまう。すると、そのあとは誰も空気に逆らうことがなくなり、結果として報道が歪む。

あまりの馬鹿馬鹿しさに、私はもう、何も言う気が起こらんかった」

津川翁の怒りももっともだ、と雪乃は痛感した。

マスコミの論調を歪める〝空気〟。今は亡き山本七平は、名著『「空気」の研究』（文春文庫）において、次のように書いている。

「いわば彼を支配しているのは、今までの議論の結果出てきた結論ではなく、その『空気』なるものであって、人が空気から逃れられない如く、彼はそれから自由になれない。従って、彼が結論を採用する場合も、それは論理的結果としてでなく、『空気』に適合しているからである。採否は『空気』が決める。従って『空気だ』と言われて拒否された場合、こちらにはもう反論の方法はない。人は、空気を相手に議論するわけにはいかないからである。『空気』これは確かにある状態を示すまことに的確な表現である。人は確かに、無色透明でその存在を意識的に確認できにくい空気に拘束されている。従って、何かわけのわからぬ絶対的拘束は『精神的な空気』であろう。

以前から私は、この『空気』という言葉が少々気になった。そして気になり出すと、この言葉は一つの〝絶対の権威〟の如くに至るところに顔を出して、驚くべき力を振るっているのに気づく」

「空気の責任はだれも追及できないし、空気がどのような論理的過程をへてその結論に達したかは、探求の方法がない」

「日本には『抗空気罪』という罪があり、これに反すると最も軽くて『村八分』刑に処せられる」

「統計も資料も分析も、またそれに類する科学的手段や論理的論証も、一切は無駄であっ

て、そういうものをいかに精緻に組みたてておいても、いざというときは、それらが一切消しとんで、すべてが『空気』に決定されることになるかも知れぬ」

結局、現在の日本のマスコミを支配しているのは、プラザ合意のときから、否、もしかしたらそれ以前から、一貫して〝空気〟なのだ。空気は、まさに山本の言うように「絶対的権威」として、あちこちに顔を出し、甚大な力を行使する。しかも、同時に山本の言う通り、空気に責任を取らせることはこの世の誰にもできない。

空気がマスコミの論調を変え、世論に影響を与え、選挙結果を操作し、最終的には政治と歴史を変えてしまう。空気の結果、国家がおかしな方向に向かったとしても、その責任は誰も取れない。なぜなら、〝空気〟だからである。

何を信じ、何を疑うか

総選挙が近づく中、雪乃は仕事の合間に、大手町のカフェでパソコンに向かっていた。季節はいつしか夏へ移り変わり、ようやく雪乃も仕事に慣れつつあったが、職務に対するストレスは増加する一方だった。

雪乃がニュース・サイトをチェックしていると、隣の席から「マスコミ」という言葉が聞こえてきた。思わず耳をそばだたせる。

「新聞にしてもテレビにしても、嘘ばかり言ってるからな。俺は基本的に、マスコミの情報はマユツバだと思うことにしてるんだよ」

「はあ、そうですね」

上司風の男が、部下らしき若い女性にマスコミ論をぶっているのだ。男性はピンストラ

イプの紺のスーツを着ており、その高価そうな生地の様子から、それなりの地位にいることが分かる。女性の方は地味な黒のスーツ。年齢も若いようで、リクルート・スーツにしか見えない。
「マスコミもダメだが、朝生もダメだな。何が『アニメの殿堂』だよ、自分の趣味に、貴重な税金を使うつもりか？　税金ってのは、元は俺たちの給料だぞ」
「あたしはアニメとかゲームとか結構好きなので、あってもいいかなあ、と思うんですけど。こうゆうのはダメですか」
男はバカにしたように答える。
「ダメに決まってるだろ。君も少額ながら税金を納めてる身なんだから、少しは社会常識を学ばないとな。……だいたい、日本のアニメは質が下がりまくってて、もう競争力はないんだ」
「部長って、アニメを見られるんですか？」
女性は驚いたようで、声が裏返った。上司の男は50代と思しく、雰囲気的にも、とてもアニメを継続的に見ているとは考えられない。
「俺が見るわけないだろ、くだらない。アニメなんか、金がない、オタクとか言う連中の御用達（ごようたし）だろ」

「……」
女性は戸惑ったようだ。
「あの、じゃあなぜ、アニメ事情をご存じなんですか」
部下からの問いに、男はこともなげに答えた。
「ああ、先月、『日財トレンド』に特集記事があったんだよ。もう日本は全盛期を過ぎて久しく、今の世界のメイン・ストリームはアジアに移ってるんだと。日本国内のアニメ会社は、業績も軒並み落ちまくってるらしいな」
隣席の会話ながら、雪乃はあきれ顔になってしまった。部下の女性の、なんだか間延びした声が聞こえてくる。
「部長、『日財トレンド』はオーケーなんですか？　雑誌も、マスコミの中に入ると思うんですけど」
「う？」
言葉に詰まり、男は視線を泳がせた。
「それとこれとは、違うんだよなぁ」
男は先ほどまでとは打って変わったように、口の中だけでモゴモゴ言うと席を立ち、部下を促した。殊更に靴音を響かせてドアへと向かっていく。

二人がカフェを出ていくのを見送りながら、雪乃は考え込む。
国民の中には、マスコミの論調に不信感を持っている人も、少なくないのかも知れない。しかし、マスコミを完全に遮断できるかといえば、それは不可能だ。情報を手に入れる術を持たなければ、生活に支障をきたすのは明白である。結果、マスコミ報道を「疑いつつ、信じる」という状況に陥らざるを得ない。
無論、現代ではインターネットを活用することで、マスコミを迂回して情報を入手することも可能だ。しかし、インターネット上に記載されている情報が正しいかと言えば、そうではない。インターネットは、スクリーニングがまったくされていない情報が飛び交う世界、まさに玉石混淆と言える。公的機関や企業などによるスクリーニングが為されず、いつでも誰でも根拠なく情報発信できることから、虚偽や捏造の度合いはマスコミの比ではない。
インターネットに流れる情報をどう受け止めるか。これは結局、個々人の情報読み取り能力に依存するしかない。つまり、情報リテラシーを身に付けていない者にとっては、ネットは悪影響の方が大きい。その意味では、大手マスコミの方が遥かに有用だ。
雪乃は思う。マスコミもネットも、情報をこれだけ有し巨大でありながら、どちらも万全ではない。それでは人は、何を信じればよいのだろう?

＊　＊　＊

２００9年7月21日。日本国内閣総理大臣・朝生一郎は衆議院解散を宣言した。後の日本の運命を激変させることになる、第45回衆議院議員総選挙が始まったのだ。

政権奪取のみを目的として結成された野党第一党の民主党は、まさに選挙互助会として相応しいマニフェストを掲げた。「政権交代！」の四文字が表紙を飾る民主党のマニフェストには、朝生政権が重視したような、経済成長に関する数字は一つもなかった。そこに並べ立てられているのは、ただ「子ども手当などの政策により、家計の可処分所得を増やし、消費を拡大します。それによって日本の経済を内需主導型へ転換し、安定した経済成長を実現します」等の、数値的根拠がない代わりに、国民に耳あたりが良い文章ばかりだったのである。

民主党のマニフェストには、経済に関して主に三つの問題があった。

一つ目は、成長戦略の数字が一つもないという点である。「可処分所得を増やし、消費拡大」云々にしても、単に国民受けしそうな言葉を並べただけであり、根拠に乏しい。デフレ期に可処分所得を増やすだけでは、貯蓄増大という結果を招く可能性が高いのだ。

経済成長とは、GDP（国内総生産）の拡大を意味している。国内総生産とは、支出面からみると「個人消費」「民間投資」「政府支出」「純輸出」の四つに細分化される。そして貯蓄とは、消費でもなければ投資でもない。

二つ目の問題点は、景気対策あるいは成長戦略らしきものが、ことごとく「所得移転」になっているという点である。所得移転とは「誰かから誰かに所得が移るだけで、何ら生産やサービスの供給を伴わないお金の動き」を意味する。所得移転がどれだけ増えても、消費や投資など、GDPに影響する経済活動は生まれない。

民主党の経済関連の政策は、

「子ども手当・高校無償化（政府から子供がいる家計に所得が移る）」
「農家戸別所得補償制度（政府から農家に所得が移る）」
「暫定税率の廃止・高速道路無料化（政府から自動車所有者等に所得が移る）」
「中小企業法人税率引き下げ（政府から中小企業に所得が移る）」

など、全てが政府から国民への所得移転、言ってみれば贈与のような性質になっているのだ。

子ども手当、高校無償化、農家戸別所得補償制度、暫定税率の廃止、高速道路無料化、この五つの政策だけで、何と10兆円を超えるお金が、政府から国民へ贈与されることにな

る。この10兆円は政府から国民への単なる所得の移転である。所得移転単体ではGDPは1円も増えず、景気対策としての効果はゼロだ。移転された所得が、家計などにより消費や投資として支出され、初めてGDPは拡大する。しかし、移転された所得が支出されなければ、GDPはまったく増えないのだ。つまり、国内の『需要』が増えないのである。

民主党は朝生政権が景気対策の一環として増やした公共事業を目の敵にし、「コンクリートから人へ」という空虚なスローガンを声高に叫んだ。公共事業（コンクリート）から社会保障（人）へ、政府の支出の重点を移すという意図なのだろう。だが、日本のようにデフレ下にある国において、確実にGDPが増える公共事業を減らし、GDP効果が発生しない可能性がある所得移転を増やすということは、経済政策としては明らかに間違いである。

経済的な知見が高い政治家や評論家たちは、一斉に民主党のマニフェストを批判した。マニフェストの内容は、民主党が真面目に日本の経済成長を考えているとはとても思えない、空文（くうぶん）ばかりだったのだ。所得移転の政策で国民にお金を贈与する方が、選挙対策になるという民主党の意図が、透けて見えるようだ。

朝生が行ったように公共事業などで経済成長を実現しても、その果実が国民全員に行きわたるのには時間がかかる。それに対し、子ども手当などでお金を直接的に国民に配れば、

目に見える恩恵が即座に発生する。「成長」ではなく「社会保障」を増やすことを訴えるのは、選挙対策としては確かに有効であった。

しかし、社会保障を増やすには、財源が必要だ。民主党マニフェストの経済に関する三つ目の問題点は、まさにこの財源問題がクリアされていないという点にある。

何しろ、当時の民主党は、朝生の景気対策について、「国債発行では、国の借金が増えるだけだ」と、猛烈な批判を展開していた。そうである以上、財源として国債という選択肢はなく、だからと言って「増税」を訴えては、選挙に勝てない。そこで民主党は、子ども手当などの財源として「埋蔵金」を掲げたのだが、これはおかしい。なぜなら、埋蔵金とは一時的な財源だが、子ども手当は恒常的な支出なのである。

恒常的な支出である社会保障の財源に、これまで貯蓄されてきた埋蔵金を使ったとして、それを使い果たしたときはどうなるのか。「財源がなくなったので、『子ども手当』は終了です」となるのだろうか。無論、そんなバカなことを言った日には、選挙での敗北は必至である。結局、民主党は各種社会保障支出の財源について、適当にごまかす以外に方法がなかった。

ところが、このような民主党のマニフェストの諸問題について、新聞やテレビは一切触れようとしなかった。代わりに、マスコミでは毎日のように、

「政権交代選挙！」
「コンクリートから人へ！」
「ムダの削減！」
など、スローガンのみが連呼され、日本国の歴史的な政権交代、というイメージを煽った。つまり、総選挙自体を「政権交代選挙」として位置付けることで、それ以外の全ての政策論争を無意味なものと化してしまったのだ。
氏本の命を受け八俣も、選挙の争点の矮小化に努めていた。八俣は、国民テレビのプロデューサーたちに、
「コメンテーターには民主党寄りの人物を並べ、『政権交代』の意義について語らせてください」
と、依頼をする。さらに、番組に出演するコメンテーターたちに、八俣は次々に指示を出した。
「今回の総選挙は『政権交代選挙』であると位置づけるよう、発言をお願いします。ひたすら『政権交代』を繰り返して下さい。政情に関する説明など不要です、ただフレーズさえ、心に響けば」

本来、国民の電波を借りてビジネスを展開しているテレビ局は、日本の放送法により、「政治的に公平な報道」を強いられている。

『放送法　第四条（国内放送等の放送番組の編集等）

放送事業者は、国内放送及び内外放送（以下「国内放送等」という）の放送番組の編集に当たつては、次の各号の定めるところによらなければならない。

一　公安及び善良な風俗を害しないこと。

二　政治的に公平であること。

三　報道は事実をまげないですること。

四　意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること』

つまり、一方的な政治的立場を持つコメンテーターだけを並べ報道番組を流すことは、違法なのだ。あまりのやり口に、八俣に対し、

「これは、さすがにまずいのでは」

と懸念を表明するプロデューサーやディレクターもいたが、八俣は平然と、

「何か問題が？　あなたも、放送法はご覧になっていますよね。放送法には『政治的に公平』の定義がありません。それに、番組が政治的に公平であるかどうかなんて、誰が判断できるとおっしゃるの？　人間が判断する以上、その人の主観が必ず入り、客観的な判断など不可能でしょう」
と言ってのけた。
「しかし、総務省が文句をつけてきたら、どうするんですか……電波を止められたら、我々は喰っていけませんよ」
「そのときこそ、あなた方の出番じゃないの」
八俣は、ニコリともせずに答える。
「『総務省は言論の自由を侵害している』と、批判キャンペーンを展開すればいいのよ。その後、『政治的公平か否かの判断を、総務省のような官僚が下すな！』とかやれば、完璧。視聴者はすぐに流されるわ。そうなれば、総務省だって、引き下がらざるを得ません」
業界トップの国民テレビが「今回の選挙は政権交代選挙」というコンセプトに基づいた報道を始めた結果、他社もそれにならい始めた。ついには民放ではないMHKまでもが、今回の総選挙について「政権交代選挙」というフレーズを使い始めるに至った。

マスコミは総選挙の前日まで、一方的な報道姿勢を継続したのに加え、〝報道しない自由〟を駆使した。民主党の鳩川代表は、09年の4月に新代表に就任した際のインタビューで、外国人地方参政権に関連し、

「日本列島は、日本人だけのものじゃないんですから」

と、語った。民主党の代表とは、総選挙の結果次第では内閣総理大臣になる可能性がある人物である。その民主党の代表が「日本列島は、日本人だけのものじゃないんですから」と、明らかに異様な国家観の持ち主であることを自ら暴露したのだ。

ところが、上記の発言が新聞やテレビで取り上げられることは皆無であった。総理大臣になる可能性がある鳩川代表がどのような人物であるか、国民は重要な情報を知らされないまま、投票日を迎えなければならなかった。

マスコミの偏向報道に対し、自民党も手をこまねいていたわけではなかった。劣勢が盛んに叫ばれる中、自民党は投票日の直前に、新聞広告を各紙に一斉に掲載した。さすがに広告の場合は、新聞社は、広告主の希望通りの文言で紙面に掲載せざるを得ない。

『「事実」

民主党による「子ども手当の創設で、実は、子供のいない世帯では必ず増税。
民主党による「年金一元化」で、実は、自営業者・農業者の保険料が大幅にアップ。
民主党による「補正予算の凍結」で、実は、景気対策が中断され、日本経済は大混乱。
民主党による「長寿医療制度の廃止」で、実は、75％もの世帯で保険料負担が大幅に増加。
民主党による「CO_2削減目標25％」で、実は、各家庭の年間負担額が36万円も増加。
政権交代で、あなたの家計に大きなマイナスが。事実をしっかりと見つめ、もう一度お考えください。
日本を守る責任力。自民党』

この新聞広告について、マスコミは、「敗北に追い込まれている自民党が、自暴自棄になり民主党のあら探しをしている」というニュアンスでしか論評しなかった。
また、自民党は偏向的な報道を防ぐために、選挙期間中の朝生総理と民主党の鳩川代表との党首討論について、ノーカットで放送するよう、各局に求めた。テレビ局の最強の武器は、編集権である。映像を切り貼りすることで、テレビ局は事実上、自社にとって都合のいいように放送することができるのだ。

党首討論において朝生総理は、民主党が「消費税について、4年間は議論しない」と表明していることについて、

「年金給付を大幅にカットするか、消費税率をよほど上げないと、民主党の社会保障に関する全額税方式の最低保障年金は実現できない」

と指摘した。何しろ、民主党はマニフェストに掲げた最低保障年金について、財源を全額税金で賄うと主張しているのである。現行の基礎年金給付が20兆円であるのに対し、消費税収入は13兆円だ。民主党の政策には明らかな財源的欠陥があり、朝生がその点を突いたのは当然だった。朝生の指摘に対し、鳩川は、

「20年かけて徐々に移行させていく。1年1年における消費税の負担がぐっと増えるわけではない」

と、苦しい説明で返した。

また、朝生が民主党のマニフェストに書かれた「子ども手当」「高速道路無料化」「農家戸別所得補償」などの「所得移転系」の政策について、

「財源なきばらまき政策で、極めて無責任」

と、激しく攻撃したのに対し、鳩川は、

「財源に関しては心配していない」

と反論し、ダム事業などの中止や延期、無駄遣い廃止、官僚の天下り先の予算削減で9・1兆円を確保できると断言したのである。これはつまり、ムダの削減で賄うということであり、財源の根拠にはまったくならなかった。

一方的に朝生が押した党首討論がノーカットで放映されれば、国民はある程度は事実を知ったうえで、投票に臨める。ところが、国内の各民間放送局は全て、ノーカットでの放映を拒否したのである。これでは、自ら〝偏向的な編集をする〟ことを認めたのも同然だ。さらに信じがたいことには、MHKまでもがノーカット放映を拒否した。

総選挙が間近に迫ったある日、津和野が朝生の街頭演説の取材に行くことになり、雪乃も同行した。

吉祥寺駅の前に自民党の選挙カーが止まり、駅前の広場には数えきれないほどの大群衆が集っている。おそらく、5000人は固い。

朝生総理が選挙カーの上に姿を見せると、数千の聴衆が一斉に大歓声を上げた。雪乃は07年の総裁選挙のとき、新宿アルタ前で初めて朝生の演説光景に遭遇したことを思い出した。あの時と同じように、朝生の人気は凄まじい。

いつも通り朝生節の演説が始まると、観衆から黄色い声が上がる。すごい熱気だ。吉祥

寺という土地柄の故か、若い人が多い。朝生が手を振ると、人々は懸命に手を振り返した。まるで、アイドルのコンサートのようだ。

隣では、津和野が暑さにふうふう言いながら、盛んにメモを取っている。明日の見出しは、きっと「朝生人気健在！　吉祥寺駅前に大群衆が集う」といった感じだろうか。津和野が書くなら多分、勢いのあるタイトルと記事になるだろう、と、雪乃は漠然と考えていた。

ところが、翌日の興産新聞に掲載された記事は、雪乃の予想を大きく裏切るものであった。

「朝生首相の演説　聴衆は明らかな自民支持者ばかり」

「平成14年の参院補選。当時の大泉首相がJR松戸駅前（千葉県）で街頭演説した際、約2000人の市民が駆けつけ、身動きがとれないほど混雑していたのを思い出す。大泉元首相の人気の高さを身にしみて感じた。

今月7日、都議選取材も兼ねて朝生一郎首相の街頭演説が行われたJR吉祥寺駅前（武蔵野市）に赴いた。支持率が低迷しているとはいえ、一国の首相。おそらく、大泉元首相

のときと同様に、駅前は群衆で埋め尽くされるだろうと予想。
ところが実際には、道路にも商店街の前の通路にも混雑は見られず、容易に歩ける状態。あまりの人の少なさに、『これが支持率29％の現実なのか？』と苦笑いさえ浮かんだ。
しかも集まった人々は、朝生首相の発する一言ひとことに『その通り！』と相槌を打つ、明らかな自民党支持者ばかりである。しらけた表情で通り過ぎる通行人も多かったように思われる。それでも朝生首相は街頭演説後、会場に詰めかけた〝支持者ら〟と満面の笑みを浮かべながら握手を交わし、満足げな表情で会場をあとにした。
自民党都連関係者に『この街頭演説は、単なる内輪うけではないのか』と質問したところ、決して否定はしなかった。『これでは選挙は厳しい』。記者は実感せざるを得なかった」
雪乃は愕然とし、ちょうどフロア内にいた、津和野の姿を凝視した。平常通り、〝流行のスイーツ〟にぱくつきながら、盛んに同僚に話しかけている。雪乃は寒気がした。
昨日、自分は間違いなく、吉祥寺駅前にいたのだ。大群衆が駅前に詰めかけ、商店街のアーケードの中まで人々で埋まっているのをこの目で見た。聴衆のあまりの混雑に、警官が通行人に「立ち止まらないで、進んでください」と、大声で交通整理をしていたほどだ

った。

それに、雪乃は人々の反応を注視していたのだ。その中で、朝生の発言に対して「その通り！」と相槌を打つ者など皆無であった。誰もが真剣に朝生の話に聞き入り、「朝生さーん！」「がんばれ！」と懸命に叫んでいた。その光景を、雪乃はこの目で確かに見たのだ。

それが、朝生と自民党を明らかに貶める記事に仕立て上げられている。津和野本人か、あるいはデスクの原田の意向かも知れない。どちらにしろ彼らは、朝生の人気が高く、演説に数千名が駆け付けたという〝真実〟を、国民に知らせたくないのだ。

朝生へのマスコミによる嫌がらせとしか見えない報道攻勢、未だ続く中井へのバッシングに、雪乃は日々、懊悩（おうのう）を募らせた。この状況下で、朝生も中井も選挙に突入するのか？どう見ても、不利な条件が揃っている。しかも最大の障壁（しょうへき）はマスコミ報道……他でもない、雪乃が身を置く業界こそが、朝生たちの足を引っ張っているのだ。

敗北への道筋

苦い思いを反芻していた雪乃は、「中井が選挙出馬の方針を決めた」と一報が入ると、考える間もなく取材担当に立候補した。しかも意外なことに、原田はあっさりと許可を出してくれたのだ。さらに幸運は重なり、担当カメラマンが神庭となる。列島に総選挙への期待がいやおうなく広がる中、雪乃は神庭とともに、北の大地に下り立った。

初めて訪れた北海道・十勝で、雪乃はまずその土地の特異性に驚かされた。町から2~3分外れただけで、牧場や農地が広がる。噂には聞いていたが、隣家が非常に遠い場所が多い。北海道での選挙活動は、通常の選挙戦の厳しさに、その広大な面積ゆえの苦労が加算されると、雪乃は今更に気付いた。

早速、中井の選挙戦に密着し始めた雪乃は、その人気ぶりを目の当たりにし、正直なと

ころ驚いた。もちろん、雪乃は中井に好感を持っていたが、一般国民は連日のように中井のバッシング報道を見せられていたはずなので、おそらく人気は下火だろうと考えていた。

しかしその予想は、良い方向に裏切られたのだ。日の丸に必勝と書かれたハチマキを締めた中井が町を歩くと、人々が一斉に集まり、中井へ握手を求めた。そして中井は、力強く応える。

中井は、選挙戦略としてマスコミに対しオープンを貫いた。記者やテレビ局スタッフは、中井の選挙事務所の中までも自由に出入りできたのである。

どこに行っても、中井のまわりには報道陣がついていた。キー局、大手新聞社の記者が常に中井を取り囲んでいる。雪乃は非常に驚くが、同時に嬉しかった。どのような報道であれ、この熱狂が日本全国に伝わるのは間違いないからだ。神庭も盛んにシャッターを切り、物凄い枚数の写真を撮っていた。

厳しい取材スケジュールをこなしホテルに戻ると、雪乃は神庭がその日に撮った写真を見せてもらった。中井はしかめっ面のことも多いのだが、ときどき見せる笑顔が素敵なのだ。神庭の腕は良く、中井の格好良い瞬間を撮り溜めた画像は増え続ける。雪乃にとっては、この時間が1日の中で最も楽しい時間だった。

雪乃は眠りに就く前、今日1日の各社の報道について確認した。しかし、探せど探せど、

中井の選挙戦に関する報道は出てこない。雪乃にしても、いくら記事を書いて送っても、まったく採用されず、フラストレーションは溜まる一方であった。1週間が経った時点で、雪乃はしびれを切らし、原田に電話をかけた。

「なぜ、採用していただけないんですか？　写真一枚、数行の記事一つ載らない。興産新聞だけでなく、他紙やテレビでも報道がないようです」

「つまり、現在、ニーズがないことには、紙面は割けないんだよ。テレビに関してもおそらく同様だろう……公共の電波たるもの、いち政治家の選挙動向に執心する暇はないんだ」

「ニーズうんぬんに関しては、わたしには分かりかねます。では、紙面でなくてもかまいませんし、せめてネットニュースにだけでも載せていただけないでしょうか」

「検討しておくよ」

真意の見えない原田の答えに、雪乃はますますイラついた。

その後も、中井陣営が有利になるような情報は、一切報じられなかった。それどころか、2月のローマにおける〝酩酊会見〟の映像が、地元のテレビで繰り返し流されたのだ。これは明らかに、放送法第四条で定められた「政治的に公平であること」に反している。しかし、それを公に指摘する者は出てこない。

雪乃ははらわたが煮え返るような思いだった。中井への個人攻撃にしか過ぎない行為を、人々はおかしいとは思わないのか？　また、たとえ中井が愛飲家だとしても、それに何の問題があるのだ？　中井が、国と民を大事に思い、そのための政策を実行に移そうとたゆまぬ努力をしている。それでよいではないか。酒を飲む、飲まないなど、どうでもいい話題だ。

政治家に問われるべきは、政策につきる、と雪乃は思う。素晴らしい政策を提案し、実行に移し、国民を幸福に導くならば、その政治家の個人的事情など、どうでもよい。一点のシミも許せない、と言う人々は〝政策はさっぱりだが、本人は聖人君子のような候補〟を選ぶ方がよいのか？　たとえその人物が、国を弱体化し、民を不幸に陥れるとしても。

選挙公示日の直前、中井陣営の総決起大会において、経済評論家の御宅久幸（みたくひさゆき）が講演を行った。講演において、御宅は中井に対し、延々と説教をし、

「ローマで薬を飲んだと言っているが、誰も信用していない。政治家として期待されているのだから、お酒をやめなさい」

と発言したのだ。

中井は困惑した。酒をやめろ、と言われても、ローマでの会見時、中井は酔ってなどい

なかったのだ。多少、ワインのグラスを傾けたのは事実だが、酔うような量では決してなかった。しかも自分は体調不良の状態でありながら、無理やりに会見に出席させられたのだ。それにもかかわらず、ここで〝断酒宣言〟などした日には、「中井は酩酊して会見に臨んだ」という歪んだ報道を、認めることになってしまう。

咄嗟に様々の機転をきかし、中井はその場を何とか誤魔化した。が、御宅の講演が終わった直後、会場の一人が壇上に駆け上がったのだ。

「御宅先生もああおっしゃっているのだ。今ここで、酒をやめると断言しろ！」

彼はこう叫び、中井に迫った。突拍子もない事態に、中井は必死で考えを巡らした。変な汗が滲んでくる。ここまでお膳立てをされれば、もうこの場は、流れに従わざるを得ない……。不本意ながら、中井はマイクを握った。

「それでは、日本のために、皆さんのために……」

あくまで、場を収めるための言葉だった。

しかしこの後、複数のマスコミが、「『日本のため、酒を断つ』中井昭二氏、地元で宣言」といった見出しの記事を掲載する。中井の〝断酒宣言〟は、瞬時に日本中を駆け巡ったのだ。テレビに登場したコメンテーターたちは、次々に、

「選挙対策のために、今さら断酒宣言とは、情けない」

「中井は、ローマで酔っ払っていたことを認めた。日本の恥だ」
と騒ぎ立てた。
民主党陣営も喜び勇んで、中井の断酒発言を利用した。「中井がローマで酔っ払い、国際的に恥をさらした」という内容のビラが大量に作られ、十勝中で配られるという怪事にまで発展したのだ。結果、盛り返しを見せていた中井の支持率は、またもや急降下した。
その後、中井は、見かねた支援者の一人から、「土下座をするように」と助言を受けた。酩酊会見について土下座をし、国民や有権者に謝罪の意を示せ、と言うのだ。
中井は土下座を断固拒否した。自分は悪いことなどしていない。謀(はか)られ、酩酊会見という汚名を被った。しかしそれ以外の自身の人生は、国家のため、国民のために、この身を捧げた、無私の日々そのものだったのだ。土下座など、決してしてはならない。
支援者が帰った後、妻のよう子は、ぽつりと言った。
「昭二さんがしないなら、私が土下座しようか？」
すると中井は、猛然とよう子を振り返った。
「お前が土下座するなら、俺は、死ぬ」
激務と、度重なる心労で痩せた妻の顔を、中井は見つめた。
十勝どころか日本中から、バッシングの矢が降り注ぐ。おそらく自分は、落選する。ど

ちらにしろ敗北するなら、堂々と戦い抜き、敗れよう。自分を応援してくれた人々の思いに応えるために。

戦えど戦えど、当選への道は見つからず、ただ敗北へ向かう道筋を、中井は全力で走っていた。

＊　＊　＊

選挙区内の夏祭りに中井が参加すると聞き、雪乃と神庭は会場へ赴いた。

人々の前に中井が姿を現すと、群衆から歓声が上がった。中井はよう子とともに、地元・帯広の文字が入った浴衣を着ている。提灯の灯りに照らされ、夜の中に、二人の着る白地の浴衣が浮かび上がった。

この道の果てまでも、踊る人の波は終わらないように見える。数百の人々の熱狂の中、盆踊りは続いた。中井に握手を求める人々は後を絶たず、結局、中井は端から端まで、ほぼ全ての参加者と手を握ることとなった。

雪乃はよう子に声をかけた。

「中井先生、凄い人気ですね。手応えをお感じになっていますよね」

「そうね、本当に苦しい、厳しい選挙なのですけど……こんなにたくさんの方が応援してくださって、もうきっと大丈夫、なんて思ってしまいます」
一瞬だったが、よう子の上気した笑顔を見られ、雪乃はホッとした。
言い終えるとすぐに、よう子は他の支援者の元へ走り寄る。その姿に、神庭も言う。
「辛いだろうに……ご夫婦ともに立派だね。悲壮感を漂わせることなく、ひたすら気丈に振る舞って。それに、絵になる。俺、こういう写真を撮るのが好きだよ」
「うん……キレイな光景……こんなにキレイなのに、ここにいる人以外には、永久に知られないんだ……」
響くお囃子（はやし）の音、群衆の明るいざわめき。夏祭りの夜は、時間を経るごとに美しく熱を帯びる。雪乃は心中で、神様に願った。
（中井さんへ勝利を、とは言いません。それは、一人ひとりの有権者が決めることだから。でも、どうか神様、この人の真価を、皆さんに伝えてくださいますよう。お願いします、日本を見守っているという、八百万の神様。
どうか、真実を、人々に）

願うことしかできない自身がふがいなく、雪乃は悔しさを噛みしめた。原田はどうやら、雪乃の送る文章や画像を無視しているようだった。なぜなのか、その理由は断言できない。ただ、わたしには力が足りない、という事実が、骨身に沁みた。

乱舞する日の丸のなかで

２００９年8月30日。投票日を迎えた。

マスコミが「政権交代選挙」と名付けた第45回総選挙の結果、それまでの最大野党であった民主党が実に３０８議席を獲得し、自民党はわずか１１９議席と惨敗。１９５５年の結党以来、初めて衆院第一党の座を失ったのである。

選挙前に間メディア社会研究会が実施した、有権者１０００人への意識調査によると、有権者が投票の際に重視した政策テーマは「１・景気対策　２・年金　３・医療」の順番であった。それに対し、テレビが放送した番組時間を分析すると「１・年金　２・医療　３・教育」の順であった。自民党が選挙戦において強調した「景気対策」は、実際に放送された「年金」の番組時間の１割程度に過ぎなかった。結果的に、自民党が選挙戦を戦う

に際して強調した「景気対策」が、多くの報道の中に埋没してしまったのである。
もっとも、有権者の得票率をみると、民主党の得票率が47・4％であるのに対し、自民党は38・6％だった。得票率では10％の差がないにもかかわらず、自民党の議席が民主党の3分の1程度に過ぎなかったのは、まさしく「小選挙区制度」の賜物である。現行の小選挙区制度においては、各選挙区で議席を得るのは一人のみだ。つまり、10％どころか1％の得票率の差が生じるのみで、国会における議席数が激変してしまうのである。
総選挙の結果を受け、9月16日、時の内閣総理大臣・朝生一郎は総辞職し、民主党の鳩川政権が発足した。
凄まじい逆風の中、朝生は議席を維持したが、盟友である中井昭二前財務大臣は落選した。比例復活すらできないという大惨敗であった。中井は、記者会見において、
「私には何の力もなくなったが、皆さんにご恩返しをしたい」
と、淡々と敗戦の弁を述べた。
偏執的に繰り返し報道された、〝酩酊会見〟。ハイエナのように中井を追いかけ続けた、捏造のバッシング。その報道を信じた人々からの、心ない誹謗(ひぼう)中傷。中井は、本来の選挙戦とはまったく関係ない部分で、戦い続けることを余儀なくされたのだ。
毒矢の雨の中を戦い、中井の身体はすでに蝕まれていた。重度の腰痛、度重なる風邪に

苦しめられる中、睡眠薬で無理やりに不眠症を抑え込んだ。中井はこれからの自分に何ができるのか、悩み続けた。

9月14日、中井は自らのホームページに宣言した。

「私は今後新たに決意を持って進んでいきます。発信していきます。『日本が危ない』から」

天から与えられた自分の責務を思って、中井は書いた。そこには、中井らしい、繊細ながらも不屈の精神が、垣間見えるようだった。

政権交代が決まった夜、雪乃は泣いた。別に、雪乃は自民党に肩入れしていたわけではなく、正直なところ政党などどうでもよかった。ただ、悔しかった。あれほど魅力的な朝生、そして中井。二人の行く先々には常に歓声が飛び交い、人々の熱狂があった。あれが、国民の〝素〟の反応だったと、雪乃は思う。しかし、マスコミの報道により人々は誘導され、二人の真の姿は歪められたのだ。歪んだ報道によって、そしてその報道を鵜呑(うの)みにした国民によって、政権交代は実現したのだ。

通勤するのさえ、雪乃は辛かった。我ながら甘えている、と自分を叱咤激励するものの、気分の上昇は難しかった。少しでも業務に間が空くと、朝生の顔、中井の顔が脳裏に浮かんで離れなくなってしまう……。

そんな折、いつも通り憂鬱に出勤した雪乃は、社内がバタバタと落ち着きがないのに気付いた。

いったい何の情報が入ったのか。雪乃は咄嗟に、原田を探した。原田は雪乃の姿を認めると、すぐに口を開いた。

「中井昭二が死んだぞ」

雪乃は、頭をぐわんと殴られたような気がした。あまりの衝撃に、体が震えた。

「どういうことでしょうか？　死因は？　場所は？　……それは、確定情報なのですか……？」

「確定だ。10月4日、自宅にて、不審死」

雪乃は仕事場から抜けた後、急ぎ自宅で喪服に着替えた。自宅から中井の告別式会場までは、徒歩圏内だった。マンションを出た雪乃は足を速めた。気持ちがはやり、落ち着くことはできなかった。

告別式会場まであと数百メートルというところで、雪乃の目に、店頭に並ぶ花々の姿が飛び込んできた。

(中井先生は、チューリップがお好きだった……)

足を止め、美しくアレンジされた花束に目をやる。今は秋、当然チューリップは置いていない。それならばせめて、代わりのお花でよいから、先生のために選びたい。

雪乃は色とりどりのブーケを順に眺め、迷った末に、黄色とオレンジ系統の花でまとめられたミニ・ブーケを手にした。普段はブルーや白の花が好きな雪乃だったが、今日は寒色系の花を選ぶことができなかった。悲しさに押しつぶされそうになるからだ。だから、元気いっぱいのオレンジを。

雪乃はメッセージカードとともにレジに向かった。小さなカードに、急ぎ、言葉をしたためる。様々な言葉が胸を去来したが、結局、書くべきことは一つしか見つからなかった。

〈中井先生　日本を守るために戦ってくださり、ありがとうございました〉

メッセージを添えたブーケを手に、雪乃は会場を訪れた。参道にはすでに、参列客の長蛇の列ができていた。ざっと目算しただけでも、数百は軽くいくと思われる。

参道の脇に秩序正しく並ぶ参列客の横で、多数のマスコミ関係者が蠢いていた。彼らは参道を我が物顔で行き来している。大手テレビ局数社の名前を、雪乃は確認した。著名人が通ると、キャスターとカメラが一斉にそちらへ移動し、けたたましい声でインタビューを始める。しかしなぜか、中井の懇意にしていた議員やタレントは素通りされ、反目していたと囁かれる議員、中井とはほぼ付き合いのなかったであろうタレントなどに、マスコミ関係者は殺到した。

雪乃はいらいらした。告別式会場で大騒ぎをする非常識もさることながら、彼らはみな、ラフ過ぎる普段着でこの参道に陣取っているからだ。グリーンのTシャツに穴の開いたジーンズのカメラマン、ドットのパーカを着た女性スタッフ。せめて黒色の私服で来ようとは思わないのか？　上司からそういった指示すら受けないのだろうか……。

1時間以上並び、やっと受付にたどり着いた雪乃は、香典とともにブーケも預けようとした。ちょうど近くにいた案内の係りの男性に、声をかけてみる。

「すみません、このお花を中井先生に……」

しかし、雪乃の声はそれ以上、続かなかった。嗚咽がもれそうになり、しゃべれなくなってしまったのだ。明らかに泣くのを必死で我慢している雪乃の表情を見、男性はさっとブーケを受け取った。

「秘書の方に必ずお渡しします、大丈夫」
もう雪乃には、ただ頷くことしかできなかった。
告別式会場の中央には、在りし日の中井の大きな写真が飾られている。中井独特の、照れたような笑顔。見る人も思わず笑みをこぼすような、引力を持った表情。
つい数日前まで、この人は生きていたのだ。でも今は、いない。これほど多くの参列者が中井に最後に会いたいと、何かをしたいと、今日ここに来たのだろう。しかし、中井はもう、いない。
死ぬ、ということ。雪乃は、近しい身内の死に立ち会ったことが未だない。両祖父母、両親ともに健全だ。親戚の葬式に出席したことはあるものの、ただの義務としての参列だった。人の〝死〟ということの実感を持ったことがなかった。
いま雪乃は生まれて初めて、心が痛む告別式の場にいる。雪乃は気付いた、人が死ぬということは、その人と二度と話せなくなる、ということなのだと。その人の笑顔も、声も、一緒に過ごした思い出も消えることはないが、もう新しい言葉を聞くことはできない。残された者がいくら思っても、彼岸の人と通じる術はないのだ。
焼香を終え、もう一度中井の温かい笑顔に挨拶すると、雪乃は会場から出た。すると、参道には、参列者の波があった。彼らは帰らず、参道の両脇に静かに並び、中井の出棺を

待っているのだ。
静かだった。話し声は少なく、ときおり鳥の鳴き声のみ響いていた。雪乃は社に戻ろうと考えていたが、思い直した。自然と足が向き、列のすいている場所へおさまった。
様々な人が、そこにはいた。きちんと喪服に身を包んだ主婦らしき女性、黒のジーンズに黒いシャツの若い男性、会社から抜けて来たようなグレーのスーツの男性、目深に帽子を被った若い女性。服装も年齢も、てんでバラバラだった。何の統一感もない人々が、黙って集まり、同じ目的のために待っている。
雪乃は空を見上げた。淡水色の窓が、枝の間に無数に透けて見えた。秋の物寂しい日差しが、幾筋も降り注ぐ。悲しみの色濃い空気が、辺りに満ちている。
突然、雪乃の隣の女性が泣き出した。彼女のすすり泣きが周囲に響き、それにつられるように、他の嗚咽も聞こえてくる。雪乃は涙腺がゆるむのをこらえ、両手を握りしめた。
すると、クラクションが大きく響いた。
棺を乗せた車が参道に現れる。ゆっくりと、黒塗りの車体が、参列者の中を通り過ぎてゆく。
声が、どこからともなく湧き出し、響き始めた。
「中井さん、ありがとう」

「ありがとうございました」
「頑張って」
声は大波のように辺り一面に打ち寄せ、砕けずに全てを巻き込み、さらに大きなうねりとなっていく。
雪乃の目の前を、中井の妻、よう子が通り過ぎようとする。咄嗟に、雪乃は叫んだ。
「中井さん！　……ありがとう、ございました」
よう子はすぐに、声の主の方に顔を向けた。そして雪乃と視線を合わせると、軽く頭を下げた。雪乃は胸が締め付けられるように苦しくなった。こんな恐ろしい運命に翻弄されながら、よう子は美しく、気丈に見える……。
参道にはいつの間にか、無数の日本国旗が翻っていた。大小様々の国旗が、秋の日差しの中で揺れている。雪乃は、期せずして胸が熱くなるのを感じ、自分のことながら驚いた。ありがとうの声、翻る国旗、血縁でもない人を悼む嗚咽の響き。以前の雪乃ならバカにしていたであろうモチーフが、ここには溢れている。そして雪乃は今、それらを美しいと思い、誇らしくさえ感じた。
この、日の丸が風にたなびく日本を、守ろうと戦った中井昭二。その男を、バッシングや偏向報道で貶め続けたマスコミ。見殺しにした、わたしたち日本国民。

メディアとは、報道とは、〝情報〟とは、何なのだろうか？
テレビから、新聞から、情報が日々垂れ流されている。それが「正しい」のか「正しくない」のか分からないまま、多くの国民は情報を享受し、吸収する。いつの間にかそれは世論を形成し、まるで国民全ての意志であるかのように大きな顔をし始める。
ネットも同様である。あらゆる情報が氾濫する、混沌の海。大手メディアで報道されぬ輝かしい真実が転がっていることもあれば、誰かを貶めるためだけのウソが大手を振って歩いている。そのウソ、デマが、誰かを殺してしまう可能性を秘めているのにもかかわらず。情報の正しい使い方を知らないユーザーは、一人の人間を容易くリンチする。結果、その人間がひっそり命を絶ったとしても、彼ら加害者は何の罰も受けない。それどころか、自分たちが人殺しをした事実にさえ気付かぬまま、のうのうと残りの生をまっとうするのだ。
マスコミやネットから情報を得た人々は、現実社会で、口さがない噂を伝播（でんぱ）させる。人の噂は結集し、力を付ける。影響力を持つ者が、ある者を指し、「気狂いだ」と言えば、その周囲の人間は盲信する。エビデンスも何もが皆無のまま、「かの人物は気がふれている」と、まことしやかに囁かれ、それは信奉者共通の認識となる。最終的に、そのデマはスケープゴートのもとに濁流となって押し寄せ、晴れて生贄（いけにえ）は殺されるのだ。

〝死ぬ〟のではない、〝殺される〟のだ。流言飛語によって、殺されるのだ。市井の人々は、殺人の共犯者に過ぎない。彼らは、〝人殺し〟なのだ。

雪乃は今、はっきりと気付かされた。

わたしはこれまで、マスコミによる、歪んだ報道や、国民に対する刷り込み、根拠のないバッシング、高慢なレッテル貼りに怒りを持ってきた。しかし今、気付いた。マスコミは単なる、情報の媒体に過ぎない。裁かれるべきは、マスコミの罪ではない。裁かれなければならないのは、その情報を受け取る〝人〟なのだ。

人。マスコミやネットなどの媒体からの情報に疑問も持たず、情報の真偽を確認もせず、与えられた情報によって判断をくだす、人。彼らは無責任だ。自分の頭で考えないということは、明白な罪。罪を自覚すべき、裁かれるべきは、わたしたち人間だったのだ。

帰途に就こうと、雪乃は無理やりに自己を奮い立たせた。すると、雪乃の目に、道路に立つ神庭の姿が飛び込んできた。雪乃は咄嗟に走り出し、彼に抱きついた。驚いた体の神庭だったが、黙って雪乃の頭を撫でた。人の体温に触れたことで、雪乃の目からは我慢していた涙が溢れ、頬に一筋の道を作った。

雪乃は参道を振り返った。滲む景色の中に、無数の日の丸が乱舞している。

兆し

中井の死について、マス・メディアはこぞって報道を行った。しかしその報道内容は、ほとんどが半年前の〝酩酊会見〟に占められ、彼の政治家としての輝かしい功績について触れられることは少なかった。

通夜、告別式、故郷でのお別れ会における、人々の中井への思い。山と並んだ花束、参列者の悲痛な表情と涙、中井へのお礼の声の合唱が、表舞台に出ることはなかった。

雪乃は、長らく封印していた、アラン様へのメールを書いた。

〈アラン様、ご無沙汰しております。もうご帰京されていますか。昨日の中井先生のお別

れ会では、お言葉を述べられたと聞きました。わたしは仕事により伺えず、大変残念に存じます。
わたしは、中井先生の功績を語り継いでいきます。あのバッシングがどのように暗い影を落とそうとも、わたしは、わたし自身の感じたことを語る。中井先生は、日本にとって、必要不可欠な方でした〉
《お別れ会会場には、全国から花が届けられていた。その数、数百に収まらず、おそらく千を優に超える。会場内に入りきらぬ花が、道路まで溢れた。スノー君、君にも見せたく思った》
葬儀の後、遺族には寂しい日々が訪れる。通夜、告別式、参列者へのお礼。それらが済むと、残るのはただ〝大事な人がいなくなった〟という事実である。為すべき行事が終わってしまうことは、残された者にとって辛いことだった。
そんな中、中井の妻のよう子は、弔問に訪れた際の玉林の言葉を、幾度となく思い出した。
ローマでの事件の後、財務官へと出世した玉林太郎は、中井の麻布高校時代の同級生で

ある。さらに、中井が財務大臣を務めていた時期には中井の部下だった。その玉林が葬儀の場でよう子に語ったことは、まったく不可解であった。

「ローマの会見の前に、財務省の職員が迎えにいったときには、中井大臣は正常な状態でした。財務省が保管している記録でも、そうなっています。だから、中井大臣の名誉はこれで永遠に守られます」

正常な状態とは何だ？　財務省の職員、とは誰のことだ？　……名誉が永遠に守られる、とは、どの口が言うのだ……？

財務省の記録で「会見前、中井財務相は正常な状態だった」となっていたとして、それが何だというのか。維持されるのは、財務省の名誉だけではないか。記録がどうであろうと、踏みにじられた夫の名誉は永遠に回復されない。私たち遺族は、死ぬまで苦しみ続けることになるのだ。

……このままで終わることはできない、私は負けられない。志半ばにして他界した、夫のためにも。私は、過酷な運命に真正面から立ち向かう。人を蹴落とすのではなく、自身に与えられた使命を果たす、という方法で。

涙を拭い、窓外の空を見上げる。よう子は、夫の尊い意志を継ごうと、決意を固めた。

＊　＊　＊

八俣ひろみは、一大プロジェクトを完遂した自分へのご褒美として、久方ぶりの長期休暇を取っていた。箱根のオーベルジュに滞在し、何をするでもなく気ままに過ごすのだ。

この日もベッドに寝そべりながら、ファッション誌のページを繰っていた八俣は、それにも飽きるとテレビをつけた。と、驚くべきニュースが流れた。

「緊急ニュースが入りました。国民テレビの会長で、一時は日本民間放送連盟の会長も務めていた氏本清次郎氏が、昨夜、急性心不全で亡くなりました」

八俣は跳ね起きた。

「氏本会長は、10年以上の長期にわたり国民テレビの会長職を務め、読解新聞の渡会会長とともに、マスコミ界のツー・トップと称されるほどの人物でした」

男性アナウンサーが、繰り返し訃報を読み上げている。

慌て、帰途に就いた八俣は、小田原駅のキオスクの前で、足を止めた。最も部数が多い週刊誌である「週刊文潮」の表紙に、気になる文字を見かけたのだ。すぐに買い求め、件のページを探す。するとそこには、大きなゴシックのタイトルが躍っていた。

「朝生を潰し、中井を殺した女？　国民テレビの〝ゲッペルス〟美人記者Y」
八俣の額に脂汗が浮かんだ。
関係者しか知りえぬ詳細な情報が、そこには網羅されている。誰が「週刊文潮」にリークしたのか。しかも、絶大な後ろ楯を失ったこのタイミングで、暴露記事が出たのは、なぜだ。
足下から、そろそろと寒気が上ってきた。〝空気〟が、変わろうとしているのかも知れなかった。

＊　＊　＊

朝生の執務室のドアが開かれ、若い女性が飛び込んできた。朝生の盟友の娘であり、以前から血縁のように可愛がってきた女性である。彼女は今回の選挙で、晴れて二度目の当選を果たしたのだ。
「おじ様、この度はお世話になりました！　わたし、応援してくださった皆さんのために、頑張ります」

童顔に、はじけるような笑顔を浮かべるのを見、厳しかった朝生の表情は和らいだ。
「おめでとう、さくら子君」

終章

冬の向こう

テレビ画面に、あやの笑顔が大写しで現れた。ＴＮＳのバラエティ番組で、きゃあきゃあと騒ぎながら、タレントたちとのゲームに興じている。

読解新聞記者として活躍し始めている若菜は、つい先ごろ、財界ＶＩＰに密着取材をするため海外出張し、東欧数カ国を回ったことを誇らしげにメールしてきた。

一方、雪乃はと言えば、興産新聞内で大きな仕事も任せられず、雑用にばかりこき使われているような状態だ。

しかし、雪乃は記者を辞めようとは思わない。興産新聞を辞めようとも思わない。組織の矛盾、欺瞞(ぎまん)に気付いても、それですぐに辞めてしまったのでは、何の意味もない。それはただのワガママだ。わたしは、社会人なのだ。自由に生きる権利を持つ代わりに、社会を支える義務を負っている。

あやも若菜も、彼女らは自分の生き方を選んだ。それは、誰が正しいとか、間違ってい

るとかいう問題ではない。自分の頭で考え、生きることが重要なのだ。
わたしはもう、空気に流されない。自分の意志で、自分の判断で、針路を定める。

朝生の退陣から、はや3カ月である。今日はクリスマス。雪乃はかねてからの予定通り、有給をとった。
今日雪乃は、朝生に会いに行くのだ。記者としてではなく、一ファンとして朝生に会い、言葉を伝えたいと思った。
雪乃は活字の世界に身を置きながら、活字の限界をいやと言うほど認識していた。人と人のコミュニケーションは間接的であればあるほど、誤解が生まれやすい。直接会い、思いを伝えることがなぜ大事なのか、雪乃はこの3年間で学習した。
電話なんて、メールなんてダメだ、直接、心のこもった言葉を。

クリスチャンである朝生が、クリスマス・ミサに毎年訪れる教会。雪乃はそこで、朝生の到着を待った。都会の悪条件ながら、夜空に冬の星座がちらついているのが見える。
冬の大三角、オリオン、プレアデス星団。またたく星々を見上げながら、白い息を吐く。
雪乃はクリスチャンではないが、教会の静謐（せいひつ）な雰囲気が好きだ。日本人というのは本当に

不思議だ、と雪乃は思う。告別式は多くの場合が寺で執り行われ、クリスマスともなればほとんどの国民がお祝いをし、年末年始は神社に赴くのだ。その鷹揚（おうよう）な心もちこそが、本来の日本人の良さのように感じる。ある特定の事象について突き詰め排除するのは、似つかわしくない行為だ。〝赦（ゆる）し〟という感情が如実（にょじつ）に表れるのが、日本人の国民性なのではないだろうか……。

ミサの始まる数分前、教会前にシルバーの車が停まった。後部座席から降りる朝生の姿を認め、雪乃は大きく伸び上がった。被っていたコートのフードをはねのけ、自分の頰をぴしゃっと叩く。

「総理！」

雪乃の声に、朝生はゆっくりと振り返った。

「ああ、久しぶりだね」

朝生の頰はこけ、その体軀（たいく）もわずかながら縮んだように見える。雪乃は少し心がぐらついたが、無理やりに元気な表情を作った。朝生はやつれたとはいえ、その瞳の奥に宿す光は強く、相変わらず雪乃を惹（ひ）きつける。

この3年、雪乃はずっと不思議だった。確かに様々の教えを乞うた、そして教えられた。一国民として〝朝生総理〟を応援し、バッシングから朝生を少しでも助けたいと思った。

しかしそれだけではなかったのだと、今更に気付く。
立ち止まってくれた朝生に、雪乃は急いで走り寄った。
「総理、今日はお伝えしたいことがあり、参りました。お時間は取らせません、あの、1分だけです」
SPたちが周囲にいるものの、構ってはいられない。次はもう、いつ会えるか分からないのだ。朝生の目の前に立つと、雪乃は必死で言葉を並べ立てた。
「わたし、総理の笑顔が大好きなんです。あなたの笑顔は、見る人に勇気を、希望をくれる。……まるで、ヒマワリみたいだと、思う。あなたの笑顔は、人々のあらゆる陰鬱をはねのける。夏の日差しを浴び、ヒマワリ畑の真ん中に1本ぬきんでて顔を出す、ヒマワリだと思うんです」
一気に口に出してしまったら、雪乃の脳裏には様々の思い出が蘇ってきた。国も民も、歴史も文化も、政治も経済も、全てが大事だ。そのために、頑張っている朝生を応援したかった。しかし、それ以前に、わたしはこの人を〝好き〟だった。
恋愛感情などではない。異性として格好よい様に憧れた。理知的でありながら、人懐っこい笑顔を見せる性格に魅了された。あのような根拠なきバッシングの猛威に晒されても、折れず、戦い続けた姿にこころ打たれた。そして盟友であった中井への、悲痛で、愛情深

い、その視線……決して〝矜持（きょうじ）〟を崩さぬ生き方に、わたしは泣きたいほどの感動を覚えたのだ。

朝生総理を、この人を、わたしは大好きだったのだ。

「わたしは知恵と力をつけ、誤った情報と戦います。今は非力な小娘だけれど、やれるところまでやってみます……だから……だから、総理も、頑張ってください。総理の本当の出番は、今回ではないんです。わたしはそう信じて、微塵も疑いません……いいえ、わたしだけじゃなく、おそらく日本の多くの人がそう思っています。他者から流し込まれる情報を鵜呑みにするのではなく、自分自身の頭で考え判断しようとしている多くの人が、総理を応援し、総理の背中に見習い、自分も頑張ろうと行動し始めているんです」

声が震えるのを抑え、雪乃は一番伝えたい言葉を発する。

「今回は序章に過ぎない……総理、総理の本当のお役目は、これからの、未来にあるんです」

朝生は、雪乃の顔をじっと見た。その表情が微かに歪んだように見えたが、すぐ元に戻った。

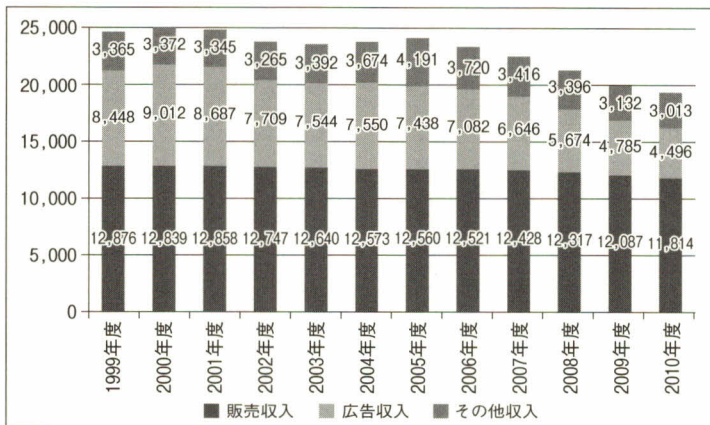
「君の言うとおりだ。私ももちろん、知っているさ」

言い終えると、朝生は小さく笑った。

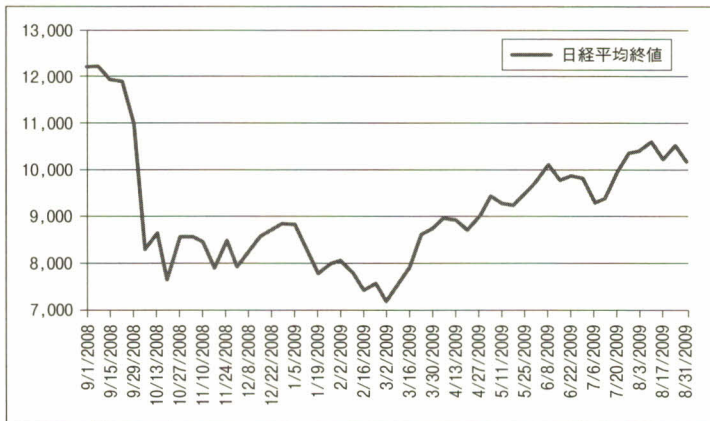
辺りにはいつしか、讃美歌が響き始めていた。教会の中に入っていく朝生の背中を見つめ、雪乃は冷えた自分の手をコートのポケットに突っ込んだ。

失ったものは大きかった。多くの犠牲が払われ、その傷は決して癒えることはない。これからも、辛い出来事は必ず起き、行く手を阻み続けるだろう。それでも人は、前に進まなければならない。そして人を救うのは、〝人〟でしかあり得ないのだ。

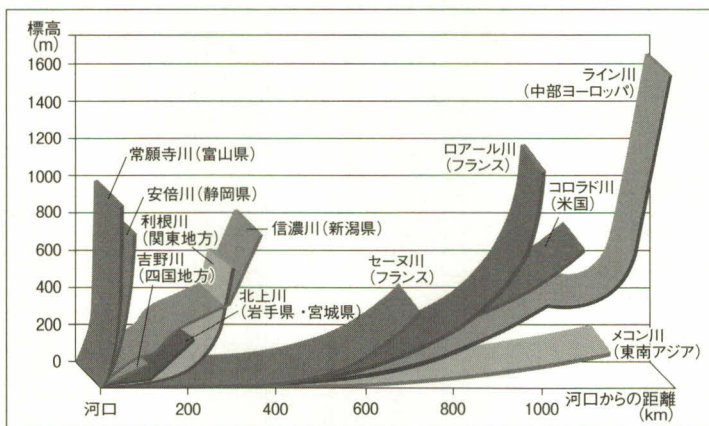
今は寒風吹きすさぶが、次の夏、向日葵は必ず咲く。雪乃は、そう、信じている。

【図 2-1】 日本の新聞社の収入内訳(単位：億円)

出典：日本新聞協会

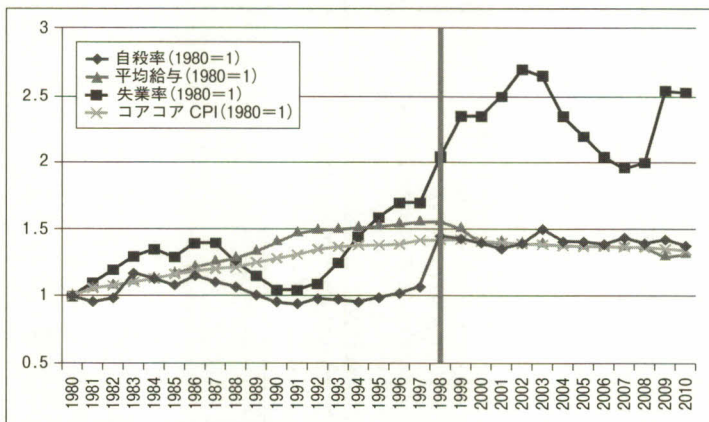
新聞社の売上は6割程度が販売収入（購読者への新聞の販売）だが、利益はほぼ100%広告に依存している。広告収入の減少は、新聞社の利益を直撃する。

【図 2-2】 2008 年 9 月―09 年 8 月 日経平均の推移(単位：円)

出典：Yahoo! Inc.

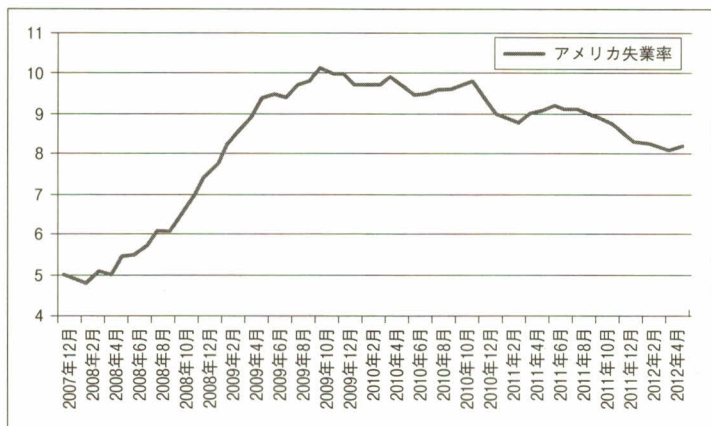
日経平均は、リーマン・ショック時点の1万2000円から、1カ月半後の10月28日には、一時的に6000円台まで暴落。わずか1カ月の間に株価は4割も下落した。

【図 2-3】諸外国と比べて急こう配の日本の河川

出典：国土交通省河川局

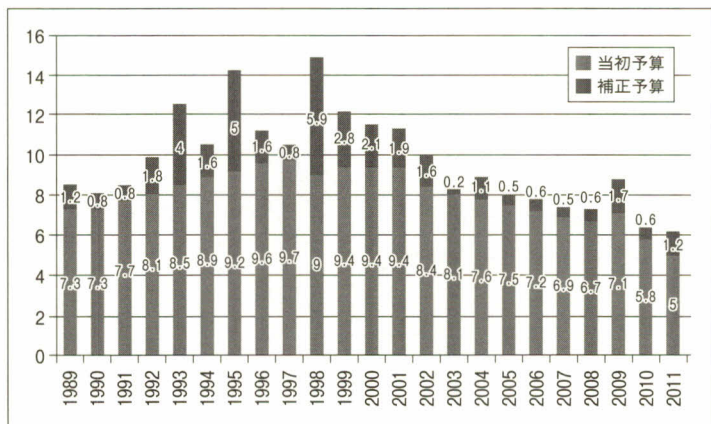
日本の河川は急こう配で、河口までの延長距離も短く、流域面積も狭い。世界の大河に比べると滝のようである。

【図 2-4】日本の自殺率、失業率、平均給与、コアコアCPIの推移

出典：国税庁、警察庁、統計局

97年の緊縮財政開始以降、日本の「コアコアCPI（外的要因により価格が変動するエネルギー及び食料品を除いた物価水準）」は、98年をピークに下がり始め、99年以降は、一度も前年を上回っていない。

【図 2-5】アメリカの失業率(単位：%)

出典：外務省「主要経済指標」

リーマン・ショック以降のアメリカの失業率は驚異的なペースで上昇。09年10月には10%の大台を超える。リーマン・ショック前の４%台と比べ、１年強で倍増した。

【図 3-1】日本の公共事業費の推移(単位：兆円)

出典：内閣府

09年、景気対策に向け、三次にわたる補正予算を組んだ年の公共事業費の総額は、５年ぶりに８兆円を上回った。

参考文献

・『とてつもない日本』
麻生太郎著（新潮新書）
・『異論Ⅲ』
麻生太郎著（麻生太郎事務所）
・『自由と繁栄の弧』
麻生太郎著（幻冬舎文庫）
・『麻生太郎の原点　祖父・吉田茂の流儀』
麻生太郎著（徳間文庫）
・『飛翔する日本』
中川昭一著（講談社インターナショナル）
・『日本を守るために日本人が考えておくべきこと』
中川昭一著（PHP研究所）
・『美しい国へ』
安倍晋三著（文春新書）
・『幸福論』
アラン著・神谷幹夫訳（岩波文庫）
・『幸福について―人生論―』
ショーペンハウアー著・橋本文夫訳（新潮文庫）
・『情報操作のトリック　その歴史と方法』
川上和久著（講談社現代新書）
・『「空気」の研究』
山本七平著（文春文庫）
・『プロパガンダ』
エドワード・バーネイズ著・中田安彦訳／解説（成甲書房）

・産経新聞
・読売新聞
・毎日新聞
・毎日デイリーニューズ　コラム WaiWai
・朝日新聞
・時事通信

本作品はフィクションです。

○著者紹介

三橋貴明（みつはし・たかあき）

中小企業診断士、経済評論家、作家。1969年生まれ。東京都立大学（現・首都大学東京）経済学部卒業。外資系IT企業など数社に勤務した後、中小企業診断士として独立。大手インターネット掲示板での、韓国経済に対する詳細な分析が話題を呼び、『本当はヤバイ！　韓国経済』（彩図社）を出版、ベストセラーとなる。

著書に、『ぼくらの日本』（扶桑社）、『グローバル経済に殺される韓国　打ち勝つ日本』（徳間書店）、『真説　日本経済』（ベストセラーズ）、『世界でいちばん！　日本経済の実力』『日本人がだまされ続けている税金のカラクリ』（以上、海竜社）など多数。

また、さかき漣氏との共作に〝小説仕立ての経済解説書〟という新たな試みで大ヒットした『コレキヨの恋文』（小学館）がある。

■ブログ「新世紀のビッグブラザーへ」
http://ameblo.jp/takaakimitsuhashi/

さかき漣（さかき・れん）

作家。
幼少時より、華道など日本古来の伝統芸能を修得。
大学では哲学と美学芸術学を専攻。
美術関係の職業などを経て、文筆業に。
日本語と日本文化の保持に貢献したいとの思いから、作家活動を展開している。
ベストセラー『コレキヨの恋文』（小学館）に執筆協力として参加。

真冬の向日葵
新米記者が見つめたメディアと人間の罪

二〇一二年九月十九日　第一刷発行

著　者＝三橋貴明（みつはしたかあき）・さかき漣（れん）

発行者＝下村のぶ子

発行所＝株式会社　海竜社
東京都中央区明石町十一の十五　〒一〇四―〇〇四四
電　話　（〇三）三五四二―九六七一（代表）
ＦＡＸ　（〇三）三五四一―五四八四
郵便振替口座＝〇〇一一〇―九―四四八八六
ホームページ＝http://www.kairyusha.co.jp

本文組版＝株式会社キャップス

印刷・製本所＝シナノ印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えします。

ISBN978-4-7593-1262-1　C0095

さかき漣
さかき・れん

作家。
幼少時より、華道など日本古来の伝統芸能を修得。
大学では哲学と美学芸術学を専攻。
美術関係の職業などを経て、文筆業に。
日本語と日本文化の保持に貢献したいとの思いから、
作家活動を展開している。
ベストセラー『コレキヨの恋文』（小学館）に執筆協力として参加。

真冬の向日葵
新米記者が見つめたメディアと人間の罪

ISBN978-4-7593-1262-1
C0095 ¥1500E

定価 本体1500円 +税

海竜社

MAFUYU-NO-HIMAWARI

メディアとは、報道とは、“情報”とは、何なのか?

偏執的な報道を繰り返す **メディアの実態** と
情報を鵜呑みにし、**無責任な判断をくだす人間の姿** を
冷静かつ客観的視点で見つめた本格小説。

裁かれるべきは誰か……

海竜社

出版案内

2012年 8月

- **秘伝ノストラダムス・コード** ――逆転の世界史　荒俣宏氏絶賛!!「ダ・ヴィンチ以上の超人が残した驚異の予言詩を体感できる本!」　竹本忠雄　☆4515円
- **ゲーテ 一日一言**　詩人で劇作家、科学者、政治家。人生を刺激する天才の言葉　木原武一　☆1700円
- **論語の読み方**　一生使える最高の人生実用書。心に響く名解説の新書判　中野孝次　☆1050円
- **50歳からの音読入門**　豊かな日本語に触れる喜びをいま再び!『平家物語』から『夜空ノムコウ』まで　齋藤孝　☆1260円
- **メメント・モリ**（死を想え）　死を見つめ、今を生きる　98歳。自身の闘病生活と生命の危機、臨床医体験からのメッセージ　日野原重明　☆1000円
- **〈マンガ〉相手の心を絶対につかまえる心理術ハイパー**　仕事にも恋愛にも使えるスーパーメソット21!　ゆうきゆう　作画・山上正月　☆1365円
- **履歴書には書けへんけどじつは一番大事なのは人間力や!**　人を喜ばせる85の方法。中村流人生の拓き方　中村文昭　☆1260円
- **赤ちゃんのからだBOOK**　赤ちゃんのからだの不思議と気になるようすの対処法が満載!　小西行郎・小西薫　☆1500円
- **赤ちゃんの遊びBOOK**　赤ちゃんの成長と発達に合わせた遊びをマンガで楽しく紹介!　小西行郎・小西薫　☆1400円
- **赤ちゃんのしぐさBOOK**　成長とともに変化する赤ちゃんのしぐさの秘密87　小西行郎・小西薫　☆1500円
- **おしゃれ上手に 年を重ねて**　いくつになってもキラッと素敵に光っていたい! おしゃれ上手のしあわせ!　西村玲子　☆1365円
- **長生きしたければ朝3時に起きなさい** ――50歳からの病気にならない7つの習慣　52歳で、体重12kg、体脂肪10%減! おいしいやせるレシピが満載!　帯津良一　☆1365円
- **決定版 正しい水の飲み方・選び方**　100歳まで元気に美しく生きる鍵　毎日飲む水に健康の秘密があった! 多くの実証データが明かす、若さと長寿を導く「水」健康法　藤田紘一郎　☆1365円
- **上機嫌の才能**　人間の最上の徳は人に対して上機嫌で接すること。珠玉の言葉集　田辺聖子　☆1400円
- **老いてこそ上機嫌**　老いてこそ、心しなやかに、はずみ心をもって。元気がわいてくる本。　田辺聖子　☆1500円
- **子供の世話になって死んでいきます** ―お金の貯蓄も大事でしょうが、情の貯蓄が尚更です　一生懸命育てた子が、母を粗末にするはずがありません。私は、正々堂々と、子供の世話になって死んでいきます。情のある子ばかりが、私の廻りにいます。　海老名香葉子　☆1365円
- **老いの覚悟**　気張らず、自分らしく。自信を持って、いまを生きたい　下重暁子　☆1365円
- **医者知らず「冷えとり」で完全健康人生**　半身浴、くつ下の重ねばき等万病に効く頭寒足熱の極意　進藤義晴　☆1365円
- **病気にならない「冷えとり」健康法**　病気の元凶は内臓の「冷え」。薬を使わず温めて自然治癒力を高める方法　進藤義晴　☆1365円
- **50歳からの病気にならない食べ方・生き方**　病気のモトを根治して、体の奥から元気になる驚きの健康法　石原結實　☆1400円
- **石原結實のダイエット食堂31日** ――体を温めて代謝をよくする特選レシピ　人気保養所（サナトリウム）のまんぷく健康レシピ大公開! オールカラー　石原結實　☆1365円
- **1日1回冷やごはんダイエット**　おにぎりお寿司で食べながら1カ月5キロ減! リバウンド知らずのすごいダイエット力　白鳥早奈英　☆1050円
- **なぜドイツは脱原発、世界は増原発なのか。迷走する日本の原発の謎**　東日本大震災がもたらした原発の実態を憂国のドイツ在住・国際ジャーナリストが追う!　クライン孝子　☆1365円
- **危機** ―平和ボケ日本に迫る―　今こそ平成維新! この国の周辺で何が起きているのか? 今、日本は戦後最大の岐路に立っている。　志方俊之　☆1470円
- **孔子** 漂泊の哲人　極貧の農民から身を起こした孔子。その苦難の生涯を描き、人間最高の指針『論語』の名言の生まれた現場に立ち会える日本で初めての長編傑作!　竹川弘太郎　☆1995円
- **なぜ日本人は神社にお参りするのか**　この国の在るべき姿を、古来から継承された日本人の神信仰から解き明かす　小堀桂一郎　☆1575円
- **20代で大切にしておきたいこと**　大前研一氏推薦!! プロフェッショナルを目指す君へ。今日から差がつく「生き方の技術」　川上真史　☆1050円
- **失敗から学ぶ**　もがき苦しむ現代の若者たちへおくる、著者渾身のメッセージ　船井勝仁　☆1050円
- **新版 感動する! 数学**　数学のロマンと感動の世界へようこそ! 待望の新版!　桜井進　☆1470円
- **女、一生の働き方** ――貧乏ばあさん（BB）から働くハッピーばあさん（HB）へ　「女の老後」は貧乏になる!? 人生百年時代の新しい生き方、働き方　樋口恵子　☆1500円
- **自分を生き抜く聖書のことば**　あなたの心にやさしく語りかけ、力づける聖書の名句　鈴木秀子　☆1365円
- **老いを楽しむ俳句人生**　俳句と遊ぶ。俳句と暮らす。若返りの道は俳句とともに　金子兜太　☆1365円
- **マイ マタニティ ダイアリー**　毎日、おなかの赤ちゃんの成長がわかる! わたしだけの特別な1冊に　竹内正人　☆1500円
- **マイ・ベビーズ・ダイアリー**（My Baby's Diary）　赤ちゃんの誕生から2歳までを完全記録。プレゼントに最適!!　俣野温子　☆1575円
- **ありがとうが しりたくて**　「ありがとう」を、しりたい天使がいました。人気絵本作家が贈る愛の絵本　菊田まり子　☆1050円
- **小泉武夫のほんとうに美味い話――愛蔵特選**　読んでいるだけでヨダレが止まらなくなる、よりすぐりのあの味この味101選!　小泉武夫　☆1470円
- **貝原益軒の養生訓**　鬼才漫画家のオリジナル訳で構成した『養生訓』163の訓え　ジョージ秋山　☆1260円
- **40歳からの女性の医学**　更年期から元気で楽しく過ごす100の方法　「へんだな」と感じたら真っ先に読んでほしい。女性のからだの一生のお役立ち本　新野博子　☆1470円
- **女性の不快症状は体を温めると必ず治る!**　不調のすべての原因は「冷え」だった! 誰でも今すぐ家庭でできる生活療法　石原結實　☆1365円
- **50歳からのきくち体操**　体が変わる、心が変わる、生き方が変わる! 新しい自分に生まれ変わる奇跡の体操　菊池和子　☆1500円
- **ドクター帯津良一がすすめる 50歳からの楊名時健康太極拳** ―調身・調息・調心 和やかで楽しく幸せに　楊名時健康太極拳の決定版! オールカラーの写真付きで詳しく解説　楊名時・渋谷麻紗　☆1600円
- **DVDでお稽古できる 八段錦・健康太極拳**　毎日続けて、一生健康! 自宅で簡単にできる実演・指導DVDつき　楊麻紗　☆1890円
- **天皇皇后両陛下 祈りの二重唱**　東日本大震災は、祈る両陛下のお姿を国民の胸に刻みつけました。どこからこれほどのお慶しみ、高貴は生まれるのでしょうか。　竹本忠雄　☆1890円
- **皇后陛下お言葉集 歩み 改定新版**　天皇陛下ご即位20周年記念出版! 皇后陛下二十年のすべてのお言葉。　宮内庁侍従職監修　☆2100円

◎ご注文について

小社に直接ご注文の場合は、著者名、書名、冊数および、お客様のご住所・ご氏名を明記の上、代金に送料（ご注文の前に小社営業部までお問い合わせ下さい）を加えて郵便振替「00110-9-44886」または現金書留でご送金下さい。

〒104-0044
東京都中央区明石町11-15 海竜社
TEL 03(3542)9671
FAX 03(3541)5484
http://www.kairyusha.co.jp

定価(☆)は税込価格です